
ExistenceDualism **存在二元論**

かつおだしうめえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ExistenceDualism 存在二元論

【Nコード】

N8608Y

【作者名】

かつおだしうめえ

【あらすじ】

読むと健康に害を与える可能性があります。気分が悪くなった場合は使用を中止し、医者にご相談しましょう。また自分の存在価値に疑いが出た場合は親しい誰かと距離を取ることをおススメします。……そうそう、欲望に負けないように。それでは頑張って意地汚く生きてください。

0・名前も忘れられてしまった女子高生の夢

グレゴール・ザムザは幸運だ。

自分が毒虫であることにすぐに気付けたのだから。

0・名前も忘れられてしまった女子高生の夢

確かに昨日までのあたしはその中にいた。

ありふれた学校のありふれた生徒のありふれたグループ、その中にいた。

成績に興味、性格。共通するものは何でもよかった。ううん、全部共通させた。

たまにどうしても同じになれない子がいたけど、そういう子は例外なくいじめられた。あたしもいじめた。

だって同じになれないことは悪なんだから。

とにかく同じになるように努力した。進むことも下がることもなく常に皆と同じでいられるように。

昨日までのあたしのやり方に間違いなんてなかったはずだ。

なのにどうして今あたしは外にいるのだろう。教室や学校の外なんかじゃない、絶対に行きたくなかった本当の外に。

最初は気付かなかった。ううん、気付きたくなかったんだろうな。通学路を歩き、学校へ。靴を履き替え教室へ。いつもどおりの日常。

だからいつもどおりに教室の扉をあけていつもどおりに「おはよー」と挨拶した。いつもどおりに教室には何人かのクラスメイトが

いたんだけど……いつもどおりなのはそこまでだった。

「ねえ、聞いてよー！ 昨日買い物の帰りにさー、すごい格好の女の子とぶつかっちゃって。ふわっふわの白いレースのドレス着た女の子なんだよ、暑いのによくそんな格好できるよね。ロリ臭い傘まで差してて、コスプレ魂ってやつかなー」

今日はこの話題で盛り上げようと思ってた。失敗しないように何度も繰り返した。つまらないことかもしれないけど、失敗しないことも努力の一つなんだ。

「……えっと、すいませんよくわからないんですけど……」

返ってきたのは視線をそらしながらの遠慮がち、ううん、よそよそしい言葉。

「何よー、その他人みたいな話し方はさ！」

「え、だって……」

他人じゃないですか、と目の前の仲間である彼女はそんな顔をしていた。

「あの、あたしの名前、知ってるよね……？」

「あ、はい、それはもちろん……」

彼女が答えてくれたのはもちろんあたしの名前。ただしその後「なんであたしこの人の名前知ってるんだろ……」という呟きつきで。

嫌われちゃったのかなー。それともいじめのターゲットなのかな。ま、いいや。

とりあえずホームルーム始まるし、席すわつとこ。

昨日までの仲間達があたしの方を見ながらひそひそと話をしている。

にらみ付けると怯えたように視線をそらす。中には明らか敵意を持ってにらみ返して来る子もいるけど。

うわ、やっぱいいじめだよこれ。

ハゲ担任は嫌いだけど相談するしかないのかな。でも学校に行かなくていい理由ができたからいいのかな？

なんて思ってたたらハゲが教室の扉をガラッと開けて入ってきた。教室をいやらしい目でじろじろ見てる。女子高生ばかりだからってわかりやすいんだからさ。

ハゲの視線はあたしの席でぴたりと止まった。

ちよ、ハゲ、見んな……って……。

あたしが教室の中にいたのはそのときまで。

教室になんていられなかった。

あたしは扉を開けて廊下の外、校門の外へ逃げた。

ハゲの視線はあたしの元友達と同じ目をしていた。

上履きのまま学校の反対へと走る女子生徒に周囲の人々は注目の視線を向けてくる。

やめてそんな目でみないで。

誰でもいいからあたしを仲間に入れて。

走って走って住宅街の真ん中にまでやってきた。空は明るいのに歩いている人間は誰もいない。朝だけど学生やサラリーマンはみんなそれぞれの場所に行った時間だからだ。

「ごきげんよう」

後ろからの声。とてもかわいくてふわふわした声。そして懐かしい言葉。いつもの朝だったら欲しがることもなく聞こえたはずなのに。聞かないふりして走り去るなんて無理だ。

振り返るとそこには、ああ思ったとおりだ、白いレースが重なったドレスを着た女の子がいた。中学生くらいの身長なのに甘ったるい服装のせいで小学生にも見える。

長い髪を風になびかせている姿はまるで人形のよう。話のネタにした白い傘さえ立派なオブジェクトに見える。

もしかしたらあたしは夢を見ているのかな。

本当はまだベッドで遅刻しそうになるくらい寝ているのかな。そうだったらしいのに。

あたしより小さな彼女はぱたぱたとあたしの胸元にまでやってきて白く生気がない顔で見上げてきた。
なぜだろう。

そのときあたしはものすごくこの細い首をへし折りたくなかった。知らずに両手が伸びていた。

「ただど掌が指が少女の首に届く前に

「あなた、とてもかわいそう」

という言葉に凍り付いてしまった。

「あ、あたしがかわいそうってバカじゃないの!？」

「だってあなた、お友達がいなくなっただんでしょう? 全員。かわいそう。とてもかわいそう、かわいそう」

かわいそう、かわいそうといいながら少女はころころと笑った。

「やっぱり殺しとけばよかった。」

「だめ、殺すだけじゃ足りない。」

長くて艶のある髪を引きちぎってガラス玉みたいにきれいな瞳に指を突っ込んでかき混ぜてつぶして、それから、それから……

「でもお友達なら私が紹介してあげるから心配しないで」

「友達……」

「なんて甘い言葉。」

「目まいがするほどに。」

「そうだ、あたしが欲しかったのはこの言葉だ。」

「誰でもいい、あたしを仲間に入れて。」

「あなたが欲しいのはこのお友達?」

「本当にそれまで誰もいなかったはずなのに」

「いつの間にかドレスの少女の隣に真面目だけど暗そうな大学のお姉さんが立っていた。」

「それともこのお友達?」

次に隣に現れたのはズボンを腰で履いて口にピアスをした怖い感じの男の人。

「全員バラバラ。どんな関係なのかも想像できないくらいに。」

なのみんな同じ笑い方をしている。ドレスの少女と同じ、残酷な笑いを。

「それとも私がいいのかしら？」

どこかの童話のようなことを言う少女。

「あ、あた、あたしは……」

どんな人でもいい。人でなくてもいい。

あたしは一人になりたくない。

一人になったらきつと死んでしまう。だから、だから

「そう、一人になりたくないのね」

「な、なんで、言っていないのに……」

「うふふ、大丈夫。誰もあなたのことを責めない、誰もがあなたに賛同するすてきな世界に連れてってあげる。だから、抵抗しちゃうめ」

「え？」

そこから先は何も考えられない。

だってあたしの存在は消えてしまったんだから。

くすくすとドレスの少女は笑った。

そこには少女以外の姿はない。

「新しいお友達が増えたわ、みんな」

誰もいないはずなのに誰かと話し続ける少女。

傍から見れば気がふれたとしか思えない。

が、それよりも恐ろしさを感じる。

敵意を怒りを恐怖を侮蔑を、ありとあらゆる負の感情を少女にぶつけたくなる。

殺意のままに犯したくなる。

彼女が人間だなんてきつと誰も思わない。

アンチカテゴリーについての私論

アンチカテゴリーについての私論

ケース1：十六歳 高校生（女）の場合

発症したと思われる日に登校するものの友人と会話を交わした後
に校外へ出る。その後の行方は不明。一月後に出欠簿をまとめてい
た事務員が失踪に気付く。患者と顔を合わせていた生徒や教職員、
患者の両親などは患者の失踪に気付いてはいたが口をあわせてこ
う言ったという。

「もう一度会ってしまう機会を持つくらいならなかったことにし
たい」

最もよくあるケースだ。

ケース2：十九歳 短期大学生（男）の場合

彼の発症は学内で実験を行っているときであった。その場にあっ
た教授を含む複数の人間から硫酸、硝酸等の劇薬を被せられて死ん
だ。大学のサークル長を務めるほど皆に慕われていた人物だった。
敵意を抱かせる病気ではあるが実際に殺されるケースは珍しい。
どうやら患者と関わりの濃い人間程殺意も濃くなるようだ。

隔離心象彷彿症候群。

通称アンチカテゴリ。（読者にわかりやすくするために以降この名称を使用する）

自分と関わりのあつた人間に疎外感、もしくは激しい敵意を抱かれる。

本人に発症の自覚はなく、また直前まで発症の前触れなどはない。発症に至るメカニズムも不明であるが少なくともウイルスなどの流行性ではないと思われる。

新しい精神疾患だと論ずる学者もいるが私は遺伝子もしくは脳髓に原因があるのではないかと考える。

そのためには患者を調べる必要があるが病症故に患者本人に会うことは難しく、また政府による患者の保護も行われているため（保護された患者は政府監視下の保護施設に送られる）私個人の力だけでは面会は難しい。

アンチカテゴリを自称するもの、他薦で疑いのあるものをみたこととはあるが、どれも本人か周囲の性格、環境に問題があるだけでアンチカテゴリ患者ではなかった。

この病気を理解するためには政府だけでなく社会全体の協力が必要だろう。

1・気弱な中学生 鈴平亮一の夢 1

人は生まれながらにして幸福へと努力する生き物だ。
たとえそれが間違っただ選択だとしても。

びり、びり、びり。

びりびりびりびりびりびりびり。

僕は常に努力してきた。

何につて、本当は僕にもよくわかっていないのかもしれない。

しゃーっ、びりびりびり。

あえて言うのなら幸せにだろうか。

自分から不幸になるうとする人間はたぶん、いないと思う。

びり、びり、びり……。

夕方、カーテンを閉め切ったくらい部屋の中。

僕は教科書を切り裂いていた手を止めた。

見たこともない芸術家の顔が半分は裂けていた。どんな作品を残したかなんて知らないけどたしか死後になってようやく認められた人じゃなかっただろうか。

生きている間に認められない人生なんて意味がない。

(それはきつと僕自身にも言えることだ)

どこで選択を間違っただらう？

どこでどんな努力が足りなかったんだらう？

僕の視線は知らずに壁に貼られた一つの新聞記事に向かった。日付はちょうど半年前。

その事件のことを思い出す。

『男子中学生ひったくりを捕まえる！』

半年前、僕は友達とゲームセンターに行った。普通の男子中学生として本当に標準的な行動だ。勉強しないで中毒患者のように通いつめたり、遊ぶ金欲しさに年下の子を脅したわけじゃない。

この選択は間違っただけじゃない。

適当に新作ゲームを遊んだ後、どこに行くか友達と話しながら店を出た。もちろんこの選択も間違っただけじゃない。

「きや　ッ！　あたしのカバン返して！」

というかん高い声。

思わず振り向いた。サングラスにニット帽という怪しい男が女物のバッグを片手にこちらに走ってきていた。店から出たばかりの僕達には気付いていない。

避けるなんて選択肢はなかった。

別に僕は極端な運動オンチじゃない。

でもアレを避けられるのは運動系の部活で相当反射神経を鍛えている人だけだろう。記憶の誇張はあるかもしれないけど、と僕は思い返す。

タツクルに近い姿勢の男と何もできずに固まってしまった僕。

バスン、ごろごろごろごろ。

重さと痛みと転がる視界と耳にがんと響く音のせいで一瞬だけ思考が飛んだ。

「て、てててっ」

頭を押さえて瞼を開けるとそこには顔を真っ赤にした男がいた。邪魔された、と思ったようだ。

「てめえ、よくも！」

男は拳を振り上げた。僕は手を目の前にかざして瞼を閉じた。せめて怖くない選択肢をとったつもりだ。だけどいつまでたっても痛みは降りてこない。

そっとな瞼を開けた。

男の後ろに紺色の制服を着た警官が立って男の手首をしっかりと握っていた。近くの交番から警察官が駆けつけていた。呆然としたまま男が連れて行かれるのを見送った。警察官の人が僕にも来るようにと声をかけた。

……その後のことは興奮でよく覚えていない。

警察署に呼ばれて小さな盾の表彰状をもらった。新聞記者がたった一人だけ取材に来てくれた。少しがっかりした。二、三人くらい来て芸能人のインタビューみたいになるのかと思ってたから。今思うととんでもない勘違いだ。

家に帰れば父さんや母さんに褒められ、父さんにいたっては「お前は俺に似てすっかりした子だ」

と褒めているのか自慢しているのかわからない言葉をくれた。

それでも学校ではたいした事件だったらしい。朝の集会のときに校長に呼ばれて全校生徒の前で褒められた。

皆の前で照れながら挨拶した。違うクラスの子が教室まで僕の様子を見に来た。

そっだ、やっぱりここまで選択肢も間違っていないはずだ。

少し位置がずれていたら友達の方がヒーローになっていたかもしれない。だけどそんな不確定要素がわかる努力なんてできるわけがない。

そして忘れずにちゃんと言ったはずだ。

たいしたことじゃない、偶然だって、何度も何度も。

言ったはずなのに。

……ヒーロー扱いは一週間の間だけ。

「偶然犯人とぶつかったただけなのに調子にのりやがって」

「自分を人気者なんて勘違いしてるんじゃないの？ 気持ち悪い」
「運がいいだけで偉そうにするなよな」

ひそひそと聞こえないようにささやかれていた声は、いつしかわざと自分の耳に聞こえるように隣でしかも大声で話されるようになった。その頃から上履きやカバンが消えはじめた。見つかるのはトイレか焼却炉か花壇の中だ。

校舎の外を歩いていると上からバケツの水を落とされた。臭いし、苦い。わざわざ掃除に使ったあとのを使うなんて準備がいいというか、そこまでやられる覚えはないというか。

「ごつめーん！ お手柄中学生様が歩いているなんて気付かなくてさあー！」

「存在感がないから犯人にも気付かれなかったんじゃないのー？」
「うっつは、ありえる！」

教室に戻って怒鳴り込む気力はなかった。もともとそんな度胸もない。それに怒鳴り込んだとしてもいじめがひどくなるのはよくわかってる。いつからか教師達は問題を起こさないことより問題を隠す方を選択しはじめたから。僕だって明らかに間違った選択肢は選びたくない。

こういうときは親に相談するのが一番だ。

子供いじめられてると知ったらきつと一緒に戦ってくれるはず。戦ってくれなくても引きこもることくらいは許してくれるはず。だからほんの少し勇気を出して訴えてみた。いじめられている、学校にはもう行きたくないんだ、と。

僕の話聞いた両親はなぜか喧嘩をはじめた。

「いじめ？ そんなの知らん。俺には関係ない」

「なによいつもいつもそんなふうに全部あたしに押し付けて！ この子がひきこもりになっていい学校行けなかつたらあなたのせいなんだからね！」

「なんだと！？ 俺は会社で働くという義務を果たしてるんだ。お前も主婦なら義務を果たせ！」

「あたしだってパートで働いてるわよ！ だいたいあなたの仕事つて冷房が効いた会社でインターネットするだけじゃないの！ いいわよね、あたしもそんな楽な仕事で高い給料もらいたいわ。ああ、ごめんなさい、そこまで高くないわよね」

「なっなんだと！？ お前だって寝てテレビ見てるだけじゃないか！」

「あなたがそんなふうに分身の都合のいいとこしか見ないからこないじめられるような子に育っちゃったのよ！」

「人のせいにするな！ だいたい俺の子がいじめられるわけないだろ！ どこの男の血をひいてるんだ！？」

似ていると言ったくせに。

言つとよけいに怒鳴られそうだからやめておいた。でも結局目つきが気に入らないという理由で殴り飛ばされた。

結局二人は『何もしないこと』を何度も主張して僕を部屋へと追いつ返した。

そういう選択をしたんだ。

僕に父さん達の選択を変える力はない。

いったいどこで選択を間違えたんだろう。

いじめられる前？

表彰されたとき？

ゲームセンターの前？

もしかしたらずっと前、生まれることを選んだときかもしれない。

家を出る選択肢も考えた。

でも家を出てもどんなふうに住生活すればいいのかわからない。そんな教科書どこにも存在しない。

きつとどこかの駅で保護されて家に戻される結末だ。そして家に引きこもることも許されずに無理矢理学校に行かされる。そしてイジメが再開する。

そして今は殺されたとしても仕方ない病気が存在する。

きつとむごく殺されたとしても誰も何も言わない。きつと真実なんてわからないまま自分も患者の一員にされる。

そうだ、人間は幸せに向かうために生きてるんじゃない。

死ぬために生きてるんだ。

いい学校に入るための勉強も友達にいい顔するための付き合いも、ひたすら親の機嫌を取るだけのつまらない顔も、全部無駄なことだ。

だから僕は僕の人生の教科書と努力の結果を破り捨てている。

教科書もノートも返って来たテストもあの新聞記事も全部、全部。

この部屋は屑だらけ。塵だらけ。無駄だらけ。

無駄なものが散った床に一番の無駄である自分が転がる。

「は、はは、はは……」

むなしい笑いが口から漏れた。

なぜか楽しかった。

楽しいことさえ無駄に思えた。

思うことさえ無駄に思えてそれさえも無駄に……ああ、そういえば一番の無駄を壊すのを忘れてた。

僕は僕を殺すことにした。

壁の時計の針が頂点で重なる頃。〇時。

僕は財布だけ持って部屋の扉を開けた。

足音を忍ばせて玄関に向かう途中、リビングの前。さつき僕をさんざん怒鳴りつけていた父さんや母さんは起きて笑っていた。夜中にやるくだらないテレビ番組をみながら。

全部くだらないことなのに。無駄なことなのに。

そっだ、どうせ無駄なら好き勝手やってやるっか。

例えば台所から包丁を持ってきて後ろからそっと近づき、無防備な首を切り裂くとか。

……きつとそれも無駄なこと。

だからせめて振り向かないように外に出た。

星一つも見えない真っ暗な空。昼間はずっと雨が降っていた。見えないけど、きつと分厚い雲が空一面に広がっているんだろう。まるで自分の心のように。違うのは規則的に立ち並ぶ街灯や家々から漏れる光が足元を照らしていること。

暗闇に迷う選択をすることはなさそうだ。

道行く人の姿はない。時間を考えれば当たり前なんだろう。

途中でコンビニに行きロープと缶コーヒーを買った。

缶コーヒーは怪しまれないために。

ロープは……自分を殺すために。

目的地は家の近くにあるそこそこ広い公園。

昼間は親子連れや外回りの会社員、健康のために歩いている老人でそこそこのにぎわってる場所だ。僕だって小学校のときに遊びに

来たことある。

だけど今は夜。昼とは別世界と言ってもいい。

進む歩幅は小さかったはずなのに僕はいつの間にか公園の門の前に立っていた。光る自動販売機の側面に大きな虫がごつごつと体当たりしている。そんなことしてもいつかどこかにたどり着けるわけでもないのに。

僕は早く適当な枝を見つけないと。

首を吊るのに適当な枝を。

白い袋の中からロープを取り出して僕は奥に進んだ。

あーあー、まるでじゃなくて不審者そのものだよ……。

誰かに見られないうちに先に行かないと。

と思っても夜の公園に来る人間なんているわけない。しかも日付が変わった時間に。

きいきいと泣くようにきしむ金属音がどこから聞こえた。

ブランコが風に揺られている音だ、そうわかっていているけれど振り向くことなんてできるわけない。

生きていようが死んでいようが何かに出会ってしまったらきつと自分を殺す気なんてなくなってしまう。

……そんなことを思っていたのが悪かったんだろうか。

「ごきげんよう。こんな真夜中にお出かけ？」

声を聞いてしまった。女の子の声を。

み、見ないで逃げようかな、なんて一瞬だけ考えた。

同時に逃げて怖がるのが無駄にも思えた。

だから、振り向いた。

きいきい、と泣くブランコの上

そこにはやっぱり女の子がいた。普通の女の子じゃない、薄い色のドレスを着ている。理由はわからないけど何か違和感を感じる。珍しい格好だから？ それは少し違う気がする、でもやっぱりわからない。

それよりも一瞬だけ、女の子の周りにたくさんの人が見えた。

う、う、ゆ、幽霊？

と思っただらざわざわと風が吹いて木々が揺れた。あ、なんだ木の影だったんだ。いたと思ったはずの人影はいなくなっていた。

でも女の子は残っていた。

幽霊、じゃないと思う、たぶん。

「こんな真夜中にお出かけ？」

女の子は同じ言葉を繰り返した。

「そ、そういう君こそなんでこんな時間にこんなところに」

「私はお友達と遊びにきたのよ」

フリルの少女は乗ったままのブランコを揺らす。重そうなスカ―

トの中身が見えそうになって僕は慌てて視線をそらした。

「女の子がこんな夜中に危ないよ。どんな友達か知らないけど、お家の人が心配してるんじゃないの？」

「どうして？ 誰が決めたの？ それに私のお家の人心配しないわ」

「そっか……」

僕の家族も同じだ。だから深く追求しないことにした。

「あなたも公園に遊びに来たんでしょ？」

彼女はブランコから降りると僕へと駆け寄ってきた。

「……………」

最初に感じた違和感の理由がわかった。

ちっちゃい子みたいな格好にしては身長が高い。僕と同じくらいだ。

「あのさ、君、何歳？」

思わずそんなことを聞いてしまった。

「お年？ 十四」

「十四！？」

「そう」

僕と一緒にじゃないか……。

この子いったいどういう子？

高そうなドレスを着てるのにこんな真夜中に外を歩くんなんて。友達と遊ぶなんて言ってたけどどういう友達なんだろう。化粧が派手な子や頭の悪そうな格好した男と遊ぶ姿を想像してみた……できないかった。だって似合わないよ。

「ねえ、あなた。あなたの名前は？」

がんばって想像しようとしてるところを、袖を掴まれて引っ張られた。

「えっと、亮一。鈴平亮一」

「りょういち。すずひらりょういち」

音を確かめるように彼女は僕の名前をゆっくり呟いた。

……恥ずかしい。

逃げ出そうにも袖はしつかりと掴まれたままだ。

「そういう君の名前は？」

「私は………私はエス」

少しの沈黙のあとに少女は答えてくれた。

まるで外国人みたいな名前だ。ドレスを着てるのも外国の子だからかな。でもしゃべるのはうまい。

「亮一は何しに来たの？」

「僕は、えっと……」

ダメだ、言葉をつまらせてしまった。聞かれたくないことがあるって言ってるようなものだ。僕だって友達と待ち合わせで、くらい言えばよかったのに。

まさか自分を殺しに来たなんて言えるわけがない。

それに 責められた気がした。

黙りこんだ僕を見てエスは小首を傾げた。そして僕の手元に視線を投げると小さく手をパン、と叩いた。

「わかったわ。公園に遊びに来たんでしょう。だって縄を持ってるもの。縄跳び？」

「え、ええっ縄跳びい？」

こんな真夜中に荷造り用のロープで縄跳びか……。筋トレしてる

んですけど言っても不審者として通報されそう。

しかも遊びに、という言葉が出てきたってことは筋トレじゃなくて、小さな子供がやってる遊びの方が。

どっちだろう。どっちも無理がある。

「そう、縄跳び」

違うの？

じゃあ何しに来たの？

黒いガラス玉の澄んだ目がそう聞いている気がした。

答えられるわけがない。

「……そうだよ、縄跳びしに来たんだよ」

「あら、それなら私と一緒に遊ばない？」

ひかれると思ったのに。……こう来るとは思わなかった。

「え、えつとそれはさすがに……」

「そう。じゃあ少しだけお話ししない？」

「話くらいなら……」

縄跳びと比べたらこっちの選択肢の方がいい。

それにエスとは少しだけ話をしたくなった。

エスが再びブランコに腰かけたから僕も隣のブランコに座った。

板や鎖がずいぶんと頼りなく感じる。きっと僕が大きくなっているからだ。

「亮一にはお友達いる？」

「う……い、いるよ」

いた、なんて過去形で話すのはやめた。

いきなり聞かれたくないことを聞かれました。考えてみたら僕は聞かれたくないことばかりだ。ああ、嫌になる。逃げればよかったかも。

「私にもいるわ。私の言うことはなんでも聞いてくれる素敵な子ばかりよ」

くすくすとエスは笑った。無邪気で愛らしく、どこか残酷な笑み。お姫様の機嫌を損ねた家来は死刑になってしまいました、なんて

絵本のような言葉が頭に浮かんだ。

「僕もエスの友達になっていい？」

なのに僕の口からはそんな言葉が出ていた。

死にたいのか、僕は。自殺しに来ただけだよ。

「え？」

「や、その、あの、嫌だったらいいいんだよ、べ、別にさ、あは、あはははは」

「嫌じゃないわ」

「言うこと聞かないかもしれないよ。素敵でもないし」

「別に聞かなくてもいいのよ。それに亮一は素敵な人よ」

「あ、ありがと……」

出会ったばかりの僕に言うことだ、お世辞だったことくらいわかってる。わかっているけど、こんなにストレートにしかも女の子に褒められたことなんてないから、その、あうう……なんて返せばいいんだろう。

膝の上に置いたままのコンビニ袋がくしゃりと鳴った。

「ええっと、コ、コーヒー飲む？」

僕は缶コーヒーをエスに差し出してみた。差し出してしまったというか。「君も素敵だね」とか言えばよかった？

……それはさすがに……。

だからと言って缶コーヒー渡したのもかなりおかしい。

ああ、そうだよ！ いじめられてるヤツのコミュニケーション能力なんてこんなもんだよ！ 真夜中にロープと缶コーヒー持つてうるうるしてるヤツに求めるもんじゃないんだよ！ ……なんてこれじゃ逆ギレだし……。

頭の中で自分を責めてエスを責めてまた自分を責めた。

こんなことが知られたらきつとエスは失望して僕に声をかけたことを後悔するはずだ。

そのエスはというと、

「ありがとう」

微笑みながら缶を受け取ってくれた。いつの間にか力が入っていた僕の肩が安心したからか、すっと落ちた。

「ほ、欲しくないなら無理に受け取らなくてもっ」

「いえ、うれしいわ。本当にありがとう」

嘘、じゃないと思う。疑うことは僕の防衛本能が拒否した。

嘘じゃないなら……もしかして開け方知らない？

本当に異国のお姫様だから知らないとか？

「開け方……わかるよね？」

「……ええ」

「だ、だよねっ」

あああ、もうだめだ、めちゃくちゃだ。

できるなら全部やり直したい。リセットなんかできやしない。もしできたら僕は最初からやり直す。そういえばここには自分をリセットしに来たんだ。今更実行する気なんてさんざんそがれてるけど。

「じゃっ、じゃあもう帰るから！」

限界だった。

この場に残って思わぬ選択肢を選び続けるより帰って不貞寝した方がいい、絶対。

ブランコから降りてエスに背を向け、僕は公園の入り口へ歩こうとした。

「亮一。あのね」

「な、何？」

振り返らずに返事をした。

「もう死ぬ気はない？」

「……………っ！」

かあつと顔が熱くなるのを感じた。

知ってたんだ、全部。

だから縄跳びだなんて突拍子もないこと言い出したんだ。

「また明日ね、亮」

僕は返事をしないまま走り出した。

またね、なんて言わなかった。

明日なんてなければいいのに。

戻ることないと思っていた家に帰ると、明かりがついている部屋は一つもなかった。二人とも寝ている。

僕は二人を起こさないようにしのび足で自分の部屋まで戻った。できるだけ音をたてないようにドアを閉めながら、深く深く、ため息を吐く。

明日からどうしよう。

でも考えることだけは散々やったんだ。

選べる選択肢なんてもうない。今からの数時間で答えが出てくるような簡単なものじゃない。そして時が過ぎてもよくなることだとも思えない。

おまけに教科書は全部破いた。

……学校、行かなきゃだめかなあ。

すべての現実から逃げるために布団を被りこんだ。

……。
……。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

優しさのかけらもない電子音に起こされた。

いつの間に眠っていたんだろ。無情に音量をあげながら叫び続ける時計の頭を叩き、僕は布団からずるずると這い出した。

週ごとに時間設定できるデジタル時計なんて買っただけじゃなかった。わざと寝過ぎすこともできやしない。

ベッドから出たあとのはのろのろと半ば自動的に制服に着替えて、カバンを手にとって部屋を出た。教科書を入れる必要はない。

頭がずきずきと痛い。

リビングには誰もいない。父さんはもう家を出ていて母さんはま

だ寝ている。いつもどおりだ。僕もいつものように食パンと牛乳だけを腹に放り込んで、テーブルの上に置いてあった弁当代わりの五百円玉を掴んで学校に向かった。

どこかでさぼってしまおうか。ダメだきつとすぐにバレる。学校に行かなかつたら教師から家に連絡があるだろうし、外をうるついでいるときに補導でもされたらもつと問題は大きくなる。

だけど今日の曇空のように憂鬱だと思っていた登校はそんなに苦じゃなかった。

昨夜出会った彼女のことを思い出していたから。

エス。

彼女は夢だったのかもしれない。

もしかしたら生きている存在でもないのかもしれない。

だけど彼女は「また明日」と言ってくれた。

明日なんてなければいいと思ったのに明日は来た。

自分を殺そうとしていたことが知られたときは恥ずかしかった。

でも明日は来た。

僕は生きている。

全部エスのせいだ。

彼女が夢じゃなかったら、夢だとしても明日会えるとしたら名前以外のことも教えよう、必ず。そして嫌じゃないのなら、彼女のことももつと聞いてみよう。

まだ誰もいない公園の入り口を見ながら思った。

公園まではよかった。

ここから先はどうしようか。

公園の中で時間をつぶす。ダメだ、制服姿じゃ不審に思われるだけだ。

家に戻る。起きてきたばかりで機嫌の悪い母さんに叩き出されるだけだ。

じゃあどうする？

……選択肢なんて最初から一つしかない。

鈍い歩みのまま、とうとう校門の前まで来てしまった。せめて途中でトラックが突っ込んでくるなんて選択肢もあつたらよかったのに。そうか、その方法があつたか。突っ込まれるんじゃないかと僕から突っ込むって。

だけど今更戻るわけにも行かない。

それに今は少しだけやりたいことがある。

エスに会いたい。

だから一番問題が起きない選択肢、僕が我慢することを選ぶことにした。

昇降口でカバンの中から上履きを出す。上履きは盗まれて捨てられるか燃やされるから持ち帰る癖をつけた。

教室へとぼつぼつ歩く僕の背中を教師や他のクラスの生徒までもがせせら笑っている気がする。無視無視無視無視無視無視無視無視無視無視。廊下で一回深呼吸。覚悟を決めて教室の扉を開けた。

僕が教室に入った途端、今まで廊下まで聞こえていたクラスメイ卜達の会話がぴたりと止んだ。シン、とテスト中のような静けさが訪れる。

こんな反応ははじめてだ。

どうせまた新しいいじめの方法でも考えたんだろ。

来るなら来いってんだ。

半分くらいやけになりながら僕は自分の椅子に座った。もちろん椅子の上に画鋲が置かれていないかを確かめて。

しばらくもたたないうちに僕の背後に誰かが立った。

黒板消しか？ それともバケツの水か？

どちらかわかれば対処、というか覚悟も違ってくる。僕は横目で窓に映る自分と、背後の人間の姿を確かめてみた。

予想は大きく外れた。

そこに映っていたのは金属バットを大きく振り上げた生徒で

「……………ッッ！！」

思い切り横に跳んだ。椅子に座っていた、隣にも机が並んでいる、

そんなことは頭から消えていた。

ガタタツガンツ！

「ったあー……」

背中を机の脚にぶつけてしまった。変なふうに転んだからだ。痛みにせきこみながら僕は相手をにらみつけようとした。そのくらいの反抗なら許されるはずだ、そう思っていた。

そんな場合じゃなかった。

目の前には天板が叩き割られた自分の机があった。天板の下のスチールがバットの形に歪んでいる。

もしも一瞬でも避けるのが遅かったら。

そんなことは考えたくなかった。

これはいじめなんかじゃない。

殺意だ。

僕にバットを振り上げた張本人　数ヶ月前に僕と一緒にゲーセンに行った彼はまだ生きている僕の姿を見て舌打ちした。

もしこれがいじめだったら無様に転がった僕をバカにする笑い声が響くだろう。

なのに今日は元友人と同じように同じようにバットやカッターナイフを構えている生徒だけ。女子生徒は教室の片隅でおびえたように僕をにらんでくる。

まるで猛獣が教室の中に入ってきたかのようだ。

もちろん、猛獣とは僕自身のことだ。

「な、なんで、だよっ」

やっとしぼり出した僕の声に答えてくれる親切なヤツはいない。

一部は様子を見て逃げるように、そして一部は僕にトドメをさすために。じりじりとゆっくりと確実に動き出した。

どうして？

なんで？

昨日の少女のような言葉がぐるぐると頭の中を支配する。

疑問に思ってる暇はない。このままじゃ殺されてしまう。

スチール板にめり込んだバットを持ち上げようとする元友人。だ
けどぎざぎざに裂けた天板のせいではなかなか取り出すことができな
い。でもいずれは取り出せるはず。僕を殺すために。

このまま逃げないままでいたら、きつと僕はバットで頭を砕かれ
る。ボールペンで眼球を抉られる。カッターナイフで首筋を裂かれ
てしまう。

どうして、どうして、どうして!?

理由なんか知らない。だけどきつとそうなる。でも想像したおか
げで熱くなった頭が少し冷えてくれた。

とにかく逃げなきゃ。

元友人を手こずらせていたバットが板から抜けた。

二度目の目標も、当然僕。バットはもう一度高く振り上げられ

ヒュッ!

振り下ろされた。

ただと後ろに立たれたときよりも状況は確認できていた。だから
今度は机にぶつからずに避けることができた。ついでに近くに転が
っていた椅子を蹴飛ばした。攻撃することに集中していたバットの
持ち主に向かつて。

「ぎゃっ!」

情けない悲鳴をあげて元友人はすねを押さえて転がった。明らか
な殺意を向けていた周りの注意が僕から離れた。

今だ!

僕は転がるように走った、教室の出口へ。最短経路にいる何人か
の女子を肩で弾き飛ばしながら廊下へ転がり出た。

振り向くことなんてできない、罪悪感なんて持つちゃいけない。

あいつらは僕を殺そうとしたじゃないか!

全力で走った。自分の靴は教室に忘れてきたから転がっていた誰
かの運動靴を拾って外に出た。

でもそこまでだった。

殺されかけた恐怖と、どこにぶつければいいのかわからない怒りが全力で走った疲れと混ざって僕の膝をがたがたに揺らした。もうこれ以上走れない。僕は校舎から見えないブロック塀の影に座り込んだ。

苦しい、肺の奥から全部空気が押し出されそうだった。

だらだらと流れた汗が目に入っしてしみる。

顔を制服でぬぐいながら校舎の入り口をそっと見てみた。

僕を追いかけてくるような奴はいない。

大丈夫なのかな……。

「なんで、僕が殺されなきゃいけないんだよ……」

僕が殺される？

自分の呟きだったはずなのに一番驚いたのは僕自身だった。

やっぱり僕は殺されようとしてたの？

怖くなって何もかも怖くなって僕は膝を抱えた。全ての世界から視線を逸らした。

殺される。殺される。殺される。

逃げなければ僕は確かに殺されていた。

どうして？ いじめられていたから？

そんな理由で納得できるものじゃない。あんなに加害者がはつきりした状態で死ねば自分達の進路がどうなるか、それくらい嫌でもわかるはずだ。自分はもつと精神的にも肉体的にも疲弊していたから、それから死ぬんだと思っていた。だからエスにまた会うまで我慢しようと思っていた。

だいたいいいじめの理由でさえ納得したつもりはないのに。これ以上何を自分の中に理由付けしたら気がすむんだ。

……いや、心当たりなら一つだけある。

自分がそうでないか疑ったことがあるだけだ。しかもそうでないという証明までされている。そうだったらよかったのと思っっていたことがある。

本当にそうなるとは思わなかった。

こんな世界だとは思わなかった。

違う、これはやっぱりただのいじめだ。

クラスの皆が口裏をあわせて自分をそれに見せかけて殺そうとしただけだ。きつとそうだ。あんな恐ろしい世界がこれからもあるだなんて

「キミ、アンチカテゴリーになったんだよ」

突然降ってきた声。僕の葛藤なんて最初からわかっているかのような。

反射的に震えた肩を押さえながら僕はおそろおそろ顔を上げてみた。

「女の子……？」

エスじゃない。白いシャツと黒い上着を着ている。肩までの長さの髪は薄茶色になるまで色を抜き、ジーンズでできたショートパンツからは細くてすらりと長い足が伸びている。街中よりもテレビや雑誌の中にいそいだ。いろんな意味でエスとは正反対だ。

この子、もしかして僕が校門から出てくるとこ見てたのかな。

「ボクはミコト。よろしくね」

ミコトは地面に腰を落としたままの僕ににっこりと笑って手を差し伸べてきた。きれいに磨かれた桜色の爪が並んでいる。

「ただ握り返す気になんてなれない。」

殺されかけたばかりに見知らぬ誰かと仲良くできるような無神経さは持っていない。

「握手ダメなんだ？もしかして潔癖症？お節介かもしれないけど、治したほうがいいと思うよ」

「本当にお節介だよ。」

「さて、聞いてたかどうかわかんないからもう一度言っけど。キミ、アンチカテゴリーになったんだよ」

「アンチカテゴリ……?」

「そ。アンチカテゴリ。知ってる?」

「……………知ってるさ、もちろん」

さっきまで必死に振り捨てようとしていた言葉だ。

アンチカテゴリ。

自分がいじめられているのを自覚したとき最初に疑った。

ある日突然仲間はずれになってしまう病気、だと僕は思っている。なんでそうなるのかはまだ誰にもわかっていない。でもアンチカテゴリになった人は政府の保護を受けることができる。

『アンチカテゴリかも? そう思ったときはすぐに保健所へ! あなたの友達はもう友達じゃありませんよ』

ときどきCMや広告で流れる政府の文句だ。

自分をアンチカテゴリだと思った人は保健所に連絡して心理検査を受けなければいけない。アンチカテゴリだったらそのままどこかの保護施設へ。そうでなかったら保健所の裏口から何もなかったかのように帰される。

……………僕も検査を受けたからよく知っていること。

「結果はっ……………一度検査は受けたよ。でも陽性反応は出なかったっ
て」

「それはいつ? それにアンチカテゴリが発症するまでの期間って知ってる? ……………たった数時間から一日ってとこだよ」

「数時間?」

そんなことどれかに書いてあったかな。自分にアンチカテゴリを疑った日に自分にわかりそうなことは全部調べたつもりなのに。

発症のメカニズムはわかっていない。よって前兆も潜伏期間も不明。わかっている人間は誰もいない、はず。どこかの偉い人が書いていた。

「……………君はアンチカテゴリがどんな病気かわかっているの?」

「もちろん。原因もどんな病気かも　　本当は病気なんて生易しいものじゃないってこともね」

「病気じゃないって？」

あんなに急に殺意を向けられる原因が自分自身にあったまるかやっぱりあれはいじめの一環で僕が逃げ出したことを自意識過剰と今ごろ笑っているのかもしれない。そう考えたほうがしっくりくる。

全力で逃げた疲れはミコトと会話しているうちに少し軽くなった。僕は座りこんだままの腰をあげて、歩き出した。ミコトの方を見る必要はない。

「あれ、どこ行くの？」

後ろから声がかけられたので振り返らずに返事した。

「家に帰るんだよ。いじめられてるから引きこもるしかないだろ」

「喰われちゃうよ？」

喰われる？　殺されるの間違いなんじゃ。

……この子は適当なことを言っているだけだ。なんて無責任。

「はいはい、食人族でも呼んでくれれば」

僕は片手をひらひらと振ってミコトへの最後の返事にした。

家に帰るには昨日の公園の前を通る必要がある。
少しは期待していた。

でも本当にエスがいるだなんて思わなかった。

今日のエスは黒いドレスを着ていた。昨日よりはワンピースに近いけどそれでも街中で出会うには異様な格好だ。ドレスの色にあわせた小さなバッグを提げ、同じような黒い傘を差してくると回している。曇りだけど雨は降ってない。エスは学校には行ってないんだろうか、やつぱり。

「あっ」

すぐにエスは立ちすくむ僕に気付いた。

「お帰りなさい、亮一」

微笑んだ。

「たっ、ただいま」

「今までのお友達とはサヨナラしてきた？」

「……え？」

「だって亮一、お友達にいじめられてきたんでしょ？」

「い、いやっイジメはあったけど、あれはイジメじゃなくて、その

……」

何といえはいいのだろうか。

それよりどうしてエスは僕のいじめを知っているんだろう。

まさか見ていた？

学校には行ってないって昨日聞いた。それにこんな子がいたらドレスじゃなくて制服を着ていても目立つはずだ。エスは僕の学校には通ってない。

でももしかしたらフェンスでしか囲まれていない校舎裏でバケツの水を被せられたところや、なくしたカバンを探しているところを見たのかもしれない。

エスはどこまで知ってるの？

どんな姿を見てたの？

僕が死にたがってると思ったのも全部見てたから？

クラスメイトや両親達と同じように、エスまでもがみにくく自分を嘲笑っているような気がした。

僕をこの世につなぎとめてくれた彼女がそんなことするわけがないのに。

だけどエスは見下すどころか眉間にしわを寄せて僕を少しだけに見つけた。文句があるわけではなさそうだ。

「なんだか亮一は今までの人と違うわ」

「……………?」

今までの人？

詳しく聞こうと思ったそのときだ。

「見つけたっ！ 世界の敵！」

「ええっ!?!」

何かを言いかけたエスの言葉は初めて聞いた声に遮られた。

やけにかん高い少女の声。エスの向かい側、僕の後ろにその子は立っている。

振り向くとそこには ツインテールの巫女がいた。

「み、巫女さん？」

このへんに巫女さんがいるような大きい神社はない。それに神社でバイトするには年齢が低すぎる気がする。僕と同じくらいだろうか

そしてツインテール巫女の隣には丈の短い上着を着た少年がいた。

こちら僕と同じ年か、少し上といったところか。右目に眼帯、左手に包帯を巻いている。街中で見たら病院の帰りかと思ってしまう。だけど、巫女服の少女との組み合わせじゃ。おまけに目の前にいる

エスはいわゆるロリータ服。

……………嫌な予感しかしない。

僕のクラスにはいないけど隣のクラスにはいた。普通というカテゴリーに納まることをよしとせず、脳内にいる誰かと戦い続けている

何人かの生徒達が。

「邪魔だからどきなさい、そのアンタ！」

「いた、いたっ！ ちょっといきなり蹴らないでよ！」

足やら腰やら蹴られて僕は横に追いやられてしまった。殺されるよりマシだけどさ。

というかなんだよ、なんなんだよ、この展開はさ！？

ホラー始まったかと思っただらコメディものか！ ゲームだったらクソだよ、うんこだよ。

「まあまあ、刹那姫は君を助けたつもりなんだ。そんなに怒らないでくれ」

眼帯の少年が肩をすくめた大げさなポーズで笑った。刹那姫というのは巫女服の子のことみたい。

「ふん！ 勝手なこと言わないでよ、エンドオブファイヤー！ あたしは攻撃するのに邪魔だったから蹴飛ばしてやっただけよ、別に助けたつもりじゃないんだからねっ！」

「はいはい、わかっていますよ」
僕はわかってないんだけど。

エンドオブファイヤーと呼ばれた少年が刹那姫の言葉にもう一度肩をすくめた。なに、演技？ かつこいって思っただけなの？
なんだか肩こってる人に見えないよ。

どちらの名前も親の顔を見なくなる、というか漫画のキャラクタ
ーみたいだ。本名ではないのかもしれない。そう思いたい。

本当にどうしてこんなことになっているんだろう。あまりにも似
合っていて気付かなかったけどエスの格好は街を歩くより、そうだ、
コスプレのように見える。

もしかして彼女が待ち合わせしていたのはこの二人で。
今から始まるのは寸劇みたいなもので。

……いけない、そう考えるといろいろ納得できてしまう。

さすがにエスがいじめに加わっているだなんて思わない。でもク
ラスの誰かが何かを吹き込んだのかもしれない。いじめを知ってい

たのもそういう理由で……ああ、最悪の妄想が止まらない。
昨日のうちに死んでおけばよかった。早くお家帰りたい。
帰ってもろくなことないってわかっているはずなのに思ってしまった。
った。

「さあて、巻き込まれないようにそこで見てな」

「……言われなくても……」

「あと俺のことはエンドオブファイヤーと呼びな！」
嫌だ。そんなライバルキャラが使う必殺技のような名前なんて。

「さあ俺は俺の正義を実行する！俺の右手が暗黒の炎に燃える！」
「……くはっ」

聞いているだけで恥ずかしくなるセリフと右手を顔面にそえる妙なポーズに思わず変な笑いが漏れた。とっさに手で口を押さえたから聞こえなかったみたい。よかった。

「あたしの聖符よ、邪なる気を祓うためにいざ顕現せよ！」
「ばぶぶっ」

予想できたはずの追加攻撃。

今度は手で押さえても空気が指の隙間から抜けて変な音になってしまった。

しかも刹那姫とやらが取り出したのは六枚の紙。符と言うには書いてある文字が汚すぎるし、そもそもどう見てもメモ帳を破いたものだ。ひどい、ひどすぎる。コスプレでもありえない。なんなのこの人達。僕友達なんかじゃないから！絶対！

もちろん二人ににらまれた。

ぼくしらないよ？ 今のは猫か犬ナンダヨ！

そんなふうに見線そばの茂みに逃がしてみた。意味ないことくらいわかってるさ。

でも幸運なことに僕に構っているどころじゃないようだ、二人は改めてエスをにらみつけた。

エスの方はというと二人の登場に動揺もせず、傘の柄をくるくる

と回した。

「えつとあなた達……誰？」

二人を見つめて首を傾げるエス。

し、知り合いじゃないのかっ。

「お、お前のせいでひどい目にあってるのに！」

「そ、ソイツだってアンチカテゴリーにしちゃったんでしょ！」

ソイツ、とツインテ巫女は僕を指差した。

「ああ」

ぱん、とエスは両手を叩いた。

「食べ残しさん達ね。ちょうどよかった、お腹すいてきたの」

「だ、黙れ世界の敵め！ お前を倒して俺達は元の生活に戻るんだ

！ 不死の使者よ、エンドオブファイヤーの呼びかけに応えて汝の

敵を焦がして滅ぼせ！」

「……………もふっ」

眼帯の少年が右手を水平に構えると同時に僕の口からもまた変な笑いが漏れてしまった。

でも今度は笑い飛ばすどころじゃなかった。

何もないはずの空間に小さな炎の塊が生まれたから。

見間違い、だと最初は思った。

でも僕が目をこすっている間に塊は体を持ち、足を持ち、羽を持ち、口ばしを持って実体を持った。

炎の鳥だ。あんなもの見たことない。見たことないのにどこかで見たことある。テレビの中や漫画の中、似たデザインのモンスターがいた。まるで劣化コピーをそのまま具現化したようだ。

「俺は命令するっ、全力で焼き尽くせ！」

どこかで聞いたような少年の命令と共に炎の鳥が跳んだ。

ただまっすぐにエスの方へと。

翼で風を切ることも重力に捕われることもなくまるでロケット花

火のように緩い弧を描きながら突き進み飛んでいく。

この世ではありえない光景。

ただ、鳥のデザインと同じように既視感を感じてしまう。どこで見たのかを思い出せないくらいに。

エスは身動き一つすることなく炎の塊を受け止めた。

なーんだ、手品なんだ。

だってこんなことありえないもの。

あはは、僕を驚かすためにこんなことまでする、なんて……

すん、と黒い臭いが鼻腔を刺激した。

何かが焼けて爆ぜる音が耳に届いた。

エスの黒いドレスが赤く燃えあがっていた。天使の環を描くくらいきれいだった髪がぢりぢりと溶けていた。白い肌の向こうに血が滴る肉が見えた。

それにこの独特の臭いには覚えがある。いつだったか、ライターを持ってきた誰かに髪の毛を燃やされたときと同じ臭い。つまり髪の毛が焼ける臭いなんかより強いこの臭いは。

エスが焼ける臭い。

「……………っ！」

ヒュッ、と冷たい息が僕の喉を下りていった。

目を背けて逃げてしまいたい。

だけど指先一本さえ動かすことができない。

「霊術聖符・私は全てを切り裂く！」

本当にどこかで聞いたようなセリフと共に刹那姫が両手を前へと振り回した。

ただのメモ帳がはらりと地面に落ちた。

が、その代わりどこから現れた六枚の符がこれまた炎の鳥と同じようにエスに向かって跳んだ。

驚かなきゃいけないことなのに。的外れにも僕は「またどこかで

見たような技だなあ』なんて思ってしまった。エスが燃やされているっていうのに。切り刻まれようとしているのに。

オリジナリテイなんてどこにもない、自己がない。エスが殺されているっていうのに、こんな現実でありえるわけがないのには僕はどうしてこんなことを考えてるんだろう、壊れちゃったかなあ。

僕が間抜けな口をぽかんと開けている間に六枚の符が焼けて爛れたエスの皮を切り裂き肉にまで埋まった。あれが紙だろうが鉄でできていようが明らかに致命傷だ。

「ざまあみる！ やつた！」

「やつた、やつたあ！！」

一人の少女を惨殺したというのに二人組は手を取り合って喜んだ。ひどい、なんでこんなことができるんだ。

世界の敵だからスボスだか知らないけど、エスは僕を助けてくれたんだ。エスは何もしてないじゃないか、エスを殺すなんて……

違う。

惨殺というのならエスは死んでなきゃいけない。

あれほどの火と斬撃を受け止めたというのに、エスの脚は地に立っている。燃えて崩れ落ちるかと思っていた腕はいつの間にか傘の柄を回していた。

や、やつぱり手品だったんだ。

なんてそんなこと言えるわけがない。

だってあの臭いは確かに人が焦げる臭いだ。用意できるものじゃない。

じゃあなんで生きてるの？ どうして？

幻覚？ 夢？ これは僕の妄想？

「あなた達、本当につまらないわ。だから食べ残されたの、まだ気付かないの？」

「はあ、とエスは心底つまらなさそうにため息を吐いた。

「それが本当に今のあなた達のやりたいこと？」

「じゃ、じゃあお前は何がやりたいんだよ！ お、お前のやってることだってどこかの誰かと同じかもしれないじゃないか！」

眼帯の少年がムキになつて抗議する。

「そういうことじゃないのよ、お馬鹿さん達。エスがあげたイドがあるならやりたいことがたった一つだけあるはずなのよ」

「そっそれは……」

眼帯の少年が明らかにうろたえた。

巫女服の少女が後ろめたそうに地面を見つめている。

イド？ ってなんのことだろう。井戸？

「わかりたくないのなら見せてあげる。これが『エス』のやりたいこと」

す、と人差し指を巫女服の少女に向けるエス。

さっきの二人のような何かの必殺技というわけじゃない。

ただ、選んだだけ。

それがわかった巫女服の少女の顔がひくりと強張った。

「それでは いただきます」

エスは上品に微笑んだ。

その瞬間

「ひ、やあああああああ！！」

悲痛な少女の叫びが響いた。

巫女服の少女の左手が消えていた。

自称刹那姫の肩から薄い布じゃ押さえきれないほどの血流がどくどくと流れ出ていた。血で絞られた袖には、見間違ひなんかじゃない、物の存在というものを感じない。

その存在はどこに行ったというのか。

エスは悲鳴をあげる少女を見ながら薄っすらと笑った。

れ落ちた。喰われる痛みには堪えざるを得なかった少女が放心の末にうつろな視線を僕に投げた。

「ごちそうさまでした」

満足そうにエスが呟き、巫女服を着ていた女の子が一人消えた。初めからそこにいなかったかのように血溜りさえ消して、巫女服だけ残して

血の一滴も残さずに人間が一人消えた。

「ああっ、ち、違うんだ、へ、変なことができるようになったから、やってみたかっただけなんだ、食べたのはあいつ一人なんだ、だから許してくれっ、殺さないでっ」

逃げることも忘れた眼帯の少年がコゼットに跪いて命乞いを始めた。

お姫様の機嫌を損ねた家来は死刑になってしまいました。

そんな言葉がまた頭をよぎった。

童話なんかで終わらない。もう僕は知っている。

エスはきよと、と少年を見つめ返し

「……一人だけ逃げるつもりなの、京介。あんたも本当の友達になるっよ」

とエスじゃない口調で少年に笑いかけた。

「な、なんで俺の本名を……」

「気付かないの？ あたしよ、梓よ。それとも刹那姫って言ったほうがいい？」

そうだ。彼女の口調はエスというよりも、さっき食われてしまった巫女服の少女じゃないか。

「京介つてば嘘ついちゃダメよ。あんただって食べたでしょ、一緒に、何人も」

「う……」

口ごもる眼帯の少年。

食べた？

もしかして巫女服の少女も、この少年も、エスみたいに？

「ねえ、ここは思ったよりも気持ちのいいところだよ。あんなに抗ったのがバカみたい。ミコトって子もバカよ。エスはこんなにも優しいのに気付かなくて。京介も抗うことなんてやめてこっちにきなよ」

「あ、梓。生きてるんだね？ 死なないんだね？ 痛く、ないんだね？」

「抵抗しなければね」

こくこくと少年はうなずき、

消えた。

さっきの少女と同じように服と包帯と眼帯だけ残して。風が吹いて、包帯と眼帯がどこかに運ばれていった。

服だけが重くてその場に残っているけどきつと人が消えて残されたものだなんて誰も思わないはず。血は一滴もついていないんだから。

「一人だけ助かろうとしたでしょ、京介。でも大丈夫、最初にひどい目にあつたのも、逃げようとしたのもエスになつたんだから全部許してあげる。あははははは……」

あはは、とエスらしくない表情で笑っていた顔が、す、ともともとの人形のような顔に戻つた。エスの顔だ。なのに僕には見たこともない冷たい顔に見える。

さっきの二人は……死んだのかな。

それともエスの中で生きてるのかな。

僕も、食べられてしまうのかな。

何事もなかつたかのように傘をくるくると回すエス。きつとエスにとっては本当に何事でもなかつたんだろう。

エスはゆっくりと僕の方に首を傾けた。

「亮」

名前を呼ばれた。

声も音も同じはずなのに、目の前にいる少女が昨日出会ったどこか不思議な少女と同じだなんて、そんな当たり前のことさえ考えられなくなつた。

これは現実？

それとも夢？

じゃなかったら僕の希望？

捉えることができない現実にくらくらと目まいがした。

死ぬにしろ目覚めるにしろ早く終わればいいのに。

「あー、やっぱりダメだったね。確かに強いものを考えることができれば強いと言つたけどさ、本当に強いと心底思つてないと無理なんだよね」

空気をあえて読まない、のんきな聞き覚えのある声が遠い世界に行きかけていた僕を呼び戻した。聞き覚えといつてもついさっきだけ。

誰だつたか、僕は少し前に名乗られた名前を叫んだ。

「ミコト!？」

「や、またあつたね。喰われないようにって言ったのにもう悪い雌にひっかかつて」

僕の後ろにいつの間にか片手を上げたミコトが立っていた。

「ま、予想していたから来たんだけどね」

ミコトはあげた片手で頭をかきながら言った。

「こつというのに一番強いのは、さ　　やっぱこついうもんなんだよ　　肩にひっかけている小さなスポーツバッグにミコトは片手を突っ込んだ。」

出てきたのは大きなサバイバルナイフ。でこぼこの凶悪な刃を小さな舌でぺろっと舐めあげながらミコトはいたずらに笑つた。

「そ、そんなナイフでどうしようって言うんだよっ」
僕は思わず言ってしまった。

確かにナイフなんか目の前に出されたら僕あたりはびびって悪い
こともしていないのに謝ってしまうかもしれない。

だけどさつき炎の鳥を見た。重力に逆らいながら跳ぶ符を見た。
そして二人の人間が消えるところも見た。

「これもさっきの二人のような妄想の産物だと思うかい？ のんの
ん、これは立派な刃物、購入の際に身分証明を求められるほどの代
物さ」

ミコトは慣れた手つきで大きなナイフを振り回した。だけど僕が
言いたかったことはそういうことじゃない。

だって今更ナイフなんかでどうこうできることだとは思えない。
さっきと同じように喰われながら無様な姿を晒すか、一秒たりと
も猶予を残すことなく存在ごとかき消えるか。

そしてミコトの次は自分だ。

僕の焦りなんて気にもせずミコトはスポーツバッグを投げ捨て、
ナイフを小脇に構えた。

「いっくよー」

挨拶でもするかのように軽く笑い、ミコトは身を低くしながら走
った。

無言でミコトをにらみつけるエス。人形のような顔の眉間にしわ
が寄る。失望とは違う、僕が初めて見る不満、怒り、見下し。

走っていたミコトの体が大きく傾いて後ろに大きくのけぞった。

ぼた、ぼた、ぼたたっ。

赤い染みが地面に落ちた。

「……やったね？」

仰け反っていたミコトの頭が振り子のように元の位置に戻った。

右顔面の上部が存在していない。

白い骨と淡いピンクの脳髓がそこに見えた。

頭から垂れ続ける血をなめてミコトはもう一度走り出した。

さつきと同じようにエスは避ける素振りさえ見せない。

トスツ。

軽い音を立ててナイフがエスの胸に突き立った。

「……けほっ」

小さい咳の後にエスの口はしから血が垂れた。

「……本当に馬鹿な子」

笑った。血を化粧とした唇でエスは笑った。

ついで明らかにミコトの顔が不機嫌になる。

「……糞人形め」

ミコトの舌打ちと同時に風が吹いた。舞う砂埃に僕は目をこすった。目を開けるとそこにはもうエスの姿はなかった。

どこに行っただろう。

まさか……死んだ？

それはミコトの口をへの字にした不機嫌な顔を見れば違うことがわかる。こっちもいつの間にか傷一つないきれいな顔に戻っていた。

「さつてと。まだ名前聞いてなかったよね」

何もかもが嘘だったかのようにミコトは僕の方に振り向き、笑った。血なんて一滴もついていないナイフをバッグに入れながら。

「まだ聞いてなかったよね。キミの名前は？」

「ぼ、僕は亮一。鈴平亮一」

「そう、亮一。自分の名前があることはいいことだ。少なくとも名前だけは人間でいられる」

「………？」

「さてと、亮一。キミはこれからどうするんだい？ 家に帰る？

そして家族に殺されるのもいいかもね。大丈夫、アンチカテゴリを殺して罪悪感を持つ人間なんていない。たとえ実の子供であってもだ」

「それは……」

罪悪感を持たないだろう。でもそれは僕がアンチカテゴリでなくとも同じことだ。

僕の沈黙をどんなふうにしたのかわからない。でもミコトはいきなりこんなことを言い出した。

「んー、じゃあ少しお腹も減ったし、軽く食べにいこっか？」

「……………え？」

「まいどありがとうございますー!」

サービスゼロ円のスマイルを向けられながら、バーガーが盛られたトレイを渡された。僕はそれを両手で持ちながら二階に作られた飲食席への階段をあがった。一番奥の席ではミコトが「やつほ」と手を振りながら僕を待っていた。

無言でミコトの目の前にトレイを置くと

「まさかアンチカテゴリになったのに笑顔を向けられるとは思わなかったでしょ?」

と僕の心の中を見たかのような言葉をかけてきた。

「……うん。もしかして、さ」

「おっと、いらぬ希望は持たない方がいいよ。キミがアンチカテゴリになったのはもうどうしようもない事実。とりあえず、キミ、それだけで足りるの?」

僕のぶんはシェイクが一本。昼前の食事と考えると足りない気もするけど幻や夢だとしてもあんなものを見たあとで食べる気なんて起きるわけがない。

対するミコトのぶんはチーズバーガー五つ。それとオレンジジュース。チーズバーガーなんて選択も正気を疑ってしまうけど、量も量だ。いくら育ち盛りでも細かい体に詰め込む量じゃない。

本当に全部食べるんだろうか、と思っている間にミコトはバーガーの一つの包み紙をぺりぺりとはがして大きくかぶりついた。歯形が残されたチーズバーガーにミコトの欠けた頭を思い出してしまい、僕は視線をそらした。

「そうそう、こんなところでアンチカテゴリが悠長にご飯食べれる理由だけだ。そだね、キミはこういいうとこ来るのは初めてじゃないだろ?」

「そんなの当たり前だろ」

今どきハンバーガーも食べたことがない中学生なんてどのカテゴリーにいるんだろうか。もしかしたらエスは食べたことないかもしれない。注文の方法だってきつと知らない、と思う。

「じゃあ、隣に座った人の顔はいつまで覚えてる？」

「えっと……」

隣の席を見た。誰もいない。もう少し時間がたてば誰か座るかもしれない。でもそれがサラリーマンであれ学生であれありうる気がする。

つまり。

「最初からそんなに見ないかな。特徴的だったら覚えるかも」

「そうだね。ボクみたいにかわいくないと覚ええないよね」

「……………」

突っ込むべきか。

実際かわいらしいけど。

でも自分で言うことじゃないよね。

「だからいいんだよ。ここにはあらゆるカテゴリーの人間が出入りする。お互いに興味を持つことなんてほとんどありえない。だから内面にどんなものを抱えていようと、たとえそれが人間でなくとも、誰も知ることはない」

そうだとは思っ。

「だけど改めてお前なんかにも興味は持ってないんだ、と言われているように僕はうなずくことができなかった。」

「だけど内面がわからないのはボクとキミも一緒。ボクがキミの心を読むことができないようにキミもボクのことを理解することは永遠にない。もっとも、アンチカテゴリーだけはそうだともいえないんだけど」

「どういうこと？」

「エス。キミは『エス』に人間としての自我を奪われた。代わりに与えられたのがアンチカテゴリーの自我」

「エスって……あのドレスの子？」

「違うよ。アイツはそう名乗ってるだけ。より深く『エス』に触れたから名前さえ忘れてしまったんだろっね」

「名前さえ……」

名前だけは人間でいられる、とはそういうことだったのかな。

「じゃあ『エス』って何？」

「人間の本能かな。一説では精神世界につながってるとか、どこかの誰かの意識につながってるとか、宗教の話だけだね。あ、別に勧誘してるわけじゃないよ。ボク、そーゆー存在嫌いだもん。」

話戻すけどー、アンチカテゴリーのはね、こんななっちゃん代わり妄想を具現化する力を手に入れたつもりになっちゃんだ」

「つもり？」

変な言い方するなあ。

「だって結局妄想なんだもん。あれってアンチカテゴリー患者以外には見えないんだよね」

「幻覚ってこと？」

それはおかしい。

「だって二人消えたんだよ。僕の見てないうちにこっそりどこかに行ったの？ 本当は死んでないの？」

そうとは思えない。

だって服や眼帯はその場に残った。

最初は手品だと思っただけどわざわざ僕一人を脅かすためだけにあんな大掛かりな仕掛けをするわけがない。

「んー、そだね。ちよつと手貸して」

「えっと、こっつ？」

僕は言われるがままに右手を出した。
ぎゅむ。

思い切りつねられてしまった。

「ちよ、痛い！ いきなり何すんのさ」

「痛かったでしょ？ だから怒ったんでしょ？」

「怒るに決まってるじゃないか」

「肉体の感覚は心に強く影響を与える。逆に心が肉体に影響を与えることもある。落ち込んで食欲なくなるときとか、あるでしょ？」
そう言いながらミコトは二つ目のチーズバーガーの包みを開けた。落ち込んで食欲がなくなるだなんてことはミコトには無縁そうだし、きっとストレスで食欲がないのに無理矢理口に入れたものを吐き出すなんてことも。

「肉体と心を切り離して考えることはできない。そして人間同士はお互いの心を知ることにはできない。……人間同士はね」
「つまり、アンチカテゴリなら？」

「そ。といつても表面だけ。みんな同じ夢の世界にいるようなもんだよ。そして夢の世界で死んだと思えば、肉体にも影響される」

「……死ぬってこと？」
「うん」

「体が消えたのも、心がそう思ったから？」

「んー、そうだと思うけど、もしかしたら違うかも。でも都合がいよいよね、消えるとき。色々」と

それはいったい誰にとつて？

考えると寒気がした。

「消えた子達つてさ、もしかしてエスの中にいるの？」

「そうだね、そうとも言える。例えばこのチーズバーガー」

食べかけのチーズバーガーをミコトは指差す。

「このチーズバーガーは胃の中で栄養として吸収される。つまりチーズバーガーは僕になったとも言える。食べる、食べられたつてのは存在を喰い合うことでもあるんだ」

「存在を喰う……」

ミコトは食べかけのチーズバーガーに被りついた。

しばらく僕たちの間に訪れたのは無言。

僕が何も言わないからかミコトはひたすらにチーズバーガーを口の中に放り込んでいた。きっとミコトは僕が何も言わなければ何も語らない。そしてそのまま去ってしまう。そんな気がした。

「その、アンチカテゴリが病気じゃないって」

「うん、病気じゃないよ。あ、でも感染するからやっぱり病気なのかな」

「かつ、感染……!?!」

思わず周りを見てしまった。

も、もしかして店員さんや僕の後ろに並んでいた誰かが発症して追われたり殺されたりするんじゃないか。

「あはは、大丈夫だよ。空気や接触じゃ感染しない。それよりできるだけ誰かの記憶に残らないようにしてね。キミも元人間なら犠牲者を出すのは望まないだろ」

つまり自分が誰かに覚えられたらその人はアンチカテゴリになるんだろうか。

なんとなく、それは少し違う気がする。理由はわからない。

でも詳しく聞くよりもミコトの一つの言葉に反抗したくなった。

「……その、元人間ってのやめてくれる？ 僕はちゃんとした人間」
「どうしてそんなこと考える？」

僕の主張を否定するかのようミコトは言葉を重ねた。

「今のキミが人間だと言えるのかい？」

「いくらなんでも失礼だよ。僕は人間だ。生まれたときからずっと」

「どうしてそう思う？ どうしてそれが正しいと思う？」

「僕は、人間、だから……」

ミコトが同じ質問を繰り返すのに、僕も同じような言葉を返すことしかできない。

どうしてなんて言われても答えられるわけがない。

考えたことなんてないんだから。

「キミは人間に育てられて自分を人間だと思い込んでいる猿を見たことないかい。あれは人間か？ 猿じゃなかったら鳥でも犬でもいいよ」

「……人間じゃないね」

「逆に狼に育てられ、自分を狼だと思い込んでいる少女もいたね。」

これはヤラセだつて話だけど。仮に何も知らない赤ん坊を動物と同じように育てたとする。これは動物か？」

「いや……人間だと思うよ」

「その理由は？」

「人間にしか見えないから」

「そう、それ」

カップのフタに刺さっているストローをぴつと抜き、ミコトは指示棒のように僕に突き出した。

「人は誰かが『人』として認識することで初めて人になれる」

ストローをカップに戻し、ミコトは改めて僕の顔を見た。

「もう一度聞く。キミは人間かい？」

「僕は……」

もちろんそうだ、なんて答えられなかった。

知っている人間から向けられる殺意。恐れを含む視線。

明らかに人間以外を睨みつける目。

「……そうじゃないから、僕は殺されなくちゃいけないの？」

「そうだよ」

あっさりと肯定された。

「人の顔した人でなしがいたら気持ち悪いだろ。誰にも気を留めない街中ならともかく、知った顔の人間が人でなかったら、ましてそれが誰かを同類にしたあげく共食いするような存在なら、殺されて然るべきだと思うね」

「どうして人じゃないってわかるんだよ」

「キミさあ、聞いてばかりじゃなく自分で考えたらどうなの？」

うぐつ。知らないんだ。しかもごまかした。だけど突っ込むと嫌な反論をくらいそうだ。変な藪はつつかないでおこう。でもどんな話したらいいんだ。

「えつと、さ……やっぱり、あの二人つて死んじゃったんだ？ や、生きてるかもしれないけど、その、存在を喰われたんだよね。だから、いなくなったって……なんでエスはあんなことをするの？」

結局聞くことしかできなかった。「また質問？」なんて言われるかと思った。

「そうだよ、喰われたんだよ。あと『エス』じゃないから。名前はなんだかわからないけど、ボクは糞人形って呼んでる」

一応答えてくれた

「アンチカテゴリはね、アンチカテゴリになったときに一つの衝動に襲われる。」

同じアンチカテゴリを殺す、食べるって衝動を。

アイツは何の躊躇もなく食べている。きつと、生まれたときから化物の素質があっただらろうさ」

吐き捨てるようにミコトは言った。

「そんなこと言うもんじゃないよ……」

だって僕にはエスがミコトのいうような化け物には見えない。

一人が喰われ一人が消えたところは僕だって見ている。

だけど彼女は僕と同じ何かを抱えている気がする。アンチカテゴリということじゃなく、もっと、胸に潜めてる何かを。それを『エス』だと言ってしまえばお終いだけどそうじゃない、わからないけど。

それに彼女には助けられた。

もしかしたらそれはアンチカテゴリを増やすためだったかもしれない。僕を食べるつもりだったのかもしれない。

なぜかそれでもいいと思えた。

敵視している相手をかばう言葉が出たせいか、ミコトはむっと口をとがらせて不満そうな顔になった。眉が気持ちつりあがってるけどあまり怖くない。むしろかわいいっていうか……いやいや僕にはエスがいるし。いや、いないってば！

「騙されてんだよ、キミ。あの見た目だけはかわいいー顔にさ。てゆーか、なんでアイツがエスって名乗ってるの知ってるの？ いつの間に関り合いになったの？ もしかしてナンパ？ 奥手そうな顔してよくやるねー。最近の中学生ってこわー」

「ち、違うよつ、先に声かけてきたのあっちなんだから」

「声かけてきたにしてもさ、あんな格好じゃん。ふつーだったら関わろうだなんて思わないよね。それともゴスロリ趣味？」

「趣味とかじゃなくてっ」

「じゃあなんなの？ やっぱりかわいかったらなんだってーわけ？ ひどい、やっぱり男つてみんなケダモノなんだ……ボクのも弄ぶつもりなんだね……うん、別にいいけど、ボク高いよ？」

「高いってなんだよ、普段君何してるんだよ！？ じゃなくってっ、何この流れっ！」

二股かけたあげくにお金で解決しようとしてるとんでもない中学生みたいじゃないか。うう、昼前で人がいなくて本当によかった。

「静かにしなよ、誰かに覚えられてアンチカテゴリを増やしたいわけ？」

「ううっ」

ひどい。

大声を出す流れになったのはミコトのせいだ。

誰かが僕を覚えてアンチカテゴリになったとしても無実を主張する。

「それよりキミはこれからどうするの？ 最初にボクに言ったとおり家に帰って殺される？」

「人間に戻る方法は、ないよね」

「たぶんね。もしかしたら国の保護施設とやらじゃ見つかってるかもよ」

「君は保護施設にいかないの？ 君もアンチカテゴリなんだろ」

本当はそうとは思えてない。

ミコトは少し性格に難があるだけでどんなカテゴリでも歓迎されるタイプに見える。

どんな人間もアンチカテゴリになる可能性があるなんて言われるけど、僕にとって一番身近な例は僕だ。排除される人間も僕と似たようなタイプじゃないかと錯覚してしまう。

エスだつて、消えた二人だつて結局は世界になじめそうにないから。

「んー、ボクはやることあるからそれやってからだね」

「やることつて、あの子を、その」

「うん。殺すのさ。それにできるだけたくさんアンチカテゴリを殺しておかないと。あいつら人間より弱いくせに仲間を増やすことだけは得意だかね」

殺すことが当然かのようにミコトは言った。

誰かを食べるんだから、殺されて当然、なんだろうか。

「エスはさ、わざわざあんなふうにしめする夢を見たの？」

あんなふうには、生きながら体を削られる痛みを与える夢を見たというのか。もしそうだったらミコトに殺されて当然だと思つし、そんな彼女に助けられた自分は昨日やり残したことを実行するべきだ。「ちよつと違うね。糞人形が見たのはあくまで誰かを食べる夢。そして相手が見たのが食べられない夢。相手は負けたんだ、糞人形が見る夢にさ。死にたくない」と抵抗したから生きていた」

「じゃあ抵抗しなかったら、痛くないんだ」

「そ」

抵抗しなかったら、きつと一瞬のうちに消えてしまつただろう。

あの怯えた眼帯の少年のように。

「だからキミも誰かに食べられそうになったら抵抗なんてしない方がいいよ」

「えええ……」

無茶な。

どういふ状況になるのかわかんないけど、食べられそうになつて抵抗しないなんてできるんだろうか。

「それとも、僕も食べたりするのかなあ……」

それは疑問じゃなくて呟きだった。だけど聞き逃さないとはかりにミコトの眉がぴくりと動いた。

「もしキミが誰かを食べたら、その時は　ボクがキミを殺す」

「た、食べないよ！　だつて人間を食べるなんてっ
人間だから。」

さつき散々人でないと諭されたばかりだからそんな言葉を言うのはおかしい気がした。だから言葉の途中で口を閉じた。
人じゃないからつて誰かを食べるなんて、そんなことやりたくない。

それこそ、食べるものが人しかないなんて惨状に陥らないかぎり、でも殺すつてあのナイフで、かな。

ミコトが普段どうすごしているのか少しだけ真面目に気になった。でも、とりあえずの選択肢は一つしかない。

「……僕、保健所に行くよ」

「うん、それが一番だよ。人間は誰かに守ってもらうのが一番だ」
ミコトは笑った。いつのまにかトレイのチーズバーガーは全部なくなっていた。

僕は来たときと違い、一人で店の外に出た。

誰も僕を記憶することはない。

ミコトにはああ言ったけどやっぱり保健所に行くのは気が進まなかった。

アンチカテゴリの保護施設はどこにあるのかわからない、誰が患者なのかも公表されない。プライバシーの保護のためという文句がついているけど。

もし誰かを喰うことが明らかになっていたら。そして治療法なんて本当に存在しないのなら。

本当にアンチカテゴリは『保護』されるんだろうか。

アンチカテゴリについて調べることは世間的にはタブーとなっている。患者やその周囲のことを本にしている大学教授がいたけどネットやマスコミで散々叩かれている。病気のせいで身近な人を殺してしまった人間の心の傷を抉るなんてと。

じゃあ患者は？ 患者は本当はどこにいるんだ？

あんなに毎日何かの事件を起こしてる政治家が正義の味方だなんて僕には思えない。

患者のことは誰にもわからない。治療法はない。保護施設の場所はわからない。

たぶん、どこにもない保護施設に送られてしまっただろうな人でないのだからって簡単に。

証拠なんてどこにもないはずなのにそう考える方がしっくりきた。

「……死にたくないなあ」

呟いてしまった。昨日はあんなに死にたがっていたのに。

でもそれはきつと別の道を見つけたからだ。

アンチカテゴリになったというのに生きている二人がいた。だから自分も生きてみたいと思った。

……わがままなんだろうか。

あてもなく彷徨うと人は見知った道に来てしまつらしい。
いつの間にか公園の前まで戻っていた。

「あ」

時間が戻ってしまったのかと思った。

公園の入り口には黒いドレスの少女が、エスが立っていた。

「エス……」

エスは僕が呼ぶと小さく微笑んだ。

どうすればいいのかわからず、僕はその場に凍りついた。動けない。
い。

「幸運ね。もう一度会えたらって思ってたの」

「な、なんのために？」

「お友達になるために。言ったでしょう、あなたが」

コツ、コツ、コツ……

ゆっくりと僕の方に歩いてくるエス。

エスは僕の存在を食べるつもりなんだろうか。

に、逃げなきゃ。

ミコトは抵抗するなって言った。でもきつと今の僕なら無意識にでも抵抗しそうな気がする。今は死にたくない、それよりもあんな無様な姿になるのは嫌だ。

でもどうやって逃げたら？

夢の中ならどこまで逃げて同じ気がするし……いや、逃げたら大丈夫だ。だってどんな方法使ったのかわからないけどエスはミコトから逃げた。だから、逃げよう。

僕はエスに背中を向けて走り出した。

「あ、待って。待ってください！」

後ろから慌てた声が聞こえた。コツコツと足音さえも速くなる。

「待てないよ！」

律儀に返事する僕。

「話を……きやつー！」

びつたん。

間抜けな音が後ろから響いてきた。足音も止まった。

何があつたの？

振り向いてみた。

アスファルトの地面に伏している黒い物体があつた。……転んだ
エスだ。

今なら確実に逃げられる。

転んだ女の子を置き去りにして。転んだ責任の半分くらいをなかつたことにして。

……。

だつてエスだよ？ さつき二人ほど消したんだよ？ 一人はあんな残酷な方法で。

僕の足元に何かが転がってぶつかつた。

「缶ジュース？」

拾い上げると冷たかつた。それに重い、未開封だ。

まさかエスが買ったもの？

「お願い……待って……」

顔だけをあげてエスは再び僕の名前を呼んだ。

派手に転んだようだけど顔に傷はないみたい。よかつた。でも白い顔は土ぼこりに汚れている。立っていないのは足を打つたからかもしれない。

……うあー。

ここで見捨てたら男子としてどうなんだ。

いやいやいや、男子とかそういう問題じゃないよ！？

ミコトの言うことを認めるわけじゃないけど人間と考えるには怪しい存在だ。

そ、そうだよ、ここで逃げたら次に出会ったときに問答無用に食べられてしまいそうじゃないか。何より恨まれそう。もしかしたらあの二人よりひどい喰われ方をするかもしれない。抵抗しなかつたらいいって言うてたけど、じわじわと燃やされたり刺されたりする

かもしれないじゃないか。

……。

……。

……っ！

どうすれば、本当にどうしたらいいんだ。

頭の中に選択肢のようなものが浮かんだ。あー、僕ってばこんなときまでゲーム脳で嫌になる。

1) 逃げる　その場しのぎ。エスを見捨てることになる。後で殺されるかもしれない。

2) 助ける　殺されるかもしれない。

……そうか、殺されるかもしれないだけなんだ。

ミコトの話を全部信用したわけじゃない。けどあの話が本当だったら殺されるのはエスに限った話じゃない。知らない誰かかもしれないし、ミコトかもしれないし……僕自身が誰かを殺すのかもしれない。

……なんて葛藤を数秒のうちに終わらせた。

結局僕は足元の缶ジュースを拾い上げて、エスに右手を差し出した。

「大丈夫？」

「ええ、亮一」

責めることなく彼女は笑った。そして僕の右手を取り、そのまま立ち上がってから両手で包み込んだ。

「待っていてくれてありがとう」

「いや、僕は……」

どうするか迷っていただけだ。

拾ったばかりの缶ジュースの冷たさが左手にしてみた。

そつだ、返してあげないと。

「これ君のだろ？」

手渡そうとするけどエスは受け取らない。

「ええ。でも亮一にあげる」

「え？ どうして？」

「亮一が昨夜私にくれたから、お礼」

「お礼なんていいよ」

あれはついで見たいに渡したものだ。あまり記憶のフタを開きたくない。

でも断つたら機嫌を損ねてしまうかもしれない。僕はもてあまし気味にジュースの缶を両手で抱えた。

エスが僕をじつと見つめてくる。

……き、気まずいつ。

まるで昨晚の立場が逆転したみたいだ。昨日はどうしたっけ？

……ああ、逃げたんだった、僕が。エスがどこかに行く気配なんてないし……

「……君もジュース飲まない？」

僕の口からまた思わぬ言葉が出ていた。

このケダモノナンパ中学生め、死ねっ！

なんてミコトに言われても今の僕ならおかしくない。ミコトにこんな姿見られたら十中八九殺されるだろう、僕が。

僕達はベンチに並んで座った。

エスは僕が買った缶ジュースを、僕はエスが買った缶ジュースを持って。

もともと持ってた千円と今朝もらった五百円が僕の全財産。マイナス百二十円。増えることはない。

大事に取っておくより使い切った後のことを考えた方がきつとい

い。
缶のプルタブをこじ開けながらエスの方を見た。エスも同じようにプルタブを開けた。昨日は開け方を知らないなんて勘違いしちゃったな。

それよりもあまりおいしそうに飲んでるようには見えない。

無難そうなオレンジジュースを選んだつもりだったんだけど……。

「ゴメン、それ嫌いだった？」

「あまり飲んだことがないだけ。ごめんなさい」

「うっん、いいよ。好みを聞かずに押し付けた僕が悪いんだからさ」

もしかして、昨日のコーヒーマもそうだったんじゃないのか。

だから開けなかったんだ。

……ダメだますます恥ずかしくなった。

「コーヒーマもさ、嫌いだったりする？」

「嫌いというわけではないわ。飲めないわけじゃないもの。でもね、

私達はこんな食べ物じゃダメ。満たされないのよ」

胸を小さな痛みがついた。

ついさっきの、忘れようとしていた何かを思い出した。

「あれは、本当に君が、その、……食べて？」

「ええ。おいしくいただいたわ」

ケーキでも食べた後かのようにエスは満足げに呟いた。

「亮一は、まだお腹がすかないの？」

「僕はさっき食べたから！」

シェイク一本だけだけど。

「食べ方は、あの子に教えてもらわなかったの？」

「あの子って……もしかしてミコト？ うん、まあ……」

糞人形、と忌々しげに呟いていた顔を思い出してしまった。さっきも思ったけどこんなとこ見られたら殺されるんだろうなあ、あの立派なナイフで滅多刺しに。う、怖い。やっぱりミコトについていなくてよかった。

「そう……相変わらずバカな子」

本当に心の底から哀れに思っている声だった。

「私達は同じ夢を見続けているの」

「うん、それは教えてもらった。いや、その、僕、誰かを食べるつもりないから教えてくれなくったっていいよ」

エスの眉間にきゅっとシワが寄る。明らかな不満顔。

「ダメよ、絶対我慢できなくなるんだから。本当に必要だったら『エス』に教えてもらえるけど、でもその前に誰かに食べられちゃうかもしれないでしょう。そうなるくらいなら私が……」

エスの冷たい指が僕の頬に触れ、ガラス玉のように澄んだ目が僕の視界いっぱい広がる。

「うあ、ちよ、ちよっと待って！ それもやめてよ！」

「食べないわ。だって亮一、お友達になりたいんでしょ？」

食べないと言ったのにエスの顔は遠のくどころか近づいてきて、

僕の頬が冷たい両手で覆われて甘い蜜のような香りが僕の鼻に届いて

「ああうとうああ、たた食べないでっ」

「食べないわよ？」

「じゃ、じゃあ、なんで顔近づけるの」

「私の中の『エス』が教えてくれるの。亮一がこうされたって、

ね、当たってるでしょ？」

「ち、ちっ、違っ」

「嘘」

違わない。

違っと言いつれ切れない。

自覚していなかった無意識を暴かれてしまった。

頭の中が真っ白になる。

柔らかくて暖かい何かがぼかんと間抜けに開いたままの僕の口に重なった。

僕はどうしたいの？

エスとキスしたかったの？

それとももつと先に？

このままエスの体を抱きしめるのも押し倒すのも食べてしまうのもそれとも食べられてしまうのも一瞬だけどそれもいいかなって思
って

「……………」

僕は両手でエスの体を押し返した。

エスはすんなりと重なりかけていた僕の体の上から退いてくれた。
「君は、友達になってほしいって言った人全員にこんなことしてるの？」

「そうね」

「……………」

「だって友達になってほしいって言ったのはあなたで二人目だもの」

「一人目はどんな人？」

「人間だったわ」

ふざけんなよ、このビッチ！

なんて普通だったらきつと叫びたくなる。友達が人間かどうかなんて当たり前のことだから。普通だったら。

一人目は人間だった。過去形だ。

……………人間じゃなくなったか、もしくはもうこの世に存在しないか、両方か。

だからエスは僕がやってほしいことをやるんだ。

二度と自分から離れないように。

「あのね、やってほしいことはいろいろあるはずだよ。ぼ、僕だっ
て中学生だけど、お、男なんだからね？」

アンチカテゴリー同士の無意識はつながってる。

エスは自分の名前を忘れるくらいに『エス』に触れたらしい。

だからエスは僕の無意識を知る方法を知っている。

む、難しいけどたぶんそう。

それにどこかで『エス』に触れた僕はそれが真実だろうと根拠も

ないのに思った。

「でも、やってほしくないって気持ちもあるんだ」

「そうみたい。ごめんなさい」

「エス、やっぱり僕の心、わかるの？」

「少しだけ。あなたの『エス』が知ってほしいって思ってること、それに強い願望だけなら」

それならいつかなあ……。

もしこれからも知られたくないことをはっきり知られるようだったらエスから離れてどこかに行こうと思っていた。当てなんて全然ないけど。

「いろいろ、思つかもしれないけどさ、もしこれからも一緒にいるなら、僕が口でしゃべって頼んだこと以外はやらないでほしいんだ」
エスは目を丸くして驚いた。

「一緒に……いてくれるの？」

「友達だからね」

「私のせいでアンチカテゴリになったのに？」

「いいよ、別に。気にしてない」

責める気なんて少しもなかった。

「だから約束。指きりでいいかな？」

「指きり。……ええ」

僕の小指とエスの小指が絡み合った。

「ごめんなさい、亮一」

ありがとう、じゃなかった。

僕は今日化け物になった。

化け物になってエスの友達になった。

普通なら許されないことなのかもしれない。

二人も人間を喰った、たぶん僕の見えていないところでもっとたくさん人間を食べているエスの隣に立つなんて。

だけど僕には自分を見捨てた人間の隣より、自分を必要としてくれた彼女の隣に立つことが自然のように思えた。

エスに会わなければどうせ死んでいた。

もう少し生きていようと思った。

少し、お腹が減った。

アンチカテゴリーについての私論・その2

アンチカテゴリーについての私論・その2

アンチカテゴリーをタブー視する認識を世間はぜひに改めてもらいたい。

アンチカテゴリーは誰かに関わりを持たなければ関わりの深さだけ敵意を持たれてしまう。

だから殺される、とはいえ行方不明者に対する猟奇事件の数がありにも少なすぎる。その他の患者は保護されたと考えるのが自然であるが、ならば政府は保護施設の場所をどうしてひた隠しにしているのか。患者とその家族の人権を守るためだけとは考えにくい。

それに政府は感染はないと言っているが私個人は感染はあると考える。アンチカテゴリー発症者の近辺で行方不明となったアンチカテゴリー患者らしき目撃情報がいくつかあった。ウィルス性でないのは確実だが、どのようにして感染ルートを確保しているのだろうか。

また、感染以外にも発症するパターンがあるようだ。

虐待の末に亡くなった子供の何割かがそれに該当すると思われる。監禁のような扱いを受けた子供が外を出歩いて感染したとは考えられにくい。

もしかするとそのような子供がアンチカテゴリー発症の女王蜂になっているのではないだろうか。女王蜂に刺された人は働き蜂となり感染者を増やす。女王蜂ならではの特性だっけ持ち合わせているはずだ。

なぜアンチカテゴリーなどという病気が生まれたのか。

ここにアンチカテゴリー治療のヒントがあると私は考える。

2・人形が見る夢

1

2・人形が見る夢

私は誰？

『生まれたばかりの女児が行方不明！ 犯人の姿は監視カメラには映らず』

『監視カメラに死角あり！？ 院長発言「業者が悪い」 院長としてはあまりにも無責任な発言』

『……あれは病院の管理体制が悪いでしょう。もっと大きな事件が起きた可能性もありましたね。赤ん坊一人がいなくなっただくらいですんで幸運でしたねー。病院にははつきりと責任を取ってもらいたいものです。え、犯人像ですか？ この場合不妊に悩む女性が赤ん坊を連れ去るとというのが一般的な見解ですが、連れて歩いている女性がいないということは、やはり最近の如何わしいゲームに影響された人間の仕業ですね。最近の若者はゲームばかりで生身の人間に触れようとしないから……』

『犯人の手がかり見つからず。乳児の生存は絶望的』

『……昨夜未明、××病院の院長が部屋で首を吊って亡くなってい

るところを起こしに来た家族が発見し警察に通報しました。遺書が残されていることから自殺であると判断、院長は常日頃から家族に「もう死にたい」とこぼしており……」

誰も俺の価値を理解しようとしなない。

病院の清掃なんて俺に相応しくない仕事を押し付けやがって。

だがそのおかげで監視カメラの死角に気付いた。

俺は気付いた。病院の清掃なんて仕事をやってるのも、カメラの死角があるのも俺がずっと欲しがってるものを手に入れるために違いないと。

だから捕まる危険を冒して人形の素を手に入れた。

あとは何も世界を見せず、ずっと閉じ込め、自分だけの人形を創るだけ。

安い家を買って中を改装した。人形に相応しい世界を俺が造ろう。余計な物は何一つ侵入させやしない。なんてすばらしいアイデア。なんてすばらしいセンス。認めない奴こそセンスもアイデアもひねり出せないつまらない人間だ。

美しく育つように餌は定期的にあげよう。運動だつて狭い部屋の中でできる限りのことをさせる。太陽の代わりになる機械があつて本当によかった。

なのに。

こんなにこんなに大事に育ててあげたのに。

どうしてこの人形は大きくなるうとするんだ。

理想は百四十センチ。だがこの人形はそれより五センチ以上も育ってしまった。放っておけばもつと理想から外れてしまうだろう。餌の量を減らすべきか？

それでは美しい顔がこけてしまう。

手足を折ってしまおうか？ 美術品としての価値が下がってしまう。

じゃあどうする。この人形はもう俺の理想の人形じゃない。これだから人間というのは、すぐに俺に反発しようとする。

仕方ない。犯そう。

犯して俺との間に子供を産ませよう。

ここまで育て上げた人形と俺の間に産まれるんだ、きっとその子はこの不完全な人形よりもすばらしい人形に違いない。

俺は人形を押し倒した。

無垢な瞳が俺を見つめてくる。糞が、どうせお前も人間の女なんだからいつか俺以外の男に股を開くんだろう。ここまで育ててやった恩くらい返してもらってもいいはずだ。

「お父様、お腹がすきました」

「そうかそうか、じゃあ今からたっぷり食わせてやるからな」

「いいえ、お父様。『エス』が食べたいものは食べ物ではありませんん」

「エス？ 何のことだ？」

「お父様。……いい加減その臭い口を閉じてくださいまし。いいえ、もう消えてくださいいな」

私の名前、何という名前だったかしら。

最初に思ったことはそれだった。

さっきまで目の前にいた男が呼んでいた名前なら知っている。

でもそれが自分の名前だとは思わない。

きっと彼女は一度死んだんだ。

そして自分が彼女の体を使ってこの世界に生まれただ。

彼女はとても目の前の男を愛していた。もちろん、父親として。

彼女はそれなりに幸せだった。他に比較対象がないのだからそう思うしかない。

彼女の『お父様』は最近優しくなくなっていた。何か機嫌を損ねることをしでかしたんだ。聞いて更に機嫌を損ねることもわかっていった。

でも本質はそこじゃないの。

彼女は人として扱われたことなんて一度もなかった。

あの人はお父様。

私はお父様の人形。

人形ならどうして自分で動けるの？

人形ならどうして自分で考えるの？

お父様はお父様。

私は……誰？

自分に問いかけた。

何度も問いかけた。

暗く狭い部屋で何度も何度も。

この世界には彼女とお父様しかいなかった。

それ以外に自分の意志でできることなんて一つもなかった。

『あなたはね、『エス』っていうの』

その声は内側から聞こえた。もしかしたら自分の口から出たかもしれない。

とにかく声を聞いたときに彼女は死んだ。

大好きにならざるをえなかった『お父様』がとても汚い生き物に見えた。

だから消した。

お父様は私になった。

それが存在を食べるということ。

お父様の知識は私の知識に。

お父様の経験は私の経験に。

お父様の……お父様の考えていたことが私の考えていたことに。

お父様は本当のお父様じゃなかった。

そうだとしても彼女はとても幸せでした。幸せになるしかなかったのです。

だから人形として不要になったのならそのまま殺してほしかったんです。何も知らないままきつと彼女は幸せなまま死んでいただろうから。

私はあなたのために生まれてきたんじゃない。

今までお父様の私室だから入るなど言われていた扉を私は開けた。ひんやりとしたノブを回して扉を押す。

目に何かが刺さった。眩しい、光。

それが『太陽』だということはお父様が私の中にいるからわかるのだけど、こんなに強く痛いものだなんて。

お父様の見ていた世界とこれから私が見る世界は違うんだ。

ドアを閉めて部屋の中に戻ろうかと思った。きつと扉の『中』は自分の知らないものばかりだ。恐ろしいものだってあるはず。世界はお父様には優しくなかった。いつも敵意をお父様に向けていた。もし私がそんな敵意を向けられたら耐えられるだろうか。

『だけどあなたが欲しいものはここにしかないわよ』

また声が聞こえた。もしかしたらただ考えただけかもしれない。けど欲しいものがここにしかないのなら仕方ない。私は中に入ることを決めた。

お父様がくれた黒い傘を広げて扉を開けた。強い光は黒い布に遮られて私の肌まで届かない。これなら大丈夫そうだ。

それにここは『中』じゃない『外』だ。

初めての外。

世界にはたくさんの物がある。

四角い積み木のような灰色の建物の横に、赤と白の屋根の派手な建物がある。その隣には緑の木が並んで植えられている。

全部ばらばら。

人だつてそうだ。

黄色い帽子をかぶった子供達が、黒と赤のランドセルを背負って跳ねるように私の横を駆けていく。おそろいの青いシャツを着た集団が「いちに、いちに」と走っている。薄い緑のスカートの女性とこげ茶色のスーツを着た男性が談笑している。

ばらばらなのに違和感がない。

歪なのは私だ。

あの世界も歪だった。黒と白しかない部屋や目が痛くなるような強い桃色の部屋。お父様が余計な物を入れないように苦心した世界。だからこそ歪。

あの世界にいた私も歪。

歪な私は歪じゃない人々からちらちらと視線を投げられた。けど向こうから声をかけてくるようなことはない。

かけたいならかけてもいいのに。でもそれを伝える方法を私は知らない。

こちらからならどう声をかければいい？

『しぎげんよう』

お父様に何度もやらされた人形らしい挨拶。でもそれで正しいのかはわからない。

だって私が持っているお父様の記憶では、お父様がどんなに周りに話しかけてもお父様の望む答えは返ってきてないのだから。

結局外に出ても生き方がわからない。

帰ろう。帰ってあの小さな世界で眠るように死に落ちよう。

そう思ったのに

「わ、君、すごい格好だね」

私の正面に誰か立って声をかけてきた。

傘を少しずらして視界を広げてみた。

目の前にいたのは女の子。身長は私よりも少し高い。茶色く長い髪の毛は桜色のクリップで一つにまとめて涼しそう。薄い黄色の半袖からは小麦色の腕がのぞいている。何もかも、やっぱり私と違う。

「わわ、顔もすごく白いんだね。ていうか顔色悪いよ!？ どこか具合悪いの?」

彼女が急に顔を近づけてきたから私は固まってしまった。返事もできない。

「まあ、一年中外走り回ってるあたしと比べたら皆不健康に見えるやうけどさ。ってゴメンね、いきなりこんなこと言っちゃって。んー、とりあえず、あたし西若にしわか 七日なのかって言うんだ。あなたは?」

黙りこんでいたら自己紹介までしてくれた。

どうして彼女が声をかけてきたのかはわからないけど、彼女ならどんな挨拶しても受け入れてくれるかもしれない。

スカートの裾に両手で掴み一礼。

「ごきげんよう」

掌には汗をじっとりかいていたし、脚はかたかたと震えていた。怖かった。怖いことが知られることも怖かった。

「映画のお嬢様みたいな挨拶するんだね。あ、笑ってるわけじゃないんだよ、あなたに似合ってると思うよ。名前はなんていうの?」

「私は、エス」

「エス？ 外国の人みたいなお名前だね。あ、そっかハーフなんだ。だから色が白いしそんな格好してるんだね」

何も説明していないのに彼女は、七日は勝手に納得してくれた。ほとんど間違っていた。だけど彼女を否定することはできない。

だって真実を話してきつかけを失うのは嫌だった。

「ねえエス。今から時間ある？」

私は頷いた。

時間ならたくさんある。

これから何をすればいいのかわからないくらいに。

「よかった。立ち話もなんだしね。こっちはおいでよ！」

七日は私の手首を握って走り出した。足元をもつれさせながら私も急ぐ。

とても温かかった。

七日が連れてきてくれたのは公園という場所だった。

「ちょっとここに座って待っててね」

白い長いすに私を座らせて、七日は一人で駆け出した。孤独を感じる暇もなく彼女はすぐに戻ってきた。

「おまたせっ！」

髪を揺らしながら彼女は戻ってきた。あんなに速く走ってきたとこの息一つ切らせていない。やっぱり私とは違う。

彼女の右手には細長い筒が握られていた。

「レモンティーとミルクティーどっちが好き？」

「どちらも好きよ」

正確には嫌いだということ私には教えられていない。何もかも肯定することだけを教え込まれた。

でもそれは死んだ彼女の話。

これからの私はどうなんだろう。

「ん、じゃあミルクあげるね」

ひょいっと白と茶色の筒が私の手の中に放り込まれた。冷たい。慌てて落としてしまいそうになるけどしっかりと掴み取った。

「わ、大丈夫？ ごめんね、つい」

七日は自分の渡し方が悪いせいだと思ったようだ。

「いえ、少し驚いただけだから」

私は手の中にある金属の筒を見つめた。こんなものは私は初めて見る。紅茶はいつもティーカップから注いでいた。

「どうしたの？ もしかして外国から来たから開け方知らない、とか？」

七日は心配そうに私と金属の筒を交互に見た。

「いいえ、知ってるわ」

私は知らない。

でも私は知っている。

私になったお父様なら知っている。

これは缶ジュース。このプルタブに指をかければ大丈夫。

七日が缶の先の指を心配そうに見つめているから私は力を入れた。けど、知っていた知識よりもずっと力が必要だった。

お父様と私は違うんだ。

冷たい紅茶を飲むのは初めてだ。喉を通る液体はとても甘くてミルク臭い。私の知っている紅茶じゃない。おいしくないのが申し訳なくて、私は七日に別のことを尋ねてみることにした。

「七日はどうして私に声をかけたの？」

「んー、どうしてかな。なんていうかね、声をかけてほしそうだったから。違ったらごめんねー？」

「いいえ、謝らないで」

実際そうだったのだから。

「あたしもね、四年くらい前にこの街に引っ越してきたんだ。今はたくさん友達もいるけど、あの時は誰も声をかけてくれなくてさみしかったなあ。だからエス見たとき思ったんだ。あ、この子声をか

けてほしいんだって」

「……七日は寂しかったの？」

この人が寂しい？ 私と同じように？

それはとても信じられないことだ。

「うん、三年前はね。でも今は寂しくないよ！ ねえエス。まだ時間ある？」

「時間ならたくさん」

「んじゃ遊びにいこっか！ お金の心配ならしなくていいよ！ あたしが出したげる。バイトしてるからだいじょびだよ。どーんこの七日様にお任せなさいっ！」

七日は思い切り自分の胸を叩いた。強く叩きすぎたのか、「んげほっ」と咳き込む。

「……ふふっ」

おかしくなつて私は笑ってしまった。

あの世界から出て初めて私は笑うことができた。

「あ、笑ったな。んじゃつきあうの絶対だよ！ 遠慮なんかしたらダメだかんね！」

七日は私の手を掴んでまた走り出した。

七日が最初に連れてくれたのは小物屋さんなんだろうか。桃色のウサギや緑色のクマのぬいぐるみ売られている店。びっくり箱で七日が驚かせてくれたので私も動いて歌う花で七日を驚かせてみた。次に来たのはピザ屋さん。熱いのを知らずに食べてヤケドした私に七日は笑いながらお水を差し出してくれた。

知識はあるくせに何も経験したことがない私に七日はいろんなことを教えてくれた。

街が暗くなりかけた頃、私はきらきら光る店の横にある大きな箱に視線を奪われた。

人形が透明な箱にたくさん入っている。まるで　ほんの少し前の自分を見ているみたい。

「あれはねーあの中のをぬいぐるみを取るゲームだよ。やりたい？」
外国から来たと勘違いしたままの七日は聞かなくてもいろんなことを私に説明した。

「……いえ」

いくら外の世界を体験したことがなかった私にもこれまで七日がたくさんのお金を使ってくれたのはわかる。お金は大切なものだ。お父様はお金が欲しくてたくさんの人と喧嘩した。……七日もお父様と同じように誰かとみにくい争いをするのだろうか。それは、なんだか嫌だ。

「遠慮しなくてもいいんだよ。あーでも、あれ取れるまでやるといくらでも使っちゃうんだよねー……じゃ、五回までだね。五回分入れるね」

止める暇もなく七日は箱の横の小さな穴にお金をチャリンと落とした。

「まずはあたしがお手本見せるね。ここをこう押しして……うん、こうすると中のクレーンが動くんだよ。そしてあの穴の中に人形を落とすと人形をゲット！　なんだよ」

七日が箱の横のボタンを押すと、中の機械が動き出し静かに下りた。そして猫のぬいぐるみを掴み、そうになるだけで猫はするりと箱の中に落ちてしまった。

「わわっ惜しかったんだよ、もう一回……ってエスがやるぶんがなくなっちゃうね。エスどうぞどうぞ」

「あの、私は別に」

「いーからいーから！　本当に遠慮しなくていいんだからっ、もーかわいいー子なんだから、うりゃーっ！」

「きゅっ」

七日がいきなり抱きついてきた。私は動くこともできずに倒れないことだけを考えてその場に硬直した。

「あ、あのっ」

「んー、細いしちっちゃいし、あたし一人っ子だから妹欲しかったんだよねえ、この子などでなでしちゃう。……あ、なんかバイ気持ちになつてきちゃった。んふふ、エス。禁断の百合愛とか興味ない？」

「禁断……？」

「もーじょーだんだよー！ そんなに本気で怖がらなくてもいいんだよつ。というわけでっ、ゲームはあたしのおごりね。そんなに返したいならまた今度でいいんだよっ！」

「また、今度……」

そんなときがまた来るんだろうかと不安に思っているうちに私は七日に背を押されて箱の前へと押しやられた。

箱の中にはたくさんの人形、ぬいぐるみ。

彼らの目には私がどう映っているんだろう。

外に出られておめでどう？

それとも人形のくせに外に行くなんて？

「どれにしちゃうか迷っちゃうよね」。最初なら掴みやすいのがいよ。丸いのじゃなくて、あれみたいに首がちゃんとあるものとか」

七日は黒い服を着た女の子の人形を指差した。黒い小さい羽が背中についた人形だ。何かに似ている気がする。でも何なのかはわからない。

「ではあれを……」

「わ、エスががんばる？ がんばっちゃえー！」

私はボタンを七日みたいに押して機械を動かした。機械は人形のだいぶ上で閉じて何も掴まずに元の場所に戻った。

「最初だからしょうがないよ！ えーと、あと三回か。がんばれー！」

えいえいおーと七日が後ろで片手を上げながら応援してくれる。

「……がんばるわ」

知らないうちに口元をひきしめていた。七日が後ろで見てる。がんばらないと。

二回目。人形の横に機械が埋まる。

三回目。人形の頭を掴むけどするりと逃げる。

「わわ、おしいんだよっ」

七日が拳を握りしめながら悔しがった。

そして四回目。最後。機械は人形の首じゃなくて小さな腕を掴んだ。

「わわわっエスすごいんだよっ！」

ゆっくりと動く機械を見守る私達。 だけど。

「ねー次どこ行くー？」

店から出てきた集団の一人が強く箱の側面にぶつかつた。その拍子に人形はするりと逃げ出し、人形の山の中に落ちてしまった。その一人は「いったー」と笑いながらどこかに行ってしまった。

「わあーっ!？」

黒い人形は落ちた。そして落ちたところで不安定さを保っていた丸いぬいぐるみがてん……と穴の中に吸い込まれるように落ちていき……。

「……ふ、複雑な気分なんだよ……」

箱の下から取り出した丸いぬいぐるみを持ちながら七日は呟いた。

「えと、最初に狙っていたものとは違うけど、エスおめでとう！」

はい、と七日はぬいぐるみを私にくれた。正直な感想を言うと、目が離れすぎてあまりかわいくない。七日もそう思ってるのか「いいらない？」と不安げに尋ねてきた。

「いいえ、いただきわ。ありがとう」

私が受け取ったのは丸いぬいぐるみ。

黒い人形は箱の中。あの子を出してくれる人はいるんだろうか。いいえ、きつと自分で出なければ意味がない。だからこれでよかったんだ。

「わ、そうだそうだケータイ持つてる？」

「ケータイ」

ケータイ。携帯。携帯電話のことだ。

「いえ、私は持ってないわ」

「やっぱり外国から来ると手続きとか大変そうだもんね。じゃあ明日は暇？」

「……………ええ」

「だったら明日、そうだね四時くらいにあそこの公園のベンチで待ち合わせ。どう？ 今度はあたしの友達も連れてくるよ。嫌だったら約束ぶつちしちゃってもいいんだよ」

「お友達、ですか」

七日のお友達。どんな人なんだろう。七日のような子なんだろうか。

それなら、たぶん、一緒にいてもいい、と思えてくる。

「……………嫌じゃないわ。必ず行くから」

「そう？ じゃエスの家どこ？ 送ってあげるよ！」

「それは……………」

もしもあの歪な世界まで見られたら

七日は私を人間だと思ってくれるだろうか。

「もしかしてエス、用事とかあるの？」

「え、ええ。これから、少し」

「わ、そーなんだ。遅くまで連れまわしてごめんね！ 道はわかる？」

私はうなずく。

「じゃエス。……………っとその前に、改めて……………あたしと友達になってください」

七日が私に手を差し出す。意味がわからず首をかしげてみると、「握手だよ、握手！ えっと、他の国の言葉じゃなんていうんだろう……………」

「……………ハンド？ 違うよね……………」と七日は一人で悩みはじめた。

握手。確か手と手を握り合うこと。

私は七日の手を両手で握りしめた。温かくて、柔らかかった。

「友達に、なつてくれますか？」

「もちろん！ んじゃ、また明日ね！」

七日はぶんぶんと手を振りながら元気よく横断歩道の向こうへと走り出した。道の向こうで私の方を一度だけ見て、ぶんぶんと手を振っていた。私が小さく手を振りかえすと満足したのか、今度こそ七日はいなくなった。

彼女のように世界が優しいのなら、私はここにいってもいいのかもしれない。

そんなわけないでしょうに。

『欲しいもの、あつたでしょう？』

私の中の私がまた話しかけてくる。

欲しいものはあつた。

それは二つ。

一つは私をこの世界から出してくれるきつかけ。鍵。友達。七日。
もう一つは今までに食べたことのないもの。血。肉。人。七日。

食べたい。

七日の引き締まった腕はどんな歯ごたえなんだろう。お腹はみずみずしくて柔らかい果実のよう。きつと頬の肉は甘くて、缶の紅茶よりずっとおいしいはずだ。

でもこんなことを七日に知られたら、きつと七日はもう私に笑いかけてくれない。

七日さえいなくなり今度こそ一人になった私はぽつぽつと歩き、あの小さな世界に戻ってきた。歪で独善にあふれたとても小さな世界。

とてもお腹がすいていた。

紅茶を入れてクッキーを食べたけど、クッキーはぱさぱさして煉瓦を食べてるような気分で、紅茶にいたっては臭い水を飲んでるよう。

こんな紅茶もクッキーもいらない。

もし食べるとしたらそれは、

『あたしと友達になってください』

七日の笑った顔が脳裏をよぎる。

あまりの恐ろしい考えに私は頭を振ってかき消そうとした。無理だった。

彼女を食べるなんてそんなこと、できるわけがない。

だって彼女は友達だ。私の初めてできたお友達。彼女を食べてしまったらきっと、あの世界はもう私に優しくなくなる。

それにこの気持ち但至少でも彼女に知れたら。彼女はどんな目で私を見るだろうか。

恐怖？

侮蔑？

怒り？

どんな表情かはわからないのに、なぜかお父様が最後に私に見せた顔に似ているような気がした。

怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い。こわい。

どうすればいい？

彼女を失いたくない。たった少しの出会いなのに、彼女の存在はもう私にとってかけがえのないものになっていた。

『どうして?』

内側から問いかける声。

『どうして怖いのか? 前と同じになるだけなのに。それに失うのが怖いのならまた作ればいいのよ』

そして繰り返すの?

『ええ。ずっと、ずっと、飽きるまで』

私の中の私がそう囁いていたけれど、私は絶対に譲くつもりはなかった。

2・人形が見る夢 2

「んー、明日はどこいこつかな」

自宅のベッドで情報誌を広げながらあたしは呟いた。

あたし、西若 七日がこの街に来たのは四年くらい前。小学六年生のときだ。

友達は中学になってから作ればいい、今は街に慣れることが先決。両親はあたしのために数ヶ月早く引越しを決めた。

それはとても感謝している。実際そのとおりだったし。

でも中学にあがるまでの数ヶ月は本当にさびしかった。いじめはなかったけどこっちが話しかけても返事は敬語。同じカテゴリには絶対入れてくれなかった。

新しいカテゴリになじむのはとっても難しいことだと思う。爪弾きにされたら孤独、運が悪かったら敵視。子供だからこそよけいに敵しい。

でもそんなのはカテゴリの中の誰かが心を許せばいいだけの話。

だから決めたんですよ、あたしは。

もしさびしそうにしてる子がいたらこっちから声をかけてあげようって。

「エスって外国の人っぽいけど話すのうまかったんだよねえ、帰国子女って子なのかな？ そーゆー子が喜ぶとこって行ったら……うーん……そだね、昼休みにでも皆に聞いてみよつと」

明日はバイトはないけど朝練がある。

だからもうねよつと！

明日も楽しい日だといいなー。

……………。

「って目覚ましかけるの忘れてたーっ！」

窓からのまぶしい朝日に起こされてあたしは叫んだ。
頭近くに置いてた目覚まし時計の針はちょうど八時。

……全力で走れば朝練に間に合う！ もちろん他の作戦を執行する時間はありませんぞ大佐、さーいえっさー！

転がるように玄関まで走ると、玄関の方からお味噌汁のいい匂いが届いた。

「七日ー、朝ごはんいららないのー？」

そして誘惑の声まで！

大変です大佐！ 朝ごはんと聞いたとたんにおなか反乱を起こしてあたしの意志を乗っ取ってしまいそうです！ だめです、一分一秒の猶予ありません！

「いつ、いらない！」

ひかれる後ろ髪を断ち切ってあたしは玄関の扉を開けた。

六段ぶんの階段を一気にジャンプ！

硬いコンクリが脚に響くけど、気にしてる暇はない。急いで学校行かないと！

あたしの高校は歩いて行ける場所にある。陸上が強いのもあるけど、本当はどこよりも近いって理由で選んだ。うん、正解だったと思っよ。

タイムを計ってもらいたいくらいダツシユダツシユダツシユ！

校門はすぐに見えてきてあたしは中で一息ついた。

何人かの知ってる部員達が道具を倉庫から引っ張りだして準備をはじめてる。でも全員そろってない。よかった、間に合ったみたい。

あたしは見知った仲間達に手を振った。

「おーい、おっはよー！」

皆があたしの方を見る。でも挨拶は返ってこない。

「あ、あれ？」

一人がす、とあたしの頭を指差した。

「寝癖、ひどいよ」

「わ、嘘。わわっ」

慌てて頭に触ってみた。ううっ、本当だ。前髪とか後ろとかすごいことになってる。

「わあー、ちよっと直してくるねっ!」

ここから近いトイレってどこだっけ。それとも教室行った方が早いかなあ? とりあえず校舎の中に入って考えよう、あたしは昇降口へと急いだ。

でも寝癖を直す時間はなくて変な髪形のまま部活して、授業へ。

「わ、寝癖全然直らないよ……」

朝からずつとはねたままの前髪を触りながらぼやいてみた。何回か水でなでてみたけど乾くたびに反抗してくる。むむ、こいつ思春期の中学生かっ!

次の休み時間にミストかムース貸してもらおうと……。

でも次の授業なんだっけ?

今がつまらない古典だから、次は……

「……って家庭科だよ」

家庭科の授業は家から包丁持参。忘れてきたら貸してもらえりけど宿題決定。もちろん寝癖に気付かないほど急いでたあたしが持ってきてるわけもありませんでして。

「うう、宿題やだよー」

あたしは机の上にぺたんこ顎をついた。

休み時間の間に貸してもらわなきゃいけないから寝癖を直すヒマもないし。

でも授業中に怒られて目立つのもやだから授業が終わるとそっこーで家庭科室へと急いでみた。急げば寝癖を直す時間くらいできるかも。でも。

「あれ、先生がいないな。やっぱり先にムース借りたほうが良かったかなあ」

家庭科室には誰もいなかった。

ちよっと後悔しながら誰か来るのを待つことにした。っと思つて

る間に誰か来たぞ。うらやましいことにちゃんと包丁を持ってきてる。忘れた自分が悪いんだけど、ね。

「あ、湊にマキー！ 寝癖直すからムースとか貸してほしいんだけどー」

クラスメイト兼親友の二人に駆けよると、小さいマキの方が「ひっ」と何かに怯えたような声を出した。

「わわ、何？ もしかしてゴキブリ!？」

足元を確かめるけど何もいない。……ゴキブリってすばやいしね。「ゴキブリがいたならちゃんと言ってよ」

私はマキに近づいて肩を叩こうとした。

「こ、こないで!」

ヒュッ。

「えっ?」

何が起こったんだろう。

マキが、手に持っていた包丁を、あたし目掛けて、振りかぶっていた。

「やめてっ!」

反射的に腕を払った。少し切られた腕が痛い。痛いけど、どうして。

「わ、ど、どうして? 落ち着いてよ。何か悪いことしちゃったかな? ごめんね、あたし鈍感だからあんまり気付かなくて……っ!」

「いやああああ!」

隣にいたもう一人、湊が悲鳴をあげながら突き出した。鈍く光る包丁を。あたしに。

湊の横をすり抜けるようにあたしは家庭科室から廊下へと躍り出た。

「わ、わわ……あ、あたしたち友達だよ、仲間だよね?」

仲間といわれた瞬間二人の顔に浮かんだのは隠そうともしない嫌悪感。こんな拒絶、三年前にも見たことない。

二人ともこっちに包丁を向けて震えてるし、あたしは何も持って

いないっていうのに悪いのはあたしの方みたい。

え、どうして？

どうしてどうして？

本当にあたし

殺されるようなことなんてしてないはずなのに！

「お話は、無理かな……」

廊下の向こうから見慣れたクラスメイト達の姿が見えた。

「ご、ごめん、ちよつとたすけ、て……」

他の子に仲介してもらえばなんとかかなると思った。でも違った。

どの子もあたしの顔を見るたびに悲鳴をあげたり逃げ出したり。皆、湊やマキと同じ反応。

「わ、嘘。嘘だよ。びつくりさせようとしてるんだよね……？」

戸惑いすぎてその場に立ちすくむ自分の後ろ、親友だった二人が動いた気配を感じた。

「わ、わあああああ！！」

走った。

廊下の右からも左からも知り合いはやってくる。あたしと違う方向へ逃げ出す生徒。悲鳴をあげながら立ちすくむ生徒。誰も、誰もあたしのは助けてくれない。

いったいどうして？

意味わかんないよ。

ただわかることは一つ。

このままここにいたら皆に殺されてしまう。

どこかへ逃げなきゃ。

あたしは親友達を弾き飛ばすように走り出した。何も見ずに何も振り返らずに。

だから親友達の一人があたしの横腹に包丁を突き出したことに気

付いたのは、もうどうしようもなくなっただった。

待ち合わせの時間は四時。

でも私が長いすに座りはじめたのは朝の十時から。公園の時計塔を見ながら『10』の印から『4』の印までいくつあるかを数えてみた。むつつ。六時間。チクチクと少しずつしか動かない長い針が何周したら四時になるんだろう。途方もないように思えた。

でも他にやることなんてない。それにあの黒と白の世界にはもういたくない。その理由があるならどんな理由でもいい。

それに友達を待つのは案外心地いい。

私は日傘をくるくると回しながら七日を待った。

「七日様のお友達はどんな方なんでしょう」

世界にはもつとたくさんの方がいる。

たくさんの方の、存在。

もう声は聞こえない。

あれは誰？

あれは私？

私は誰？

昔の私はどこに行ったの？

どうして、と聞いてももう答えてくれる声はないし、答える必要もない。

……あんまり考えたくない。

私は私の世界が見たい。生まれて初めてそう願った。せめて一度は人として生まれてきたのだから。

「わ、エス……もう来てたんだ……早すぎるよ……」

待ち望んだ声。でもすごく弱々しい。七日だ。

傘を持ち上げると、そこには脇腹を押さえながらよろよろと歩く七日がいた。顔は青白く、昨日のような血色いい肌が嘘のよう。

私の顔を見ると力なく微笑み、そのまま膝が崩れた。

「七日！」

私は傘を投げ捨て七日に駆け寄った。七日が地面に頭を打ちつける前に私は手を差し出すことができた。七日の体が重みを預けるように私に傾き、錆びた鉄のおいしそうなおいしそうなおいが私に届いた。

お腹を押さえている七日の指の間からはどくどくと血が流れている。なんて美しい色をしているのだろう。私は唾を飲み込んでしまった。

……友達になんて気持ちえ。

私は唇を噛み締めて自分への罰とした。

「どうしたの、七日。私はどうすればいいの？」

こんな大きな怪我は知らない。
どうすれば？

私の知らない誰かに必死に聞いてみた。

「病院、救急車」

「……びよ、病院、はいいよ……たぶん、変わったのはあだし、だから、治してくんない……いたっ……でもエスは、昨日と一緒だから、よかったなあ」

「私は一緒……昨日と一緒……」

七日の言葉を繰り返す私。

変わったのは七日。私は一緒。

本当に？

七日と会う前の自分もういないのに、自分の知らない知識が増え続けるのに。

『友達になりたいと思ったんでしょう』
だから？

『だから友達にしたの』

七日はもう友達よ。

『いいえ。関われば関わるほど七日は私を嫌いになるわ。好きなほど嫌いに。嫌いなほど嫌いに。だから

エスが新しいイドをあげたの』

新しいイド？

「エス……あのね、エス……」

苦しそうに何かを言おうとする七日。

声が聞こえないから私は顔を近づけた。

突然、七日が私の唇に噛み付いた。七日の頭はすぐに私の膝の上
に落ちた。

「ご、めんね。いきなり。なんでこんなことしたんだろうなあ、あ、
あたし、別に女の子、好きってわけじゃない、のに。き、きのーの
は、ほん、とーに、じよ、だんなだよ……？」

「……ええ」

私は答えた。唇にできた新しい傷から流れる血をぬぐわずに。

好きや嫌いじゃない。

私と同じ感情を七日も持っている。

七日の顔色はますます悪くなって、視線はどこを見ているのかわ
からないくらいに虚ろになった。

七日は助からない。

このまま死んでしまう。

例え何も知らなくてもそれだけはわかった。

七日は私にどうしてほしいの？

それは、もう知っていた。

「七日、痛い？ 苦しい？ 早く終わらせたい？」

荒い息で私を見つめながら、私の言葉の真意を読み取るうとする

七日。

「……そうだね。これが夢なら、早く終わらせたいな」

「いいえ、違うわ。あなたはこれからずっと夢を見るの。私と共に歩き、共に生きる夢を」

「夢？ ……よくわからないけど……友達と一緒にいられるのなら、どこでも……」

友達とは私のことだ。

これから私は彼女を、友達を裏切るのかもしれない。

それでもこのまま苦しみながら死に至る彼女を見るよりずっと。

それが私の自分勝手であることを知りながらも。

私は彼女に囁いた。

人形のように冷たい声で。

「あなたは私になるのよ、七日」

七日の眼が驚愕に開いた。だがすぐに納得したかのように瞼を閉じた。このときの七日の気持ちは今でもわからない。

七日は消えた。

いいえ、七日は私の中にいる。

七日の血が私の血になり、七日の肉が私の肉になり、七日の思考が私の思考になる。

それを食べたというのなら食べたのだろう。

もしかしたらあの小さな世界にいた私はとっくの昔に食べられていたのかもしれない。

私はいつたい誰になっていくんだろう。

きつとそれは 化け物に。

私がないというのなら私がない世界を創ればいい。
そうでないときつと意味がないのだから。

幕間・とあるファーストフードにいる子供について

その倦怠感が食事の後だからか、それとも長い間『食事』をとってないからかなのはわからないけど。

「……………ふぁ」

ボクはファーストフード店の二階に作られた飲食席のはしで小さくあくびをした。

「さてと」

そろそろここを出ようかな。

「ねーきみきみ、そのかわいいきみ。一人？ 学校はいいの？」

……………なんて思ってるうちに変なのに声かけられた。今度出かけるときは帽子とサングラス忘れないようにしよつと。ボクってかわいいから本当困る。

本当にね、困るんだよ。

下からならみつけると少し怯んだ。けど

「そんな怖い顔しないでよ。平日にこんなところで一人ってことは暇なんでしょ？ カラオケ行かない？ ボーリングでもいいよ。それとも、別のところ行く？」

「トイレ」

ボクは席を立って横にある扉に向かった。

赤い色のスカート着た目印と、青い色のズボン着た目印の、せっかくだからボクは青い方の扉を選んだ。

「女の子がこんなところ入ったら危ないよ。でも客いないからいいかぁ」

何か勘違いした男がデレデレした顔でボクの後ろをついてくる。

ばーか。

数十秒後、男は慌ててトイレから出て行った。さすがに自分と同じモノ見たらひいちゃうよねえ、あはは。

この程度なら大丈夫だろ、たぶん。すぐ忘れるだろうし。それに

ああいうタイプは結構友達多いからね。意外とうまくやってけるタイプ。

それにもしアンチカテゴリーになったら、後始末してあげるから。

「そんなにボクって女の子に見えるかなあ」

さつき会った亮一って奴も、たぶん勘違いしたまんまだ。

「ちゃんと本に載ってるのと同じ格好してるのに……」

今度はもっと男らしい格好にしよう。

そんなに一生懸命人間のフリしてどうするんだい？

「……フリなんかじゃないよ」

ボクは目の前にいない誰かに答えた。

少し前。数日前というべきかな。

ボクは一人の女子中学生を、といっても喰われる側ってことは彼女もアンチカテゴリーなんだろうけど、よってたかつて二匹で喰ってる化物達を見つけた。

普通の『人間』からみたらそれはなんでもない光景だったかもしれない。女子中学生が倒れるところくらいは見たかもしれないけど、まさか焼かれて切り刻まれて喰われている最中だなんて思いもしないだろう。

それに人間はなぜかこういふときは寄ってこない。

もしかしたらボク達の方が人間を避けてるのかもしれないけど、ま、判断する材料はないんだからどっちでもいいか。

「いいね、ずいぶんひどい喰いつぶりだよ。何人目？」

ボクが拍手をしながら近づくと、巫女服の少女は睨みつけながら「……五人目」とだけ答えてくれた。

となると確信犯か。

一人目ならまだ事故としてありえる。自分を毒虫だと気付かずに未練たらたら人間に付き纏おうとするから。

だけどさすがに二人目から事故ということはない。

五人目、だなんて明らかに人を喰うことを選んだ化け物だ。だいたいこの頃には人間をアンチカテゴリーにする方法を確実に知っている。

ま、ボクには一人目だろうが百人目だろうが関係ないけどね。

「なに？ あんたは選ばれた戦士なの？ それとも偽りの世界の敵？」

「うわあ」

たまにいるんだよね。見た目だけは自分の好きにできる力を手に入れたから勝手に変な方向に解釈する属性が。

「うん、でも大当たりじゃなかったけど、ハズレでもないってところか」

さてこの二人はどうするべきか。

このまま殺して知らぬところに埋めてもいい。いつもならそうする。

けどこの近くにはあの人形がいたはず。だからこそボクはこの辺を彷徨っていた。

最後までらい喰われる意味を知らながら後悔して死んでいくべきか。

「？ どういう意味だ。お前も俺の炎をくらいたいわけか？」

包帯を巻いた少年がボクに拳を突きつけた。

「いやボクはキミ達の敵じゃないよ、その証拠にほら」

ボクはスポーツバックの中から分厚くなった封筒を取り出した。入ってるのは百枚くらいの紙幣。包帯の少年は中身を確かめると「な、なるほど」とあくまで平静を装いながら受け取ってくれた。

なんだかんだで化け物が生きていくにもお金はある。これくらいで味方と勘違いしてくれるなら安いもんだ。

「さて、キミ達がアンチカテゴリーになったことはもう自覚している

はずだ。ところで キミ達は人間に戻りたいと思わないかい？」

「なあんて。別に感染源を殺したからって人に戻れるわけじゃないんだけどさ」

もしそうだったらとつくの昔にボクは人間に戻っている。

漁夫の利を狙ったつもりだったけど人形には逃げられてしまった。エス、と名乗る存在がいる。『エス』は誰もが持っている。アンチカテゴリになったのは『エス』に強く触れたから。『エス』に強く触れれば触れるほど、今まで持っていた自分を忘れてしまう。

強く触れる方法はただ一つ。

人間としての自我を捨てること。……もともと人間としての自我を持ってない、持たされていない存在なら簡単に触れることができるかもしれないね。

そして『エス』そのものになった存在を強く想う。

こっちの方が簡単かもしれない。社会で問題になってるアンチカテゴリもこっちが主流だったりする。

そんな簡単なことで発症するなんて、ってどっかの偉い人は言うかもしれない。

簡単じゃないと意味がない。

少なくとも誰かにとっては。

あのエスを名乗る人形とは何回か殺しあったことがある。いつもいつも逃げられてばかりだ。

あいつはもう自分をエスだと思っている。

本当の自分なんか忘れてしまっている。

だから 壊すしかない。

誰かを喰うという夢を安易に見てしまう、あの禁忌の人形を。

なぜかあの人形は殺しても殺しても空気を掴むかのように逃げてしまう。

「ま、どんな理屈かはだいたいわかったけどね」
赤く何かの色のように染まった空を見ながらボクは笑った。

「いいよ、今度はこっちが喰い尽くしてやる」
ボクはバッグから携帯を取り出し電話をかけた。

『やあかわいこちゃんから電話だ。一人？ 学校はいいの？ なんとって』

ボクは電話を切った。

すぐに携帯が鳴った。

『ひどいよミコトちゃん！ それともきゅん？ どっちでもいつかこんなかわいい子が女の子のわけがないってね』

「ねえ加須さん。もしかして見てたの？」

『やだなあ、お仕事がんばってるんだからミコトきゅんのこと見守る暇なんてあるわけないっしょ。ミコトきゅんてば今日サングラスと帽子忘れていったでしょ。だからそういう目にあってるかなあって。あってる？ あってる？』

「とりあえずそのきゅんつてのやめてよ。殺すよ。できるだけ死なない方法で」

『こ、こわいつ！ ミコトきゅん……あーいやいや、ミコト。んで何の用？』

「お仕事頑張ってる？」

『んー、超がんばってる！ なんせ俺つてば仕事熱心だからねっ』

「お疲れ様。怠けると始末するから気をつけてね」

『こわっ！ やっぱりこのシヨタ怖いよ！』

「今のターゲット始末したらちよっと探して来て欲しい子がいるんだ」

『いや。どっどこの子』

「家出中の男子中学生で、鈴平亮——って言ったんだ」

3・どこかにいる女子高生の夢

1

3・どこかにいる女子高生の夢

私の友達はかわいくて頭もいい人気者です。

私はそんな彼女と友達になれてとても幸せです。

本当に幸せです。

樹里。私の自慢の友達。

「ねー、この色マジでやばくない？」

今日も綺麗な爪に高そうなマニキュアを乗せている。

「うん、きれいだよ。樹里はすごいねー」

私だったらきつと爪をのばしてもきれいに整えることなんてできないし、そんなきれいな色のマニキュアを選ぶことなんてできない。樹里と同じものを使っても同じくらいきれいになれるとは限らない。きれいな樹里はすごい。

「で、ちゃんと聞いているの？ 葉子」

「うん、高かったんでしょ、それ。そんな高い物買えるなんてすごいねー」

「だーかーらー。これ買っちゃったから今月ピンチでー。もしかしたら携帯代が払えないかもしれないの」

「あ、そうなんだ……」

それは嫌だなあ。樹里の携帯が止められたら夜中に電話することもできなくなっちゃう。樹里の話はとても面白いからいつも聞いて

いたい。

「あんだ鈍いわ、やばすぎるわ。親友がピンチって言うてるの。携帯が使えなくなるかもしれないの。こーゆーとき親友ならどうするの？」

「えっ、あつ、ご、ごめんなさい」

そっか、そういう話だったんだ。

言われないと気付かないなんて、自分でも鈍くて困る。こんな私と友達をやってくれる樹里を困らせちゃいけない。

私はカバンの中から財布を出した。

今日の財布には大きなお札が四枚くらい入ってる。普段の私なら持つのを躊躇するくらいなの。定期買ったためのお金だからなくさないようにしないと。でも少し余裕があるから一枚くらいなら樹里に渡しても大丈夫。

でも樹里は私がお金を取り出す前に私の手から財布をぴつと取り上げた。

「えーと、結構入ってんじゃん。ラッキー！」

樹里は定期代も含めた全部のお札を取り出して自分のポケットにねじ込んだ。

「あの、それ、定期代……」

「てーきだい？ あんたお金持ってんのにケチくさーい。てゆーか、あんだ困ってる友達を見捨てて自分だけ楽しむつもりなの？ うわ、さいてー！」

「違う、そんなつもりじゃないの、ごめんなさい」

「素直に謝ればいいんだよ あたしだって鬼じゃないんだからね。バイトの給料日には返すから、安心してね。てゆーか親友信じられないひどいやつは親友やめろし」

「うん……」

三ヶ月くらい前に同じように私からお金を借りたことはすっかり忘れているみたい。

でもそれは嫌われたくないから言い出せない私のせいで、樹里の

せいじゃない。樹里は友達が多いからきつとつまらない私のことなんて覚えていられないんだ。

樹里の邪魔しちやいけない。

だって私にとって樹里は大切な親友なんだから。

放課後。

あたしと樹里は掃除当番になっている。だけど樹里は机に座りながら私じゃない友達と一緒に話している。

友達と話すのは別にいいんだけど、先生に見つかると怒られるし、掃除もできないしね。友達として私が注意してあげなくちゃ。

「あ、あのね、樹里……」

「なによ、あたし今いそがしーんだけど」

「う、うん、でもね……」

「いつも思ってたんだけどさあ、樹里ってばなんでこんなくそーな奴と付き合ってるわけ？　もしかして樹里ってば本当はオタクとかだったりするの？　いーのよ、無理してあたし達と付き合わなくても」

樹里と話してた子が私を指差しながら言う。

せめて名前くらい呼んでほしい、同じクラスなんだから。

「その……」

でも何も言い返せない。

だって暗いのは本当だもの。

でも樹里までバカにするのは許せない。樹里は私なんかと違ってきれいで頭もよくてみんなから好かれていて、それで私の大切な友達で

「あんたに言われるほど暗くねーし、こいつ」

言い返したのは樹里だった。

「え？」

「は？」

樹里と話してた子と私の声がぴったり重なる。

えっと……樹里が言い返したのは私のこと、だよな……？

「じゃっ、じゃなくてあたしオタクじゃねーし！ いろいろ理由があんだよ、付き合っつてのも！ もう帰ろっぜ！」

「あ、樹里、今日掃除当番……」

「そんなのあんたがやってろって、バーカ！」

樹里は話してた子と一緒に教室からさっさと出て行ってしまった。いろいろ忙しい子だもんね、樹里は。

うん、いいんだ。だって友達との約束は大切だから。でも一度でいいから一緒に帰ってほしいなーなんて、わがままかな？

「定期代は貯金おろせばどうにかなるかなー」

欲しいものがあつただけど友達が困っているのに欲しいものを買うなんてきつと許されないことだよな。だってそう樹里が言ってたんだもん。樹里は私の友達をやってくれてるんだから樹里のことを悪く言っちゃいけないんだ。

私は樹里のぶんもあわせて二人ぶん頑張って掃除を終わらせた。二人ぶん頑張ったせいか、他の掃除当番の子はいつの間にかいなくなつてた。うん、私とるいもんね。仕方ないよね。

独りで駅までの道を歩く。この時間はまだ遊んでる子が多い。でも私には遊んでくれる友達がいない。

うっん、友達はある。樹里は忙しいだけなんだ。

駅前の広場まで行くと、目をひくような子がいた。

「うわーすごい格好の女の子がいる」

街中だというのに薄いピンクのフリルいっぱいスカートを着た女の子が傘を回しながら歩いていて。もちろん雨は降っていないからこそおかしい。

ついじつと見ながら歩いちゃった。

「……あれ？」

駅前にはたくさんの人がいるのにドレスの女の子の周りは少しだ

けぼつかりと切り取ったように人がいなくなってる。きっと女の子が非常識な格好をしてるからだ。

なのに一瞬だけ、本当に一瞬だけだよ。女の子の周りにたくさんの方がいる気がした。

「こんな時間に怪談なんてやだなあ……」

うつん、ただの見間違いだよね。だてって周りには人なんてたくさんいるんだもの。掃除で疲れてるんだ、私。

なんて思ってたら女の子の顔が急にこっちを向いて視線がぶつかった。しかも彼女はこちらにすたすたと歩いてくる。見られたことが嫌だったのかもしれない。でもそれならそんな格好しなければいいのに。

女の子の脚はびたりと私の目の前で止まった。

じ、と黒い人形のガラス玉のような瞳が私の顔を見つめる。

「あ、ご、ごめんなさい」

「……ごめんなさい。間違えたわ」

思わず謝ったのに女の子の方も頭を下げてきた。あ、見られたことが嫌だったんじゃないやなくて誰かと私を間違えたんだね。勘違いなのにこつちから謝ってしまった。もっと早く謝ってくれたらよかったのに。もしかしたらわざとかなあ？　なんて嫌な女の子なんだろう、樹里とは大違いだ。

「私の方もじろじろ見ちゃって、ごめんね」

「もつとつくにお仲間かと思ったのに、少しだけまだだったわ」

「な、仲間？　少しだけ？」

「ねえ、あなた。お友達は好き？」

「す、好きよ」

いきなり何を言ってるんだろう、この子は。

「私は好きよ、お友達。いつも一緒にいてくれて、いつも私のことを考えてくれるの」

「私の友達だっていつも一緒にいてくれるし、私のこと考えてくれるもの！」

知らない子が勝手に言ってるだけなのに思わず言い返してしまう。

「本当に？」

「ほ、本当なもの」

「嘘」

女の子は残酷に笑った。

「一緒にいるならどうして彼女は先に帰っちゃったの？ あなたのことを考えてるのならどうして財布の中身を全部取っていったの？」

「なんでそんなこと知ってるのよ……」

「あなたの『エス』が教えてくれたから」

「エス？」

エスつてなんだろう。授業の時間に先生が少しだけしゃべってた気もする。

「でもこれだけしかわからない。そうね、きっと明日になったらもつとわかるわ。……でも、今日はもう食べちゃったからもういらない。さようなら」

「さようなら……」

女の子はふいと顔を背けて振り返ることもなかった。臆病な私がその背中に呼び止めることなんてできるわけなかった。

「あの子なんだったんだろう……」

不思議な子だ。

でも非常識な子。

どうして樹里のことを知ってたのなんてどうでもいい。あたしと樹里のことに口出さないで。樹里は私の大切な友達なの。本当はいい子なの。だって私の友達だから。

あんな子に、あんな非常識な子に言われたくらいで樹里のこと疑うなんて絶対にしないんだから！

こんど会ったらどれだけ私が樹里のこと好きなのか聞かせてあげるんだから。

でも彼女とはそれ以降会わなかった。

どうして樹里のことを知ってたのかもわからない。
それより大変なことが私の身に起きた。

朝。いつもどおりの朝。いつもどおりの登校。

「こ、こないですよ！ 来るなっ、気持ち悪いんだよ！」

教室で挨拶しようとしたら樹里に椅子を投げられた。近寄ろうとすると今度は椅子を振り上げて殴りかかってきた。私は慌てて逃げ出した。

はあはあと息を荒くしながら私は校舎裏まで逃げた。誰もいなくてよかった。

私、また何か悪いことをしたんだろうか。

樹里を傷つけるようなことをしてしまったんだろうか。

だけど私は思い出した。樹里だけでなく他のクラスメイトも樹里と同じように私をにらみつけたことを。

「……アンチカテゴリ……」

友達にある日突然嫌われる病気。

原因も治療法も不明。帰ってきた患者はいない。

あんまり話を出す雰囲気じゃないけど、私の周りにも何人か消えてる人がいる。消えてしまった人のことをいろいろ言うのは空気が重たい。

「でも、あんなに嫌われるってことは……」

関わりが深ければ深いほど殺意を向けられるとも聞いたことある。中には殺される人だって。

樹里は私を殺そうとした。つまり樹里は私と関わりが深かった。

私をちゃんと親友だと思ってた。

「そっか、樹里ってやっぱり素直じゃないんだよね。ふふ、かわいい子だなあ」

親友のチャームポイントを一つ見つけて私はうれしくなった。
でも私には他に考えなきやいけないことができた。

「……これからどうしよう……」

アンチカテゴリになった人は保健所に行かなきやいけない。でもどこにあるのかわからない保護施設に行ったら樹里と会えなくなる。友達と離れるのはとてもさみしい。知らない人ばかりのところになんて行きたくない。

「少しくらいなら、いてもいいよね」

誰かと関わらなきや殺意も持たれないはず。私は貯金通帳の残高を思い出しながらしばらくここにいてることを決めた。

原因不明の病気だもの、いきなり治ることだってあるよね。

きつとその時、樹里は私との関係の深さに改めて気付くだろうな。そして私達は本当の親友になれるんだ。ふふふ、楽しみ。

「……お腹減ったなあ」

私は小さく呟いた。

3・どこかにいる女子高生の夢 2

私の通ってる学校はとにかく大きな学校。

教室から出れば顔も名前も知らない生徒の方が多い。偏差値は平均的。多くの人がこの学校に行くから私も同じようにこの学校を選んだ。

なのに私の周りにいる人は少なかった。

大勢の人にとって私はいてもいなくてもいい存在。

どうして？

皆と同じことをしてるはずなのにどうして私は皆と同じものをも
らえないの？

こんなの嫌！ 私何も悪いことなんてしてないのに！

どんなふうにしててもいいから私を見て私に気付いて私を知
って！ いてもいなくてもいい存在だなんて思わないで私を必要と
して！

教室で固まってるグループを遠回りに見てなんとなく相槌を打っ
て仲間に加わったつもりでいた。本当は私の話を聞いてもらいたか
った。話すべき内容も考えないままに。

本当にここにいていいのかなって不安になってたときだ。

「ねーねー、あんたさ、いつも真面目にノート取ってるでしょ？

あたしさっきの授業寝ててさー、ちよつと見せてくんない？」

「う、うん、いいよ」

初めて声をかけられた。それが樹里。

その時は字が汚くないか読みにくくないか緊張してたけど、今な
らわかる。樹里は私が真面目にノートを取ってることを知ってた。

私のことを初めて認めてくれた子。

樹里は私とは違ってきれいで明るくて人気があった。クラスの人
気者で委員長までやってる。男の子にも人気があって私が知ってる
だけで五人くらい彼氏がいる。

人気者の樹里に嫌われた子はいつの間にかいじめられて学校にこなくなる。仕方ないよね、樹里に嫌われたんだもの。いじめられた子だって悪いよ。

樹里はいつだって人気者。

樹里を嫌いな人は悪い人。

こんなすてきな樹里の隣にいられるんだもの、携帯代だって押し付けられた委員長の仕事だってぜんぜん嫌じゃないよ。だってそれだけ私を必要としてくれてるってことでしょ。いいんだよ樹里。

だからとても樹里のことが心配なの。

私がいなくなったら樹里はどうするんだろう。

委員長の仕事は誰がするんだろう。樹里の携帯代は誰が払うんだろう。樹里がイライラしたとき夜中につまらない愚痴を言う相手はいるんだろうか。心配、とても心配。

もしかしたら……ううん、こんなに友達を心配してる私だもの。きっと神様が見ている奇跡的にアンチカテゴリなんて治してくれる。同じクラスの生徒や知ってる先生に気をつければ学校の中にいることは簡単。

授業時間に誰もいない廊下をうろつくなんて目立つことをしなければ誰とも関わりを持たずにすごすことができる

休み時間に廊下を歩く樹里がいた。隣には顔と名前は知っているけど私は話しかけたことがない子も。とても楽しそうに樹里と話してる。

私は樹里に気付かれないように、だけど不審に思われないように距離をとって後ろを歩いた。

きれいな樹里にはきれいな友達が多い。地味な私は樹里の中の例外だ。つまり樹里にとって私はそれだけ特別ということ。

「ねー、この色やばいっしょ」

あっ、あのきれいなマニキュアの色を自慢してる。やっぱり樹里はすごいなー。

「は？ それ前のシーズンのじゃん。ちょ、今更そんなのつけると

かださすぎ!」

樹里の隣の子はマニキュアの色を見たたん、ぷつと吹き出した。「ださくねーっての」

樹里が不満げに壁を強く蹴ったのが見えた。少しだけ見えた横顔は私に怒鳴りつける寸前のものと同じ。

なんてかわいそうな樹里。私なら「すごいね、きれいだね」とちやんとほめることができるのに。不満があるならちゃんと聞いてあげるのに。

やっぱり樹里の親友にふさわしいのは私だけ。

あんな樹里を傷つける人間なんていなくなればいいのに。

私みたいにアンチカテゴリーになればいいのに。

『それならいい方法知ってるよ』

私の中の私が教えてくれた。

放課後、樹里にひどいこと言った子に思い切りぶつかってみた。

「うわっ! てめー何すんだよ!」

「ごめんなさい、ごめんなさい、痛かったですよね。苦しかったですよね。怪我はしてませんか? 病院に行きますか?」

「な、なんだよコイツ。きもちわるいな……」

「大丈夫ですか? 大丈夫ですか? 大丈夫ですか? ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

私はその子の膝元にすがりつき何度も何度も頭を下げた。

「だいじょーぶだったってんだろ、離れる!」

「ごめんなさい、これで許してもらえますか?」

私は通帳から下ろしてきたお金をなすりつけるように渡した。

「お、おお……」

気味悪がりながらも彼女は受け取ってくれた。

お金は大切。樹里も私から借りたお金を返せないほど困ってた。欲しい物がたくさんあるからいくらあっても足りないんだ。だからいくら変な子が渡したからといって断ることはできない。

「じゃ、ゆ、許してやるからついてくんなよ！」

彼女はお金を自分のポケットにねじこんで私から逃げるように走り去った。

これでいいはず。

お金は欲しいけどあんな変な子にもらったお金をいつまでも持っているわけがない。そしてお金を使うたびに私のことを思い出す。私のことが記憶に残る。

全部私の中の私が教えてくれたこと。

思ったとおり。

樹里の周りから一人ずつ人が消えはじめた。

遠くでそれを見ていた私はとてもお腹が減っていたから、だから逃げたその子達を食べた。

樹里を困らせる子は全部私が食べてあげる。

誰かをアンチカテゴリにして食べるたびに私の知らない樹里の姿が増えていった。

私じゃない私と遊ぶ樹里。

私じゃない私と喧嘩する樹里。

私じゃない私が樹里から私の話を聞いている。

『なんで葉子と付き合ってるのかって？』

『なんかあたしのこと親友って信じててー。親友？ ぶっぎゃはははは』

『お金足りなくなったらすぐくれるし、まじ親友って便利だわ』

『あんなだから貯金だけはしてるみたい。あんたもお金足りなくなったらあたしに言ってるね。あの子からもらうから』

『足りなくなったら体売らせようかな。あーゆーの好きな親父もいるんだよね』

全部、全部、樹里のかわいい唇から出た言葉。

でもコレが本心だなんて思わない。だって今までアンチカテゴリーになった中で殺意まで向けられたのは私だけ。他の子は鬱陶しそうに避けられてた。つまり樹里の親友は本当に私だけ。

そして樹里と遊んだのも喧嘩したのも掃除を押し付けられたのも私から取り上げたお金できらきらした服を買ったのも全部私。

樹里の友達も私だけ。

私の友達も樹里だけ。

ああ、かわいいかわいい私の樹里。

あなただけは絶対にアンチカテゴリーにしない。

だって私の大切な親友なんだから。

いつだっけとずっとずうっとあなたのそばにいてあげる！

「樹里」

化け物が愛しそくにあたしの名前を呼んだ。

さすがになんかおかしいとは思ってたよ。

アンチカテゴリーがあたしの周りにだけ増えるなんて。
一人二人消えたときはどうでもよかった、でもいつの間にかあたし一人になってた。

どうして？

どうしてあたしがこっち側にいるの？

誰かがあたしのそばにいないといけないの。

誰かがあたしを認めてないといけないの。

誰かがあたしの代わりに盾になってくれないといけないの。

誰かがあたしの言うことを全部聞いてくれないといけないの。

どうしてどうしてどうしてどうして！！

「あの子の近くにいるとアンチカテゴリーになっちゃうよ」

あたしの耳に飛び込んできた言葉。

そういえば気に入らない誰かを学校に来させなくするために使ったこともあるっけ。まさか自分が言われることになるとは思わなかった。

思わず殴りかかってせんせーに怒られた。

次の日学校に行くとあたしの机と椅子がなくなっていた。

くすくすくすくす。

ねえねえアンチカテゴリーってみんなから嫌われる病気なんですよ。

あの子とつくにそうじゃない。

じゃあ 死んじゃっても別にいいよね。

まさか自分がこんな立場になるなんて。

こんなの嫌！ あたし何も悪いことなんてしてないのに！

だけど今まで誰かにしてきたようにいつか後ろから何かを投げつ

けられるんじゃないかとあたしは必要以上に怯え ついに見てしまった。

今まで恐れる必要もなかった後ろを。

いた。

敵が。

かつてはクラスメイトだったかもしれないし何でも言うこと聞いてくれる奴隷だったかもしれないし、友達、だったかもしれない。

だけど今は敵としか思えないアイツが後ろに立っていた。

それは誰もいない教室。

あたしは自分の机を探すために巨大な校舎を舌打ちしながら走り回った。適当な机を持ってきてもよかつたんだけど、負けたみたいで嫌だったからずっと探してた。

探すんじゃないかった。

「やっと私を必要としてくれたね、私の樹里。もう、樹里ってばちよつとだけいじわるだから私に気付かないフリなんかしちゃって。

でもいいの。だって私、樹里のことなんでも知ってるから。今まで知らなかったことも全部知ってるから。あのね、私樹里のためなら体だって売ってもいいのよ？ バイトだって樹里のためにしてあげてたんだから。あ、でも今の私じゃバイトもできないし体も売れないね、えへへ」

かつての……もう誰だかわからない誰かは心底楽しそうに笑った。「ねえ樹里。一緒に服買いに行ったの楽しかったねえ。でもあの服あんまりかわいくなかったから売っちゃったんだ」

そういう化け物の隣に、黒いキヤミを着た化け物が現れた。あたしの知ってた化け物はそんな服絶対に着なかつたはずだ。それにあの服は化け物の財布の金で買ったもので……

「そうそう樹里に向かって『このビッチ委員長！ あんたのやばい

写真、教室に貼り付けてやるんだから！」なんて言っでごめんね。本当はやばい写真なんか持ってなかったの。でも私はもうそんなこと言っただけで樹里を脅したりしないから安心してね？」

「な、なんでそのこと知ってたよ、殺すぞ！」

「やっぱり殺したくなるのは私だけなんだね、樹里」

「意味わかんねー、マジで死ね！ つーかくるなよ！」

それは誰もいない教室。

叫べば誰かに聞こえるかもしれない。

でもそれだけ。

きつと誰も来ない。

あたしも昔はその誰かだったからよく知ってるんだ。

「そんなに怯えないで、私の樹里。私はあなたを食べるなんて絶対にしないから安心して。あなたは私の大切な親友だもの」

「う、嘘だ嘘だ嘘だ！ じゃあどうしてこっちに来るんだよ！ あっち行けよ！」

あたしが一歩後ろに下がるたびに敵は二歩前に詰めてくる。

「だって親友と一緒にいるのは当たり前のことですよ？」

「来るなっ、来るな来るな来るなっ！ 来ると殺すぞ！」
ガタツ。

でも狭い教室の中でいつまでも後ろに逃げられるわけがなかった。あたしの背中に硬い机がぶつかると、その途端、足元に金属音が響いた。裁縫バサミだ。誰かの忘れもんだらうな。

目の前には化け物。

あたしはバサミを拾い上げて、化け物の腹に突き刺した。

「かつ！」

短いため息を吐いて敵はエビみみたいに背中を曲げた。あたしはバサミを抜いてもう一度敵の腹に刺した。的はそのまま仰向けで床の上に倒れた。

もだもだと動いている足の上に乗って、あたしはバサミを大きく振り上げた。

「死ね！」

ぶしゅ。

「にぎいっ！」

肉を裂く感触が手に、泥水をはねるような汚い音が耳に。

ぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅ

何度も何度もハサミを振り上げて下ろした。

ぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅぶしゅ

血と脂でぬるぬるになったハサミが指から抜け落ちようとする。

それでもあたしはハサミを握って振り上げて下ろして握って振り上げて

化け物を殺して殺して殺して殺して殺して殺した。

「あは、あはは、樹里ってば、そっ、そんな、ぎっ！ わたっ、私のことがっ、すきっ、好きだったんだね！ ぎっ！ わた、私もだいつ大好きだよ！ げえっ！ 好き、一番好きよ、大切なともだちだぼのっ」

だって化け物がハサミを振るたびにあたしを好きだと鳴いたから。

「死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ね！！ あんたなんか、あんたなんか、だいつきらいなんだよ！」

血泡と一緒に自分を好きだと叫ぶ化け物の口に、あたしはハサミを突き立てた。

いつの間にか化け物は動かなくなっていた。血の海の真ん中で死んでいた。

なのに何回も叫んだ「好き」なんて言葉がずっとぐるぐるとあたしの頭の中に響いている。

ここで死んでいるのは誰なんだろう。

化け物で、知り合いで、奴隷で、クラスメイトで、友達で、葉子

で。

人の脂に濡れたあたしの手からハサミが滑り落ちた。
かしゅん

冷たい音が届いたからあたしはゆっくりと立ち上がった。

だいつきらい、だいつきらい、だいつきらい。

葉子なんかだいつきらい！！

嫌いでよかった。

絶対にありえないけど、もしあたしが葉子のことを好きだったら
きつとこのハサミで自分の首を突いてただろうから。

あたしはふらふらと誰もいない校庭から外に出た。

最近はアンチカテゴリが流行っているから部活動なんてしないで
早く帰るようにつて教師が言ってた。

「うふふふ……」

早く帰っても意味なんてないのにね。

今のあたしならなんとなくわかる。

アンチカテゴリになるにはどうするか。

アンチカテゴリを増やすにはどうするか。

真っ赤に濡れた自分の手をじっと見た。夕日のせいで赤いのが血
のせいで赤いのかももうわかんない。でもなんだかおいしそう。

「やあやあ、そのきみ、お腹減ってない？ 俺と一緒に食事とか
どう？」

「食事？」

誰かがあたしに声をかけた。

そこには髪の毛がぼさぼさでスーツがよれよれの男が立っていた。
薄い色のサングラスをしているから危ない仕事の人にも見える。

でも今のあたしには別の物にも見えた。

「そうね、すごくお腹減ってる。でもその前に運動とかどう？」

あたしは男の首に両腕を絡ませてささやいた。

「うひょう積極的。俺ってば仕事熱心でしかも仕事ただけど別にい

ーよ」

あたしと男はそのまま学校から離れ

路地裏に入ったところで殺された。

「つか血塗れできつたねーんだよ、化け物」

過去・ある少年の悪夢

過去・ある少年の悪夢

むかーしむかしあるところに一人の男がいました。

昔と言っても十数年前です。でもボクにとってはずいぶんと昔のことなんです。

とつても頭がよくて一人で始めた小売店をあっという間に大企業
のグループにまで育て上げました。

わからないことがあつたら彼に聞けば大丈夫。

彼の言うとおりにしていれば会社は発展する。

彼の言うことに間違いなんてない。

人々は口々に男を褒め称え、恐れしました。

「まるで人間じゃないみたいだ」

その言葉は男を孤独へと追いやりました。

だから男がアンチカテゴリになつても最初は誰も気付きませんでした。もっともアンチカテゴリが世間に認識されたのはつい最近
んで、彼が本当にアンチカテゴリかどうかはもうわかりません。

男はアンチカテゴリなのに殺されませんでした。

社長だったからです。

殺したいほど敵意を持つても男が死ねば自分と家族と他の社員
達が路頭に迷います。会社を大きくしたのは彼だったから死なれた
ら代わりになる人間がいなかったのです。

ただどどうしても殺したくなるのも事実。

だから男を守るためと嘘をつきながら、人々は彼を大きな屋敷の中に閉じ込めました。

いつそ殺してくれたらよかったのに。

男は屋敷に閉じ込められても手紙や電話、メールのやり取りだけで仕事をしました。会社はどんどん大きくなりました。

それから数年後、男は仕事とはまったく関係ない一つの手紙をくれました。

『子供が欲しい』

男が閉じ込められてもう数年。直接彼と関わった人間はその間もちろんいません。

人々は男への敵意をすっかり忘れていたから願いを叶えてあげることになりました。

そして精液だけが屋敷から出て行き、ボクという命が試験管の中で生まれました。

……関係あるかどうかわかんないけど、化け物の子を宿した女の人の子供を産んだ三時間後に病院から飛び降りて死んだらしいよ。

うつすらと覚えているのは小さなボクに怯える人々の姿。

そのときはボクに見えない化け物が後ろにいるのかと思ってた。

ま、化け物はボク自身だったんだけどね。

四歳か五歳になった頃、ボクは誰も入っちゃいけない扉の中に入られ、閉じ込められた。

扉の向こうは隣の屋敷につながっていて中には本物の化け物がい

た。殺されるか殺すしかないと思った。

でも化け物とボクは殺しあうこともなくそこで暮らし始めた。

ボクは閉じた屋敷の中でいろんなことを教えられた。

会社の動かし方に社員の個人情報、銃の取り扱いに取り寄せる方法。遠くから気付かれずに人間をたくさん殺す方法。

いろんな国の言葉は知ってるけど、算数とか理科社会はもちろん教えてもらってないよ。基本的な倫理観念もね。

人の世界で生きるにはお金は大切。

化け物に会社の運営を任せていた会社はいつのまにか巨大グループになっていた。そのくせ誰が出してるのかわからない命令に従う能無し集団にさ。

「人間はお前の敵だ。あらゆる手段を使ってお前を殺しにくるだろう。だがお前は生きる。生きて人間を、世界を喰いつくすんだ」

化け物はボクに再三ささやいた。

もしかしたらボクは生まれたときからアンチカテゴリーだったのかもしれない。

いつの頃かわからない頃けどボクじゃないボクの声が聞こえた。声は囁いた。

『ねえキミは自分を誰だと思っているの？』
ボクはボクだよ。
ボク思う故にボクありってね。

『ねえキミは自分を人間だと思ってる？』
思わないよ。

『じゃあキミは誰だい？』
だからボクはボクだよ、しつこいな。

『キミの中にいるボクは誰？』
知らないよ。知るつもりもないし。
もう話しかけないでね。

『……………』

うなずくつもりはない。

きつとうなずいたらボクはボクじゃなくなってしまう。

この目の前の化け物みたいに。

「田中君、この書類をコピーしてきてくれないか」

「佐東君、すまないがちょっと行ってきて欲しい場所があるんだ」

「鈴木君、お客様にお茶を」

ボクと化け物以外には誰もいないはずの屋敷で化け物は誰かに話しかけていた。

姿はボクにも見える。スーツ姿の男の人や女の人。でもここには存在しない。それに全員輪郭が薄ぼんやりとしている。

だって全部夢。幻。妄想だから。

いつの間にかコピー機が増え、外に出ようとした男の人の姿がき消え、どこから現れた客にいつの間にか出てきたお茶が出された。

「……………違っつ！！　こんなの全部まやかしなんだ、ありえないことなんだ！！」

化け物は叫んで机を叩いた。

その途端、屋敷に突然現れたオフィスが消えた。社員も、コピー機も、来ていたはずの客も。

はああ、と息を荒げ、化け物はぎろりとボクを見た。

会社ごっこしていたさつきはボクのことなんていないも同然に扱っていたくせに。

「なあ。俺はなあ、この扉の外にもう一度出てみたいんだ。それだけなんだ。でも世界は俺を人として認めてくれない。殺されてしまう。だから父さんをこの世界から出してくれないか、ミコト」

こんなときだけ名前を呼ぶなんて調子がよすぎるよ、父さん。
それにね、ボクは思うんだ。

外に出たいなら死ぬことを恐れずに外に出るべきだった。そして
殺されればよかった。かつて人であったならわかるはずだ、存在が
間違ってるのはボク達の方だと。

だからボクはナイフを振り上げ　せめて人として殺してあげた。
ボクは化け物の命令なんか聞いてあげないんだ。
そしてボクは世界の『外』に出た。

4・ある刑事の転属

4・ある刑事の転属

「ほいほい、その鈴平亮一って子を探せばいいのねっ」

かるーく返事したら「うん」なんて短い返事の後に電話は切れやがった。

「ツンにもほどがあるだろ……」

ちなみにデレは存在しない。

俺に対してだけかもしれないけど。これって新しい属性に目覚めちゃえばいいのかしらん。

「んー、じゃあこっちの方にメール送って、と」

ぼちぼちと定型の文章をコピーしてメールを送る。

目の前にはだらんと白い手足を投げ出した女子高生。息はしていない。こうなるとどんなにかわいー子でもただの肉塊に見えてきちゃうね。

「化粧物だったのは間違いないんだけどー、特徴の女の子とは違うんだよね」

もらった写真にあったのは黒髪であんまりさえない感じの女の子。落とすのは簡単そうだけど後々の付き合いがすごく面倒になりそうなタイプ。

目の前にいるのはゆるふわパーマで化粧が濃い子。一晩遊んでも後腐れがなさそうなタイプ。意外と落とすの面倒だったりするんだよね。

「存在喰ってたら返り血つくはずないしー、でも化粧物なのは間違いないかったと思うんだけどにゃー」

全部俺の勘だけどつ。

「……つまり、もう一人いるってことか」

この返り血の量なら死んでるだろうけど。

俺はさっき送ったアドレスに追加のメールを送った。死体処分の追加お願いしますってね！。

『国立隔離心象彷彿症候群保護センター』に。

実は俺、こう見えても警察なんだ！。

しかも外国帰りの超エリート。ははは羨ましいだろう。非モテで童貞のちみたちは歯をぎりぎりさせながらどうしようもない格差社会を思い知るがいい。けけけ。

……なんてそれも一年くらい前の話だけどね。

一年とちよつと前、まだアンチカテゴリは世間に認識されてなかった。

代わりに問題になってたのが連続惨殺事件。

被害者に共通点はほとんどなし。全体的に見たら学生が多かったんだけど。えらくぐちよぐちよのぬるぬるのべちよべちよに殺されてること以外はね。

犯人は存在するんだけどほとんど被害者とそれなりに親しく（中には反対のベクトルの人もいたけど）突然の殺意を抱くまでの理由はない。が、殺したことに對する良心の呵責が驚くほどに少ない。

ここで犯人達の供述を一部紹介。むふ。

『あいつは殺されて当然だったんだ！』

『私は悪くないの、あの人は死んで別の何かがあの人体を乗っ取ったのよ！』

犯人達つーのも若干微妙な気もするけどな。

そいつらが気にしたのは殺したことで社会から排除されること。

えらく恐れてる『誰か』のこと。

世間じゃ政府の対応の遅さを叩きつつ、やれ新しい都市伝説やら何かの陰謀論で盛り上がった。なんだかんだで見えてることしか批判できねーんですね。当たり前だが。

別に何もしないで指をくわえたまま事件が起きるのを見てたわけじゃない。

「はい、化け物ちゃん、こーんにーちわー。元気に誰かを同類にしてる？ おっけーおっけー、そうでなきゃ俺も殺しがいがない DEATHよ」

「なっ、なんなんだよ、いきなり！ 俺はここで待ち合わせをして……」

「それってカエデちゃんのこと？ この俺様がカエデちゃんです、こんにちは。ネカマに騙されんなよ、この童貞君」

「て、てめえっ！」

「んー、化け物くっさいからしゃべんないんでー、ばつきゅーん」
なんて口で言いつつ本当に撃つてみたりー。

立体駐車場の中で鋭い銃声がワーンと響き、銃を見て慌てて後ろを向いて逃げ出そうとした化け物の脳髓がはじけた。誰かが吐いたゲロの上に転がる死体。うわーきつたねー！

バカだなあ、銃が相手のときは銃口見ながら横に逃げるんだぜー。
なーんて素人に言ってもしょうがないか。死んでるし。

病気だけど病気じゃない。

俺はとりあえず患者じゃなくて『化け物』って言ってる。

どうやらこの病気は感染するらしい。感染ルートは不明。ウィルスじゃないことはわかっている。

そして化け物は化け物同士存在を喰いあう。物理的に喰ってるわけじゃない。いつの間にかきれいさっぱり死体ごと消えている。共食した化け物はその後数日何も食べなくても生きていける。存在を喰う以外にどう表現すればいいんだろうな。

事件というより新しい病気らしいということには気付いた。

だけど治療法は不明。

なんせ患者のことを調べようとするとどうしようもない殺意がむくむく湧いてきちゃうからね。

だから狩ることにした。化け物の疑いがある奴らがあるときは集団で、あるときは気付かれないように地道に一人でこっそりと殺し続けている。

いやー地道な仕事って辛いよねっ。

「もしもしー、今日のぶんの害虫駆除終わりましたよー」

俺は片手で銃身をぶらさげて冷ましながら携帯を取り出して、知った番号にかけた。仕事の報告はちゃんとしないとね。

『加須克志かずかつし巡査。不明瞭な単語は使うな。報告は明確にだ。状況も説明しろ』

「ういういと。えーとI地区のネカフェにいた患者一匹ぶつ殺しておきました。作戦どおりネカマ釣りして患者を立体駐車場におびき寄せました。目撃者は俺の知るところいません。いたとしたら俺の責任じゃありません」

『……わかった。あとは処理班に任せてお前は本部に戻れ』

「えー！ もう遅いんだし、直帰でいいでしょ！」

『だめだ、今日中に書類上でも報告してもらおう。そのまま帰ってみろ、クビにするぞ』

「うわーモラハラだ！ 訴えてやる！」

『できるもんならな』

「ひどいブラック企業だーわかりましたよーもどりますよーと……このっハゲ！」

俺は電話の相手が気にしてることを思い切り叫んで電話を切った。

後が怖いよーな……ま、いいかつ！

だって俺ってば仕事熱心だから大丈夫さー。根拠は俺の勘だけだつ。

立体駐車場から外に出ると、俺と入れ違いに防護服を着込んだ集団が入っていった。ウィルス性でないとわかつているけど念のためらしい。

あいつらが前もってここらへんの人間を近づけさせないようにいろいろやってくれたから俺は銃を使うことができた。だから目撃者がいたとしても俺の責任じゃないというのはマジにほんとー！

万が一いたとしてもあれは映画の撮影だったと伝えられる。日常を愛する人間はいくら怪しくてもそっちの方を簡単に信じる。

これも住民の安全な生活を守るためなんです、我慢してほしいんです。

「や、お仕事がんばってねー」

同じ公務員として俺は宇宙人のように光る服を着込んだ仲間達に挨拶してみた。

会釈は返ってきたけど返事はない。忙しそうだし、あれって声出しにくいんだっけ。仕方ないか。

「んじゃ交流を深めるのは諦めて帰りますかね」

仕事なくしたくないしね。公務員なのに辛いよ。

どれくらいかの税金がかかってるのかわからないでかい警察署、の敷地内にあるプレハブの建物。

原因不明連続惨殺事件解決本部、なんて名前がついている場所がある。

もともとは倉庫として使われていた場所だ。

事件の解決の見通しがたたないから窓際どころか外にまで追いやられたんだ、と噂されている。

つまり中でやっていることはほとんど知られてないってことだ。といつても中でやっているのは銃の保存と書類の整理くらい。あとはもっぱら外で化け物ハンターに勤しんでるだけだ。

つわけで今日は帰りたかったのにハゲ（上司）の命令により俺は報告の書類を書いているのである。まる。

「えつとく、今日は一匹、二匹、三匹つと」

ぐりぐりとペンを走らせてると隣に座っていた同僚が大きくため息を吐いた。やだ辛気臭い。

「お前、帰国子女だっけ？ 似合わないけど」

「似合わないって失礼ですね、ちみ。ま、帰国子女ですけど何か？」

「いや……躊躇なく人殺せるのって、それでかなってさ」

「んー、それはさすがに差別発言だと思います、僕。でも向こうじゃ一般市民が銃持ってもいいからね。休みの日とか結構撃ちに行ってたよ。ばつきゅーん」

「……………」

「俺はただの仕事熱心ですよ。それに人じゃないよ、化け物だよ」

「人間に決まってるだろ。病気だかなんだか知らないけど、戸籍だつてあるしそれまでは普通に暮らしてたんだから」

「んにゃ、化け物だね。間接的にも人を喰うような存在は化け物だ。そして市民の安全を守るのがけーさつのお仕事でっす」

「……俺はそう考えることなんてできないよ」

「向いてないのかもね」

「そうだな。……実はさつき辞表出してきたんだ」

ここに部署が移動してからだいぶ人が減った。事務なんかの平和な部署に異動する奴もいれば仕事そのものを辞める奴もいる。そのぶんどつかから補填はされるからまったく人がいないなんてことはないんだけどね。

それでもだいたい知った人間が減った。

俺なんか最初からいる数少ない人間だからこうやって声をかけてくれる同僚は貴重な存在でもある。

「そっか、お疲れ様」

だからといって涙ながらに引き止めるわけでもなく、俺はこれまで何度も言ってきた言葉をかけてやった。

「俺はお前の方がよっぽど化け物に見えるよ、加須」

それだけを言っただけで同僚は部屋から出て行った。

机の上には私物なんて置いてやしない。

「化け物ねえ」

一人になった部屋の中で俺はくるくるとペンを回した。

あー、この部屋ベニヤ板臭くて嫌になるわ。

割と予想できていたことかもしれない。

ある日出社したら銃で撃たれそうになった（爆笑）

いや実際撃たれたけど避けたんだから撃たれそう、じゃないな、うん。

「んー、どーしよっかなー」

どうやら本当に化け物になってしまったらしい。

かといって誰かの存在を喰う気にはまったくならないんだが。もしどうしようもなく我慢できなくなったら喰うんならその前に自分で死ぬ。

それとも今ここで死ぬべきか。

化け物だから。

俺は懐にある黒い金属に手を伸ばした。

ブー、ブーッ

間抜けな震動が腰から伝わった。懐に伸ばしていた手をそのまま腰のポケットに向かわせ携帯を取り出した。

「はい、もしもしー」

「加須か。まだ生きてるのか」

「惜しかったですねー、もう少しでしたよ。それでこれから俺はどうすればいいんですかね。命令ならなんでもしますよん。俺、国家の犬ですから！ わんわん！」

俺は自分を殺す命令を期待した。

だって命令されたなら上司のせいにして死ぬそうじゃん？

「お前の新しい異動先を教えてやる。いいか、戻ってくるなよ。家に帰ろうともするな」

「俺をぶち殺さなくてもいいんすか？」

「いろいろ事情が変わってな。とりあえずは、だ」

そして電話は切れて新しい異動先が記されてるメールが来た。

ちょうどこの日、『病気』は『隔離心象彷彿症候群』、通称『アンチカテゴリ』として世間に認められた。

新しい異動先にいた上司は

「や、こんちわ。ボクが加須さんの新しい上司のミコトだよ」

男の娘だった。

やっぱ死んどぎゃよかったかにゃー。

5・気弱な中学生・鈴平亮一の夢・2

中学生が平日に外をうろろろしていればすぐに補導されてしまうかと思っただけ、あまりそうでもなかった。

大きな街に行けば僕やエスくらいの子がどろどろと歩いていたり、補導する立場の人がそれを見過ごすのも見た。僕だって近くを歩いたのに声をかけられなかった。

あっけなかった。

僕の見ていた世界は小さかった。

あの世界の中じゃ選択肢なんてゲームと同じくらいにしかなかった。

僕なんてただの背景なんだ。

誰も僕がどうしようとも気にしないんだ。

「私達のような人間が増えていくでしょう？ だから無意識に知らない人間に関わることに怯えているの」

とエスは言った。

だとしたら僕がいじめられた理由も少しだけわかるような気がする。

僕が新聞に載って少し知らない人間になったから……たぶん。

エスは普段どこですごしているのかを聞いた。

小首をかしげて少し困ったような顔を見せた。

「嫌ならいいんだよ？」

エスのいるところなら自分もいることができるかも、なんてちょっと期待したのもあるけど、女の子が嫌がるようなことはやっぱりし

たくない。

「いいえ、大丈夫。案内するわ」

エスは歩き出した。

向かったのはなぜか駅。

エスは小さなバッグの中からやたら無骨な財布を取り出してここから五駅くらい先の切符を買った。

「はい、亮一のぶん」

一枚を僕に手渡してくるエス。

「え、あ、うん、ありがと」

慌てて僕は小さな紙切れを受け取った。

な、なんていうか、切符を買うなんて当たり前前の光景が似合わない、というかこういうことは知らないんじゃない、なんて勝手に思っていたことが恥ずかしいっていうか……。

僕はエスと一緒に電車に乗り込んだ。

電車の中のモニタを見るとちょうど二時になったところだった。周りにほとんど人がいなくても当たり前前の時間だ。特に僕達が向かっているのは都市部から離れた方向だし。

エスの方を横目で見ると、当たり前前のように椅子に座って両手を礼儀正しく膝の上に乗せている。

どこに行くのか、というのは気になったけどとりあえず黙って電車で揺られることにした。

駅を出てしばらく歩くと住宅地についた。

てつきりどこかの豪邸が古い洋風の屋敷に住んでいるものかと思っていた。でもよく考えなくても僕達はアンチカテゴリ。そんなところに住めるわけがない。

白い壁と茶色の屋根の同じような家が立ち並んでいる。家の前にある置物や車の形で判断するしかない。

「ついたわ」

一軒の家の前でエスは立ち止まった。これも周りにある家と同じようなデザイン。家の前には何もなく、特徴と言ったら少しだけ薄

汚れてて雨戸が閉め切られてるってことだけ。道を間違えたら関係ない家をノックしてしまいそうだ。

鍵のかかかっていないドアをエスは開けた。

「おじゃまします……」

小さく挨拶しながら僕も中に入る。

出会ったときならともかく、切符を買い、ごく普通の住宅街を歩くエスの姿を見るとここにも当たり前前の風景があるんじゃない、と考える。どこにでもいそうなおばさんが「おかえりなさい、あらお友達？」なんて出迎えてくるかもなんてことまで。……僕達はアンチカテゴリだからありえる風景じゃないけど。

確かにありえなかった。

中に広がっていたのは当たり前前の光景なんかじゃなかった。

間取りは普通の家と同じはずなのに。階段の手すりには不恰好な針金が巻きついている。壁にはどんな作家が描いたのかわからない抽象画。何度も何度も黒いペンキで塗り埋めたのか表面が無骨にでこぼこしたドア。

玄関が黒と白で統一されているのなら向こうの部屋は蛍光ピンク一色。統一されているはずなのに統一されてない。

歪だ。

気持ち悪い。

何かを目指したんだろう。

テレビで見る芸能人の豪邸とか、外国のお屋敷とか、異世界の幻想的な風景とか。

なのにたどりつけていない。真似をしただけで手に入れたと錯覚している。目的が定まっていけないから彷徨い続けている。

こんなところに住んでいたらどんなまともな人間も生きる方向を見失って狂ってしまいそうだ。

「これが、私という人間が十四年間生きてきた世界よ」

本当にエスはこの家の中だけが世界のすべてだと信じて生きてきたらしい。

僕は半日の間に自分が生きてきた世界は小さいことを自覚した。ただエスの世界はそれよりも比べようがないくらいのレベルだった。

「他に誰がいるの？」

誰がこんなことをとは聞かなかった。

ただ僕の問いにエスはうつむいて首を振るだけ。知らないということなのか答えたくないということなのかわからない。

馬鹿な質問をしちゃったな。

僕達はアンチカテゴリだから普通の人間と関わることなんてできない。それが家族であれ、まったく知らない他人であれ。さっきも思ったはずだ。

「じゃあエス一人なんだ？」

「……ええ」

「エス、この世界嫌い？」

普段はどこにと聞いたときに見せた困った顔を思い出しながら僕は尋ねた。

「好きではないわね」

「それじゃあさ」

僕はある提案をしようとして一つのことを思い出した。

「……お金、持ってる？」

エスはお金と言われてバッグの中に入っていた財布を僕に渡した。蛇の皮でできた趣味の悪い男物の財布。数十枚の紙幣といくつかのカードが入っていた。カードに書かれている名前は男だ。

この世界を造り、エスを閉じ込めた張本人。

たぶんそうだ。

その人はどこに行ったかなんて考える必要もない。僕は二人も存在が消えるのを見た。勝手に使うことに胸を痛める必要もない。

「足りるかしら？」

「うん。これだけあれば十分だと思う。エス、どんな色が好き？」

「私は……薄い黄色が好き。あと桜の花の色も」

「黄色とピンクかぁ。できるだけがんばってみるよ」

「がんばって、亮一」

エスは少し頬を染めながら笑ってくれた。とても人間らしかった。がんばるしかない。

僕がアンチカテゴリになってから数日がすぎた。

今日も僕はホームセンターかデパートに向かう。そこで壁紙とペンキとカーテンと、ちよつとだけ女の子らしい小物をいくつかを買う。あんまり同じ場所で買い続けたり女の子らしいすぎる物を買ったりと覚えられそうな気がするから別のところで分けて買うようにして。

悪いことはしていないのに、犯罪の前準備をしているみたいだ。

もっとも悪いことをしていないかという胸をはってそうだとは言えない。

『アンチカテゴリかも？ そう思ったときはすぐに保健所へ！ あなたの友達はまだ友達じゃありませんよ』

街の大きなテレビで公共のCMが流れている。駅の構内や地下道にも同じ文句のポスターが貼られている。アンチカテゴリが交通安全と同じレベルのものに見えてしまう。どちらも人として死ぬんだから同じことなんだろうか。

僕はどこにあるのかわからない保護施設に行くのが嫌なわけじゃない。どんな目にあうのかわからないのは怖い。でもそれよりエスと離れてしまうのが嫌だった。

感染症にかかったというのに街をうろついている僕は罰せられるべきなのか。

それとももう人じゃないから化け物として処分されるべきなのか。長くこの生活が続くわけじゃないということくらいわかる。いくらお金があっても使ってもいけばいつかはなくなる。だからといって働くわけにもいかないしそもそも中学生の僕がまともに働けるわけもない。

そして何より僕はお腹がすいていた。

何を食べても満腹になった気がしない。体は健康そのものなのに空腹だけが僕を苛んでいく。どうして？

『それは僕が を食べてないからさ』

声が聞こえた気がした。

思わず周りを見た。近くを通り過ぎる人はいるけれど僕に声をかけた人はいない。

気のせい？

でもさっきの声は外というより内側から聞こえた。ぼーっとしてるときにふと頭に浮かぶ考えに似ていた。僕の声に似ていた。

疲れているから？

それとも……僕が人間じゃないから？

「……疲れてるからだね」

今の僕はエスの生活を大切にしていた。

それが僕のやりたいことなのは本当だ。

「おかえり、亮一」

近所の人に気付かれないような時間帯に玄関を開けるとエスがば

たばたと僕を出迎えてくれた。なんだか照れる。

そういえば自分の家でおかえりって言われたこと、なかったなあ……。

いや、もう考えないようにしよう。アンチカテゴリになった今、あの人はただの他人だ。最初からそうだったかもしれないし。

「今日は壁紙買ってきたよ。こないだ失敗したからね、貼り直すよ」
小さな家でも全部の内装を僕とエスだけでどうにかするのは時間がかかる。だからせめて一つくらいは必ずと決めていた。

黒くごてごてに塗られた階段をあがり僕は二階へ向かった。

いくつかの扉の一つ、そこはもう人形の世界じゃなかった。もともとは偽ゴシック調だった黒い部屋の壁紙が薄い黄色になっていた。……途中から派手に失敗してるけど。黒い床は茶色のペンキで塗りつぶした上にタイルカーペットを敷いた。家具からは変な飾りをもぎとって桜色に塗りつぶした。

女の子の部屋なんて知らないけどだいぶそれっぽくなった気がする。

僕もきつとエスの世界を造った誰かとそんなに変わらないんだろう。僕が思う理想の部屋をエスに押し付けてるだけ。

……違う。違うと言い切ってる。

誰だか知らないけど、前の世界はそいつが自分のために造ったものだ。中にいるエスも含めて。

僕はエスのためにエスが好きじゃないと言った世界を壊して、エスが好きだと言った色を使って世界を造り直している。

エスが嫌だつて言ったらやめるつもりだし、出て行けと言われたら出て行くつもりだ。もしかしたらエスに消されることだって。

押し付けてなんかいないはずだ。

僕は少しだけ窓を開けた。ペンキや接着剤を使うのに換気は必要だ。でもあんまり開けると近所に気付かれてしまう。普段開いていない雨戸がどうなっているかわからない気もするけれど、僕達はアンチカテゴリだから少しでも集中されることはやめたかった。

エスの安全な場所を壊したくなかった。
でも一度でいいから雨戸を大きく開けてエスに大きな空を見せてあげたい。

僕は失敗して弧を描いている壁紙をはがすところから始めることにした。

「よし、やるぞ」

「……あのね、亮」

不意にエスが僕を呼んだ。後ろに何かを隠して視線をそらすために床の片隅を見て恥ずかしそうにしている。

「この子をこの部屋においてもいい？」

「どの子？」

後ろに隠していたものをエスが差し出す。

丸くてちよつとかわいくないぬいぐるみだった。同じものがクレインゲームの中に入っているのを見たことある。人気がなくていつまでも箱の中に入ってる。しかも丸いからとりにくい。

「エスがとったの？」

「ええ」

「うわ、結構難しいタイプなのに。やるなあ」

というかエスがゲームをやるとは思わなかった。

「じゃあタンスの上に後で置いてあげようか。まだペンキが乾いてないから、後でね」

「ええ」

最近のエスはよく笑ってくれる。

でもエスは定期的に家を出る。

「一緒に行きましょう」

と僕を誘うけど僕は頷くことはできなかった。エスはそんな僕の様子を見ると困ったような、少し泣きそうな顔で笑うけど僕に無理

強いことはなかった。

エスはアンチカテゴリを増やすために外に出ている。

誰かをまた消したり、食べたりするために出かけている。

だってエスはどんな食べ物を持ってきても首をふって断るだけ。

一度ピザを買ってきたときだけ一切れ食べたけど、それだけだった。

どうしてなのかは僕が一番よくわかっている。

何を食べてもおいしくない。今まで好きだったものでさえもあん

まり喉を通らない。お腹はこんなに減っているのに。

普通の食べ物みんなこうだ。

普通の食べ物じゃなかったら？

例えばそれがもともと別の存在でできていたり、

別の存在そのものだったりしたら。

最初のとくに二人消えたときも同じ感情を持っていた。

おいしそうだなんて。

エスとすごすうちに罪悪感も消えていった。

だって当然のことじゃないか。

僕達は人間じゃなくて『そういう存在』なんだから。

……違う！

だんだん僕を蝕んでいる思考に僕は頭を打ち付けたくなくなった。

いつまでも誰かを食べない僕の姿はエスを否定することになって

いるのかもしれない。

いつか飢えに我慢できずに僕も食べてしまいかもしれない。もしかしたらそれは知らない誰かじゃなくてエスなのかもしれない。

だけど、今だけは、少なくとも人として考えることができる間は食べたくなかった。

「あれ、エスに似合うかも……」

ショーウィンドウに飾られているワンピースにひかれた。

今季の流行らしく同じようなデザインの女の子が何人も街を歩いている。

エスはドレスしか持ってない。

ああいうのやっぱり女の子だから着てみたいと思うんだろうか。

「……ってお金借りてる立場の僕が買えるわけないし……」

女の子の家に住んで、お金までもらって、そういう立場の人を表す言葉があつた気がする。

そつだ、ヒモだ。

「ぼつ僕は……っ」

頭が痛くなつた。ショーウィンドウのガラスに両手をつけて落ち込んだ。

「せめて少しくらい働いてみるとか……」

だから無理だつて。

家出中の中学生が働ける場所なんてあるわけないし、それに僕はアンチカテゴリだ。通りすがりの人達がショーウィンドウに手を付いたままの僕をじろじろと見ている。何事もなかったかのように僕は体を戻して早足で立ち去ることにした。

こんな生活が長く続くなんて最初から思つてない。

だとしても今の僕はやっぱり逃げてるだけだ。

エスのことは好きだ。

だけど僕はエスのことを考えることで根本的な問題と戦つてない気がする。

人として生きるか、化け物として生きるか。

人は生まれながらにして幸福へと努力する生き物だ。

たとえそれが間違った選択だとしても。

僕はまだどの選択肢も選んでいない。

「ねえきみ、鈴平亮一君だよね？」

突然名前を呼ばれた。

はっと顔をあげるとそこには頭ぼさぼさの男の人が立っていた。ヤクザっていうかチンピラっぽい。

「なんで僕の名前を」

その人は警察手帳を出した、と同時に僕の手首を強く握った。逃がさないためだ。警察手帳に書かれてた名前は『加須克志』って。かずかつし？

「搜索願が出てるんだよ」

「……帰りません。僕のことにはほっといてください」

「そーはいかないんだよねー。こー見えて俺って仕事熱心だからさ。……なんていいよ、別に帰らなくても」

いきなり手首が自由になった。逃げようとしても解くどころか動かすこともできなかったのに。

「どうして、ですか？」

「んー、管轄外つてのもあるかにや。それに鈴平君はいじめられてたんだよね」

「……………」

「クラスメイトや学校と独りで戦えなんて無茶言う気はないよん。たまには逃げる選択肢も必要だよね。家族の問題とかもあるかもしれないけど、さすがにそこまで口出す気はねーや。だって管轄外なんだもん」

この人本当に仕事熱心なの？

でも突っ込んでやる気出されたら困るし、なんか苦手なタイプだ。きみはさ、クラスや家族に復讐したいって思ったことはない？」

「復讐、ですか……」

「例えばみんな自分と同じ目に会えばいいとか、みんな殺してやるとかさ」

「……思ったことはありませんよ」

「ないなんて言い切れない。」

「みんな死ねばいいのに、なんて思ったことは数え切れない。」

「ふーん」

加須さんの眼がなんとなく冷たくなった気がする。

「でもそれは他に選択肢がなかったからです。逃げることも戦うこともできなくて、恨むことしかできなかった。今は……やりたいことがあるんです」

「なるほどにゃー、よくわかったにゃー。できるといいにゃ、やりたいこと」

「ありがとうございます……」

応援されてるんだろうけど……話し方がちょっとイラっとくる。

ただ、誰かに似てる気がした。

「あ のっ」

「ん？」

「ぼ、僕のごことは忘れてください」

「言われなくてもー男に使うための脳みそなんてそんなに存在しないのだー」

ひらひらと手を振りながら加須さんはどこかに行ってしまった。

忘れるな、と言うのは逆効果だったかもしれない。でもこれ以上に僕ができることなんてない。

そうだ。別に顔や声が似てるわけじゃないんだけど

なんとなくミコトに似てる気がしたんだ。

僕のやりたいことが……。

目的の物が買えたから帰ることにした。

数時間前から暗く重たい雲が空一面に広がり始めていた。雨になつたらきつと降りつくすまでやんでくれない。急いで帰らなきゃ。

だけどゲームセンターの前にあるクレーンゲームが目に入った。

「そついえば、部屋にあるぬいぐるみは一つだけだなあ」

急いで帰らなきゃいけないけど……少しくらいなら大丈夫かな。

僕は自分がもともと持っていた財布の中から小銭を出して五回分の料金を払った。得意な方だからこれだけあれば確実に一つは取れる。

「えっと、どれにしようかな……あ」

ガラスケースの中に、小悪魔をモチーフにした女の子の人形。誰かが失敗したんだろ、頭から他のぬいぐるみの中に埋もれてしまい難易度が格段にはねあがっていた。他にあるのはメロンやバナナの形のミニクッション。補充されたんだろうけどそのせいで黒い人形の場違い感があがっていた。

「あれにしようかな」

部屋の中にある丸いぬいぐるみのことを考えると果物のミニクッションの方が釣り合いがとれそうだ。

でもなんとなく、僕はあの人形をとらなきゃいけない気がした。

頭を狙うのは無理。狙うとしたらびよっこり出ている小さな腕だな。僕にとっては中くらいの難易度つてとこだ。

思ったとおり三回目のチャレンジでとれた。あとの二回は全然だめだったけど。

「エス、喜んでくれるかな……って雨降ってきた!」

僕は人形が濡れないようにバッグの中に入れて、周りを確認することなくエスの家へと急いだ。

誰のものでもない夢

誰のものでもない夢

ぞあぞあぞあぞあぞあ

ぞあぞあぞあぞあぞあ。

ノイズのような音が響く。

ぱらぱらと降りだした雨はいつの間にか滝になって視界を覆い始めた。まるで世界全てが壊れたテレビの画面みたいだ。もし本当にそうだとしてみきつと誰も気付かないはず。

傘を差して出歩いてても全身がびしょ濡れになるほどの大雨だった。わざわざ外を出歩こうとする存在はいない。

二つ以外は。

「こんにちは、こんな雨の日にお出かけかい？ それとも食事？ 早く帰らないと心配してるんじゃないの、亮一がさ」

そこは誰も見ていない場所。いつか少年が自分を殺そうとした公園だったかもしれないし、陸上部の少女が行方を断った場所かもしれない。まったく関係のない場所の可能性だってある。

雨に刃を濡らせながらにっとうと無邪気に笑うミコトと

何事もないかのようにくるくると差した傘の柄を回し続けるエス。

「……あなたは どうして 亮一のことを知ってるの？」

「どうしてだと思おう？ 問いかけてみなよ、『エス』にさ」

「あなた……やっぱり」

「答えは教えてもらったかい？　じゃあさっさと共食いといこうよ、化け物らしくさー！」

ミコトは走り出す。あの時と同じように。エスは動かない。けどミコトの肩が突然消滅する。腕と一緒にナイフが落ちる前にミコトは左手でナイフをすくいあげ、足を踏み込みエスの体へと突き出した。エスの姿は溶けるように消えた。

そっという夢。

「……なるほど、そこだね？」

左手のナイフを投げ捨て腰のポーチを探るミコト。

中から現れたのは鉄塊。

本物の拳銃。

何も見えてないはずの右を確かめながら撃った。

「きゃっつー！」

小さな悲鳴。

消えたはずのエスの姿が突然現れた。

くるくると回ってエス崩れ落ちた。

くるくると回ったドレスが歪な円を描いて地面に広がった。

歪な円の中心でエスは片方の腕を押さえながらミコトをにらみ上げた。指の間からどくどくと美しい赤の色が流れている。

たくさんさんの血。

「大当たりじゃなかったけど、ハズレでもないってところか。こっちは本物の武器を使っているってのにいつも逃げられてたからね。だから化け物同士ならどうかなってあの二人をけしかけてみたんだ。横から見てたからね、やっと気付いたよ。

自分に似た別の何かを見せているうちに、自分は誰にも見えない

という夢を見ていたわけだ。ネタがばれたらつまらないもんだけど、ずいぶんと苦労させられたねー。まさか『誰か』に聞くわけにもいかないからさ」

「聞けばよかったのに。きつと教えてくれたわ」

「そしてお前みたいに何もかも自我を捨ててしまえって？ 同類増やすのもいい加減にしときなよ、糞人形」

「私はお友達を増やしてるだけよ。あなたこそ『エス』に会ったのなら抵抗なんておやめなさいな」

沈黙する少女。

次の瞬間、目を見開いて驚いた。

「私……何も考えられない……」

「当然さ、痛いんだから。夢は夢、所詮現実には勝てるわけがない。そう夢といえば、亮一との生活は楽しかったかい、糞人形。化け物が見る夢としては上等だったね。でも夢は夢さ。都合の悪いことを考えずに生きていくなんてできない」

「……どうして亮一のこと知ってるの。私は教えたくなかったはずなのに」

「簡単だよ、調べたんだ。なんでもかんでもわからないことをエスに聞いているから深く触れすぎちゃったんだね。あつははかわいそうに。」

……ボクはね、あのちっぽけな世界の中にずっといるつもりならもう関与しないと決めてたんだ。亮一のところにはボクの知り合いを行かせたよ。ちゃんと生きてる存在さ」

「亮一にひどいことしたら許さない」

「さんざんひどいことしてきたお前が言うかなー」

銃身をくるくると回しながらミコトは落ちたナイフを拾い上げた。消えたはずの右肩は当然のように無傷だ。

「さすがに何発もパンパン撃ってたら気付かれちゃうからね。今日が雨の日でよかった」

ミコトはゆっくりとエスに向かって歩き、目の前に立った。

地に立つ者と、跪いたままの者。
対照的な姿は勝敗さえも示している。

「誰かのことを心配するのかい、化け物」

「私は……人間よ」

「どうしてそう思う?」

「人として隣に並んでくれる方がいるから」

「それが同じ化け物でも?」

「人として生きてはいけないの?」

「……」

「一度は人として生まれてきたのよ。人として生きたいと願ってもいいはずよ」

「……そう思うなら、お前は誰かの存在を食べるべきじゃなかった」

「じゃあどうして私達は化け物になってしまったの!」

「どうして化け物になったのか『エス』に聞いても答えてくれない。私が望んだなら納得もするわ、人として生まれたと誤解した化け物でもいい。でも私だって一度は人として生まれてきたのよ。人形でも化け物でもないわ!

……誰かを食べるつもりなんてなかったと言って信用してくれる?」

「さあ?」

「さみしかったのよ、ずっと。人として並んでくれる誰かの隣に立ちたかったのよ。でも世界は私に優しくくない……人として生まれたのに一度も人として生きることを許してくれなかった。だから私の中に世界を創る。私に優しい、私だけの世界を。そのために私は化け物になったのでしょう。そう思わないと、私に食べられた七日の意味は……」

うつむいたエスをミコトはただ冷たく見下ろした。

「カミサマきどりかい、化け物。お前はただ誰かを喰い続けたいから誰かのせいにしただけ。誰かを喰うことを選んだのは世界でも人間でも、神様でも、お前が食ってしまった誰かでも、お前の中にいる誰かでもない。お前自身さ」

肯定もせず否定もせずエスはうつむき続けた。

「そんなに人として生きたいのなら……人として死になよ」

ミコトの右手が大きく振りかぶられた。

エスは、ドレスの少女は瞼を閉じて待つしかなかった。死を。

だけどナイフが人形を切り裂くことはなかった。

いつの間にか少女の傍らにミコトが座り込んでいた。ミコトは傷がない方の肩を抱えて無理矢理立ち上がらせた。

「その傷、専門家に見てもらわないと近いうちに死ぬだろうね。もちろんボク達が病院に行くなんて無理。痛む腕をひきずりながら夢を見るのも難しいよね。だから連れてってやるよ、お前を人として見てくれるヤツのところに。」

……それと、一度も人として生きたことないなんて言っな。そいつに失礼だろう」

6・もう誰も覚えていない男子中学生の夢

6・もう誰も覚えていない男子中学生の夢

嫌な予感というべきなんだろうか。

僕の中の『誰か』に教えてもらったことかもしれない。

……なんとなくこうなっていることはわかっていた。

エスが腕を押さえながら家に戻ってきたのは僕よりもずっと後だった。指の間からは今もぼたぼたと血が垂れていたし、何よりただでさえ白いエスのいつもより青ざめた顔が重傷だということを教えてくれた。

玄関の向こうに誰かがいたような気がした。でも外はずいぶんの雨だったから見間違いだっただかもしれない。それにもし見間違いやなくて近所の人ならエスや僕のことを知られたら大騒ぎになる。むしろこんなエスに気付かなかったことを幸運に思うべきだ。

それより傷を、エスの腕をどうにかしなきゃ。

「亮……」

「待ってて、すぐ戻るから！」

玄関に痛みに伏せたままのエスを残して僕は奥の部屋へと駆け出した。

包帯、傷薬、痛み止め、手当てするものならなんでもいい。できるだけのことはしたい。僕はまだ入ったこともない部屋に入り手当たりしだいにタンスや机の中を漁った。

「なんでこの家は普通の物が置いてないんだよ！」
僕はやけくそ気味に叫ぶ。

しばらくこの家ですごして気付いたことがある。
この家は普通に暮らすためにできていない。
エス以外のもう一人の痕跡は明らかなのにそのもう一人が暮らし
て存在するはずの物が少なすぎる。

たぶん『もう一人』は別の家で暮らしていたんだろう。自分は部
屋にこもるとエスに嘘を吐きながら。

見つかるのはエスのいろんな姿を撮った写真や、球体人形。もう
一人はエスを人間だと思つてなかった。全部燃やしてやりたかった。
でもそんなことしてる場合じゃない。

薬も包帯も見つからない。仕方ないから僕は洗面器に水を組んで、
何枚かのタオルを掴んでエスのもとへと戻った。

「お願い亮一、隣にいて……？」
弱々しくエスが呟く。

「腕を見せて」

僕が言うつとエスは逆に腕を隠そうとした。

「だめだ、エス。ちゃんと手当てしないと」

「でも……とても汚いから。きつと見ない方が」

「君のひどい姿なら最初に見ている。だから、ほら」

僕はまだ隠そうとするエスの腕を強引に引っ張った。エスが小さ
く悲鳴をあげるけど聞かないふりをした。

確かにひどかった。思わず眉をひそめてしまったけど、汚いと思
つたからじゃない。

僕が手当てしようともあまり変わらないことがわかったから。

ちぎれた黒い袖の向こう、爆発したように腕がねじれていた。ち
ぎれた筋肉の上に白い塊が乗っている。骨だろうか。

あまり変わらないだろうけど、僕はタオルでエスの傷を柔らかく
包み込んだ。あつという間にタオルが鮮血に染まる。

これはあのときのような夢じゃない。

鉄臭い臭いがこれでもかと僕に現実を突きつけてくる。そして、こんなことができるだろう人物はおそらく。

「あの子に会ったんだ？」

「……………」

エスは返事をしなかった。肯定はなかったけど、たぶんミコトだ。あの子以外にこんなことできる人はいない。

ミコトを恨んだり憎むつもりはない。どこかでいつかこうなるとわかっていた。もしかしたらそれも僕の中の誰かが教えてくれたことかもしれないけど、でも。

誰かをアンチカテゴリにして喰い続けたエス。

僕達を化け物と断定して狩り続けるミコト。

どちらが人間にとっての正義かなんて教えてくれなくなっただけだ。わかることだ。

「亮……………化け物が人として生きることが望むのは悪いことなの？ 無事な方の手で僕の服をつかみ、すぐるようにエスは答えを求めた。」

「……………」

「それとも人として生きたかった子供を化け物に変えた世界が悪いの？」

「エス、僕は……………」

一回、二回。僕は軽く深呼吸しながら心を決めた。

今からエスを傷つけるかもしれない。

「僕は、化け物が人として生きることが望むのは悪いことだと思う」

「……………そうね」

ふう、とエスはため息を吐いた。安堵のため息。柔らかくなった表情に小さな笑みが浮かんだ。

エスもわかっていただろう。

人にとって人の存在を喰うアンチカテゴリは化け物。悪。たとえばそれがもともとどんな存在であっても変わりはない。

「ねえエス。君はどうして自分がアンチカテゴリになったと思う？」

「私が『エス』に触れたから？」

「ううん、原因じゃなくて、理由。どうして僕達がアンチカテゴリになったのか」

「それは……」

エスは黙り込んだ。

きっと自分の中の誰かに聞いているんだろう。僕の中にもいる誰かに。

「……わからないわ」

は、とエスは小さくため息を吐いた。苦しいんだろう。痛いはずだ。こんな痛み伝えたくないという思いと知ってほしいという思いが僕の内側に染み出してくる。

もしかしたら僕はエスみたいに自分の名前を忘れてしまうのかもしれない。

やりたいことがあったなんて忘れて誰かの存在を消してしまうのかもしれない。

もう、そうなるのかもしれない。

だからせめて辛そうなエスの代わりに僕がしゃべることにした。

「これは僕が思うことだから本当は違うのかもしれない。でも聞いて。」

僕はずっといじめられてた。選択肢を間違えたんじゃないやなくて、運が悪かったんだ。もしかしたらいじめられてたのは僕の友達で、アンチカテゴリになったのも彼だったかもしれない。だから僕がアンチカテゴリになったことは意味がないことなんだ」

「……………」

それは私も？

口に出さなくても心に聞かなくてもエスの目がそう聞いていた。だから僕はうなずいた。

「その、どうしてなんて聞いておいてなんだけど、僕も理由はわからない。でもミコトは言った。アンチカテゴリが死んで死体がなくなるのは『誰か』に都合がいいからって。たぶん『誰か』にとつて

アンチカテゴリーは必要なんだ。だから『誰か』にとって誰がアンチカテゴリーでもきつと意味はない。

でもエスの友達になったのも、ずっとエスの家にいたのも、エスの部屋を造ったのも僕が選んだことだ。これまで誰も食べてないのももちろん」

「私が七日を食べたのは誰かのせいでも、『エス』のせいでも、世界のせいでもなくて、……私のせい、なのね」

「……………」

倒れるようにエスの頭が僕の胸に落ちてきた。肩が震えている。

僕の服を掴む小さな指が血の気を失せるほどに握りしめられている。何よりも声を殺した泣き声が僕の耳に届いたから。

七日というのが誰かはわからない。

もしかしたら前に聞いた一人目なのかもしれない。

きつと食べたくなかったんだろう、本当は。

「そうかもしれない。でもそうじゃないかもしれない。だって『誰か』が僕達をアンチカテゴリーにしなかったら普通に出会えたかもしれないんだからさ」

出会わなかったかもしれない可能性は考えなくなかった。

僕はエスの背中を軽く抱いた。

無駄だと思いつつも僕は祈った。

これから君にさせることを許してほしい。

僕はもう一度息を吸い込んだ。

これからとても残酷なことを言う。

誰に聞いても正しくないと言うだろう。

どんな倫理から見てもどんなカテゴリーの人間から見てもきつと正しくない。

たぶん、エスから見ても。

「僕は誰の存在も食べたことないから本当のことはまだわからない

んだけど、エスの中にはいろんな人の存在があるんだよね」

「ええ」

「つまりいろんな人が君って存在になっただってことだよな」

「ええ」

「君は普通の食事なんてしなかった。なのに餓えてないのは誰かが君になり続けたからだよね」

「……ええ、おそらく」

「僕も君になれる？」

「え……？」

戸惑うように聞き返すエス。だからもう一度言った。

「僕が君になっただら君は助かるかい？」

「……っ！ そんなの、助かるはずがないわ」

僕から視線をそらしてエスは答えた。

「エス。正直に答えて」

「それは……」

口ごもり、視線を彷徨わせ

「……わからないわ。そう答えるしかないの」

一度だけ僕を窺うように見てから答えてくれた。

その態度は僕の問いを肯定していた。

同時に否定したいとも。

「だってそれって私が亮一を……」

「うんエス。僕を食べて」

「できるわけがないわ！ 私は、私は亮一の友達なのよ！ 友達を食べるなんて、私は、もう、やりたくないんです、だからお願い、そんなひどいこと……言わないで」

僕にすがりながらも僕の顔を見ようとしないエスの顔を両手で包

み込んだ。

まるであの時みたいだ。

エスが僕の無意識に従ってキスしたあの時。

「エス。僕達は人でなしだ。人を喰う化け物だ。だから化け物として行きよう。僕を喰べるんだエス。そして君は生きて」

人として正しくないのなら化け物として生きるしかない。

そしてそれが彼女を生かす唯一の方法なら僕はそれを選ぼう。

僕達を見捨てた世界より、ただ一人、僕を必要としてくれた彼女のために。

……違う。

僕を、そして彼女を必要としなかった世界に僕が復讐するために。

「嫌、絶対に嫌！ 嫌なの、本当に嫌なの！ お願い亮一、いじわるなんか言わないでずっと隣にいて。亮一を食えること以外はなんでもするから、お願い。独りじゃないって、いらぬ存在じゃなかったって思いたいだけなの。できるなら私が死の淵に沈むそのときまで……」

エスは叫んだ。ひどい雨の日でなかったらきつと外に聞こえていた。傷の痛みも忘れてエスは泣いていた。

こんな感情をむき出しにするエスは初めて見る。

そういえば哀しい顔や不満な顔をしたことはあっても咎められたことは一度もないっけ。もしかしたらエスは否定することを教えられてなかったかもしれない。

ごめん。ごめんなさい。

彼女はいつだって人形だった。

人間でも化け物でもなく人形だった。

人間になりたかった人形だ。

僕の我侷を押し付けてごめん。

でもどうせなら、最後まで我侷を聞いてほしいんだ。

「でもその後はどうすればいいんだい？ 君が死んだその後は」

「……え？」

エスは黙り込んだ。

そうだね、普通自分の死んだ後のことなんて考えないよね。必要ないもの。

でも僕達は違う。

「残された僕は君の黒いドレスを掴んですすり泣けばいいの？ それとも君に怪我を負わせた誰かを探し出して殺せばいいの？」

「……無理よ……絶対無理。だって亮一は優しいから誰かを食べること殺すこともできないわ。亮一までこんな痛みにあうのは……」

エスは僕の服を掴んだままうつむいて首を振った。

僕は卑怯だ。

エスにこのまま二人で死ぬという選択肢を選ばせなかった。

きっとそれが一番正しく、誰もが幸せになる選択だということはわかってる。

だけど。

「エス、君は生きるんだ。君は生きて、いつか自分を救うんだ。世界で独りだけ僕を認めてくれた君が世界に認められないなんて、僕は許さない。

それにね、生きる意味なんて自分で作るしかないんだ。たとえ世界中の人間や世界そのものが僕達をいららないなんて言っても絶対に受け入れたりしない

君は僕を救ってくれた。理由なんて関係ない、僕の命は君のものだ。僕が君になるというのなら君が生きている限り僕は死なない」

君がいない世界なんて僕は許さない。

たとえ僕の存在がなかったことにされたとしても。

きっとこの心の声はエスに届いている。隠すつもりもない。どうせ彼女のものになるといふのなら僕が僕であるうちに届けておきたい。

ごめんね。

「部屋、最後までちゃんと造れなくてごめんね」

「いいの、気にしなくても。だって亮一は私のためにがんばってくれた。それだけでいいの」

「本当は……本当はこれくらいやりたかったんだ」

もしも僕に夢を現実にする力があるなら。

現実でなくてもいい。

彼女に、エスに見せてあげるだけでいい。

普通の家を、生活をエスに見せてあげたい。

「……亮一、あなた……」

「エスの言うとおりだった。本当に必要だったら『エス』に教えてもらえた」

針金のついた階段の手すりはよく磨かれた金属の手すりに。

黒と白に塗られた扉は二スガ利いた合板の扉に。

毒々しい蛍光ピンクの部屋は柔らかいソファが置いてある居間に。

「本当は、もっと大切なものも想像してみたかったんだけど」

さすがに人を想像するのは無理だった。

エスの本当の家族。

僕の家族は……思い出したくないし、エスに同じ思いをさせたくない。

「いえ、いいの。亮一は私の友達で家族だから。だからこれで十分なの。……ねえ、亮一、約束覚えてる？」

「うん」

「亮一がやってほしいことは口で言うのよね」

「うん」

「私もお願い言っただいい？」

「友達だからね」

「あのね、キスしてほしいの」

僕をまっすぐに見たままエスは言った。

「……いいよ」

もうエスの顔は両手で包んでいたから僕はそのまま唇を落とした。
冷たかった。

柔らかさは変わらないのに冷たかった。
なぜか少しだけ血の味がした。

おいしかった。

「……本当はもっと触れてほしいの。亮一がやりたいことを私もやりたいの。いけないことをしたときは叱ってほしいの。私の言うことしか聞かない友達なんていらないの」

「できるさ、いつかきつと。そうしたいと思うなら君の中の世界はそうなる」

「その中ならまた亮一に会える？」

「会えるさ」

根拠なんてまるでないのに僕は断言した。

正しい選択肢なんて必要ない。

人は生まれながらにして幸福へと努力する生き物だ。

だとしたら幸せになろうとし続けた僕は人間で、エスも人間だ。

たとえ、間違っけていても、無理矢理結果を飲み込まなきゃいけない
なくなっても。

「亮一がキスしてくれたから、私も亮一の言うこと聞かなきゃね」

「うん」

「じゃあ いただきます」

それが僕の最後の記憶。

それが亮一の最後の記憶。

「でもね、本当はね、もう死にたかったの」

彼が残してくれた人形を両腕で抱いて私は泣いた。

彼は私。私は私。私は誰？

彼が望むことを私はした。

彼が望んだから何も否定しなかった。

彼が望んだから彼を生かした。

彼が望んだから彼の存在を食べた。

彼を生かすために私は生きる。

死にたかった私は死にたかった彼のために生きる。

ああ、私は何のために生きているんだろう。

私は誰？

蛇足・化け物狩りミロトの夢

蛇足・化け物狩りミロトの夢

ああ、ほんとに最悪だよ。

水の吸いすぎでべこべこになった靴をボクは踏んづけた。

びゆるつと変な音をたてて水が隙間から出て行く。

髪から垂れた水滴が目に入って痛いし、じめつとした服が肌に貼りついて気持ち悪い。

何よりあいつを運んだときについた血がまだ服にこびりついている。

「雨で流れると思ったのになあ」

服を掴んでぎゅうつと絞ってみた。薄く赤い水が染み出てきた。

でも全部落ちることはなさそうだ。

「結構気に入ってたんだけどな。ま、いつかな」

傘も差さずにボクはひたひたと歩き続けた。

ひたひたと。

ずっと独りで。

ボク自身はアンチカテゴリだからもう結構たってる気もするんだけど、実はアンチカテゴリが世間に認識されてからまだ一年しかたっていない。

その前は謎の連続惨殺事件として扱われていた。

犯人も被害者も共通点がるでない、共通することといえば全員

惨たらしく殺されていること。失踪者の数も増えてはいるんだけど、こっちはニートとかネカフエに住んでる人と同じ扱いになってた。んで、政府がアンチカテゴリーに気付いてなかったかというところでもなかった。

気付いてはいたけどあえて放置していた。

理由は被害者の特徴にある。

被害者には子供が多い。

大人もいることにはいるんだけど多いのは圧倒的に子供。少ないのは芸能人や政治家みたいに大勢の人に認知されてる人。

だから政府は見捨てた。

問題にならないことを選択した。

だけど一年前、政府は今までの態度を改め『アンチカテゴリー』という病気を正式に発表した。

どうしてそうしたかってのはいろいろ理由はあるんだけど、一番の理由は

やっぱりボクかな。

ここ最近の不況で倒産する会社は増えた。

でもある男が作った会社は相変わらず存在していた。

本物の社長なんてとつくの昔にいなくなってるのにね。

社長の姿を知ってる人間は誰もいない。仕事のやり取りはメールだけ。電話も数年前からは途絶えていた。

だから死んでも誰も気付かない。

誰にもわからない死体の処分方法は教えてもらっていた。もちろん化け物自身からね。

そしてボクは社長専用のメルアドから見えそうな人間にメールを送ったわけ。

ま、それからいろいろあったんだけど、ざっくり説明すると政府の偉い人にコネ作ってアンチカテゴリーについてボクが知ってることを全部説明した。

だからアンチカテゴリーは隠蔽するより公表した方が処理しやすいだろうってことで病名がついた。

先に患者を始末する人達はいたみたいだからボクはその人達に協力することになった。

もちろん顔を合わせて直接話したら感染するだろうからやり取りは仕事と同じようにメールでね。

とりあえずの今のボクの住処はあの広いけど狭い屋敷じゃない。

あの屋敷は壊して更地にしてビルを建てた。周りは高い壁に囲まれている。金持ち用のやたら広い街なんで誰も関わろうとはしない。しかもヤのつく職業の人が出入りしてるって噂まで流れてる。

流したのはボクだけどね。

木の影に隠れるように存在する扉がある。ボクは横にあるボタンを押してしばらく待った。扉が開いたから濡れた体をひきずるように中に入った。後で片付けが面倒そうだけど、ま、いいか。このオーナーはボクだもん。

この中にあるのはこの国でたった一つのアンチカテゴリー保護施設だ。

ここにいるのは化け物じゃない。人を一度も喰わなかった人達だけ。条件はそれだけじゃない。

化け物を殺すだけの知識や技能を持った人達だけ。

何の取り得もないごく普通の中学生とか、ま、対象外だね。

べちゃべちゃと床に水溜りを作りながら歩くと、さっと奥に移動するいくつかの気配を感じた。

ボク達は必要以上に顔をつき合わせたりしない。

共食いする可能性があるからね。

ただどこにでも例外はあるってもので……

「よ、お帰りミコトきゅん。水もしたたるいい男って奴？ それと

も男の娘？」

「……その呼び方やめてって言ったよね」
「うーい」

役割を果たしていない研修室で、机に脚を乗せて椅子を思い切り傾けて座っている変な人、加須さんに声をかけられた。首には下着姿のおねーさんが絡みついている。

「あのね加須さん」

「んー、もしかしてこのおねーさんが気になるかにゃ。シヨタには刺激が強いかもしれないね。むふ」

「そーじゃなくて。この力はそういうために使うんじゃないから」

「じゃあどういうため？」

「……とにかく、そういうことしていると書類捏造して殺すから」
「おっかないにゃー」

おねーさんは最初からいなかったかのようにかき消えた。幻覚だから最初からいないのは当然なんだけどね。

加須さんはとことんマイペース、というか生まれつき頭のネジをはめる部分がないような人。ま、生まれつきで言ったらボクも人のことは言えないんだけどね。だから本当なら連絡を取り合わないボク達はたまに連絡を取り合ってる。

「ところでちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「なんだらー？」

「なんで鈴平亮一を殺さなかったの？」

「殺せなんて言っただけでしょ」

「でもアンチカテゴリだったでしょ」

「化け物じゃなかったよ」

「理由は？」

「俺の勘」

「……ふーん……くしっ」

「着替えてくればー？ あと銃貸せ。整備しておくから」
「ん」

濡れたポーチの中から手に重い塊を出して加須さんに渡した。
渡した後で気付いた。

……取りに行かなきゃいけないじゃん。

体を拭いて着替えて加須さんのところに行くときまだ分解中だった。
……もしかしてわざと遅くやってない？

ボクは椅子の一つに腰かけてぶらぶらと脚を揺らした。

……なんだか眠い。

雨に降られて体は冷え切っていたけどこの部屋は空調が利いてるから暖かい。

銃の整備はまだ終わらない。もしかしてわざとやってる？

なんて今のボクには咎めるだけの気力も残ってないんだけどさ。

「……ねえ加須さん」

「んー、なんだらー」

「もしかしたら、ボク、好きだったのかも」

「んー、加須さんの守備範囲は女子中学生から還暦までですけど、さすがにシヨタはなあ。悪いけど他をあたってくれないか。禁断の愛に目覚めちゃうくらいなら加須さんがイケメンで本当にゴメン」「あんたじゃないよ、気持ち悪い。勘違いされないように自慢のイケメン斬り刻んであげようか？」

「んー、お断りデス」

「それにね見た目は勘違いされちゃうけど、ちゃんと男なんだよ？」

「ん、となると好きだったのは女の子ですかにゃ」

「当たり前」

「んじゃ誰？」

「……」

もつやだこの人。

意地の悪い聞き方するんだもん。

「整備ありがと、残りはボクがするよ」

ボクは立ち上がって机の上に散らばってる部品をかき集めようとした。なのに手首をしっかりと掴まれてしまった。

「あつはっはー、待ちたまえ青少年。恋の悩みなら経験豊富な先輩に相談するのが一番だよ。それに不純異性交遊をしてないか確かめなきゃいけないからね。そう、これは取り調べなんだ。いいから詳しく、原稿用紙三百枚以上で話してもらおうか」

「本当の理由は？」

「面白そうだからっ！ こんな体になってから誰ともろくに付き合いえねーからさ。いーから娯楽提供しろよー、つまんねーんだよー、誰かアンチカテゴリにして食べちゃうぞ」

「いいよ、その時はボクが殺してあげるから」

「つつひょう」

加須さんが両手をあげたからボクの手は自由になった。

しばらく部屋にひきこもっておこうかな。

なんて考えたけどボクは元の場所に腰かけた。

「行かないの？」

「……別に。疲れてるし、まだ整備終わってないし」

「ふーん」

かちやかちやと小さく鳴る加須さんの手元を見る。

やけに丁寧、というかやっぱりわざと？

でも……怒るのめんどくさい。

「きっと彼女は生きてるよ」

「根拠は？」

「ボクの勘」

「ふーん」

「でも亮一は死んだ。……ある意味では生きてるのかもね」

勘とはいっけど根拠はある。

彼女が助かる方法は一つだけあった。

それに彼が気付いているかどうか、それだけだから。

「ボクさ、なんとなくこうなる気がしてたよ」

加須さんは亮一を殺さないし、ボクは彼女を殺しきれない。

そして彼女だけが生き残る。

わざわざ今考えなくてもわかること。

ただ、考えたくなかっただけ。

「ミコトが好きな彼女は、」

「かもしれないだけ」

「ほい、好きかもしれない彼女は死んでるかもしれないけど彼を犠牲にして生きてるかもしれないってことね。……つまり彼を殺して彼女を寝取りたかったってことかじゃ？」

「嫌な言い方するねー、ほんとに。適当な理由つけてクビにしてもいいんだよ。もちろんその後はアンチカテゴリー患者として始末するけど」

「うう、上司がモラハラしてきます、辛いです……」

「……だいたい、寝取るってのは付き合うの前提でしょ」

「ま、そだね」

「別に付き合いたくないもん」

「んじゃミコトきゅんはどーしたかったわけ」

「……よくわかんない。本当にずっと小さな世界で満足して暮らしているならそれでもよかった。でも、そうならないことは知ってた。だから……」

「だから殺そうとした？」

「……たぶん」

たぶん、じゃないや。

きっとどうなるうとも満足しなかった。

小さな世界で二人で餓えて死のうとも、共食いに目覚めた亮一と一緒に外の世界で生きようとも、自分の罪に気付いて自分を殺してしまおうとも。

だから 生かそうとした。

選ぶことを後にした。

「あのね、これは例え話だし、何の話かわかんないだろうから聞き流してね」

「んー」

「水を入れたバケツを持つてる人が大勢いるんだ。持つてる水の量でいろんな権利がもらえるから。おいしいご飯が食べられたり、たくさんの人にほめられたり、ちゃんとした生活が送れたり。多い人ほどたくさん人の権利がもらえる。でもね、何かの拍子に水をこぼしちゃった人は別。おいしいご飯も食べれないし、たくさんの人にもほめられなくなる」

「へー、まるで何かみたいだにや」

「そうだね。例え話だしね。でもね、全部の水をこぼしちゃったわけじゃない。全部の水をこぼすと生きる権利さえなくなってしまう。ほんの少しだけ、一滴だけ水が残ってるんだ。 だからもし、元の生活に戻りたかったら、他の人から水を奪うしかない」

「それは……例え話だよな？」

「うん、例え話だし、本当にそうなるとは思わないよ。それに例え水をこぼした人が元の生活に戻ったとしても、きつとその人は

背負いきれないほどの罪を背負った化け物だよ」

そして化け物を世に放ったボクもきつと化け物だ。

化け物同士いつか共食いしよう。

ある大学助教授の手記（未発表）

ある大学助教授の手記（未発表）

諸君らはレミングの集団自殺を知っているだろうか。

鼠の集団がそろいもそろって海に飛び込むという。

動物は自殺なんてしない。移動の際に数が激減するから誤解された。海に飛び込むというのもただの事故だ。

だがこういふ見方もある。

生物を一つの細胞として考えると種全体を一つの生命として見ることが出来る。

移動の際に減る数を計算に入れてレミングは子供を作る。つまり子供の内の何割かは成長の途中で死ぬことが決定しているわけだ。死ぬ子供がいるから生きる子供がいる。

そしてもう一つ、相変異という言葉がある。

生活条件や一定範囲に生きる個体数の密度により、動物が短い世代で異なった生物に変化してしまうことがある。要するにストレスに適應した生き方を見つけるわけだ。イナゴの大量発生がそれに該当する。

つまりアンチカテゴリーも同じようなものではないだろうか。

人間が簡単に死ぬ時代は過ぎた。

心臓さえ動いていれば脳が死んでも生きている時代になった。

増えすぎた種は自滅するという。確かに人類は増えすぎたせいで

様々な問題を抱えることになった。最も確実に残酷な救済方法は人間を大量に殺すことだろう。しかも良心の痛みを感じずに。

もし人間全体に意志というものが存在し、種の保存を最優先したとなると、アンチカテゴリーは遺伝子の異常ではなく正常とも言える。ここまで考えたところで私はアンチカテゴリーの研究を辞めた。

きつと人間が考えてはいけないことだ。

それにもしその説が正しかったら私達はアンチカテゴリー患者のおかげで生きていることになる。

誰だって自分を人殺しだと思いたくないだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8608y/>

ExistenceDualism 存在二元論

2011年11月26日00時54分発行